

昭和21年南海大地震調査報告

水路要報 昭和23年刊行(高知分 要約版)

第五管区海上保安本部
海洋情報部

平成23年7月作成

はじめに

昭和 21 年 12 月 21 日 4 時 19 分過ぎに、潮岬南方沖を震源とするマグニチュード 8.0 の南海大地震が発生し、南西日本一帯では地震動、津波による甚大な被害が発生しました。

海上保安庁海洋情報部の前身である水路部（水路局）は、地震発生翌年の昭和 23 年 1 月から 5 月にかけて、各地の津波の状況、それによる被害、土地の隆起・沈降、海岸線の変化、港湾の水深等を実地踏査し、写真や図と合わせた調査の成果を水路要報（増刊号 昭和 23 年発行 昭和 21 年南海大地震調査報告）として取りまとめ公表しました。

オリジナルの水路要報は、①「津波編」、②「地変及び被害編」、③「海底地形編」、の 3 編の構成であり、①②編は、津波・地変・被害の項目について地域や主な港別（123 箇所）に整理されています。

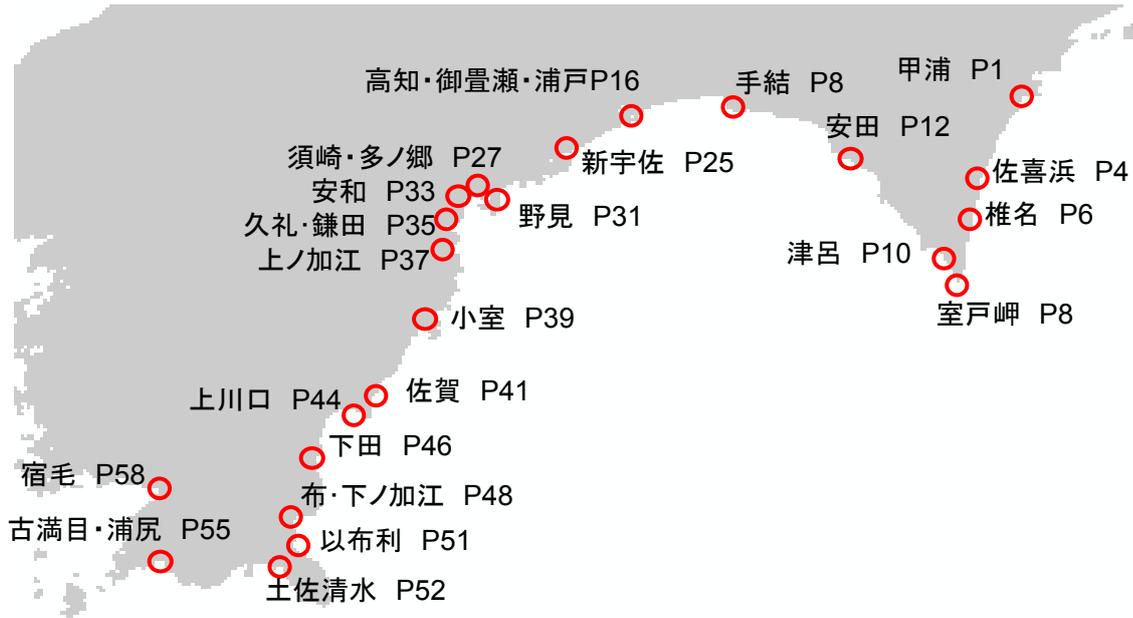
この資料は、①②編のうち、高知県分（25 箇所）に関わる内容を原文のまま抜粋し要約したものです。

今日、東南海・南海地震等の巨大地震に対する防災対策が叫ばれているなか、第五管区海上保安本部では、先人の懸命の努力によって作成されたこの調査報告をネット等で公開することにより、広く多数の方の目に触れ、防災対策の一助となることを願って止みません。

平成 23 年 7 月

第五管区海上保安本部
海洋情報部

索引図



目 次

ページ

ページ

調査結果

高知県

甲浦	1	安和	33
佐喜浜	4	久礼・鎌田	35
椎名	6	上ノ加江	37
室戸岬	8	小室	39
津呂	10	佐賀	41
安田	12	上川口	44
手結	14	下田	46
高知	16	布・下ノ加江	48
御畳瀬	19	以布利	51
浦戸	22	土佐清水	52
新宇佐	25	古満目・浦尻	55
須崎・多ノ郷	27	宿毛	58
野見	31		

付図

各地の津波到達時刻	61
地盤の昇降区域	62
地盤の昇降	63
港湾施設に与えたる被害地区	64
海岸建築物に与えたる被害地区	65
船舶に与えたる被害地区	66
各地の津波の高さ	67

附表

津波一覧表	68
被害一覧表	73

調査結果

高知県

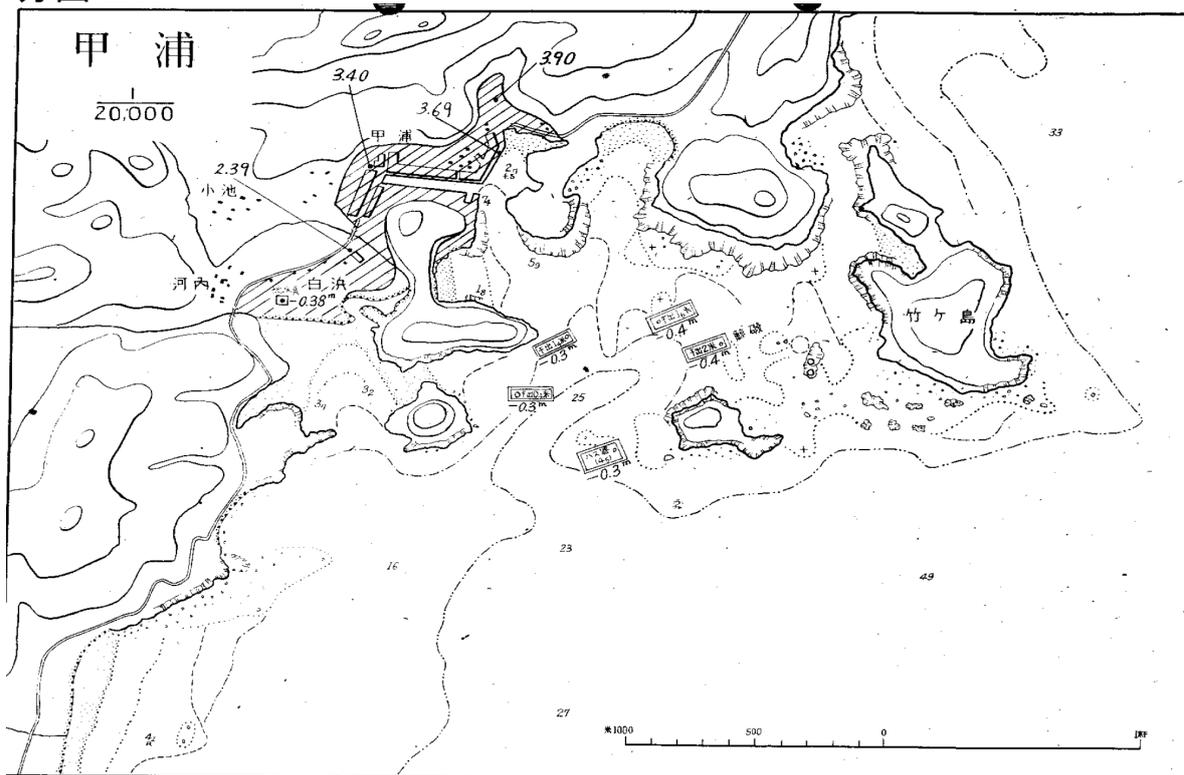
地名	調査項目	内容	
甲浦	津波	津波の状況	地震後10～15分で大潮の高潮面より約2メートル引いて後満潮の様に静かに来襲した。全部で6回、第2波が最高であった。津浪の高さは湾の北端では最も高く3.90メートルで、南端の白濱では最も低く2.1～2.3メートル程度であった(附図No.7参照)。
		海面の状況	波止場内では差し津浪は時計方向に、引返し津浪は反時計方向に渦を巻いた。港内は約5日間濁っていた。津浪前4～5時間に港に港内海面全体に泡が眞白に沸き立つ如く発生した。12月11日より15日迄物すごく速い南流があつて大謀網を流し去つた。
		海震	竹ヶ島南方2～3マイル附近に出漁中の船は機関の急回轉したときの様な感じを受けた。
		発光現象	20日夜より地震前迄南方沖合が明るくなった。又東方に火柱が立ったという者があつた。
		その他	一般に変化なし。但し地震後いぼだいが非常に大漁であつた。
	地変 分図 No.31 参照	地盤の隆沈	港内に散在する諸岩を測定したがその結果は水路局基本水準標のある鯨磯では0.44メートル、高さ4.5メートルの水上岩では0.3メートル、干出1.4メートル岩、同1.6メートル岩、同0.4メートル岩ではそれぞれ0.3メートル、0.4メートル、0.3メートルの沈下となる。又甲浦南西方白浜の地理調査所水準標では0.38メートルの沈下である。
		海岸線の変化	
		井水の変化	震後から味を帯びたが1箇月を経過するに及んで幾分薄くなって来た。
		地震動の状況	壁のき裂は全家屋に及び、その亀裂はおもに縦方向である。かわらの落ちた家屋数は約5割で、ずれたものを加えれば7割ぐらいに達する。特に、砂浜上にある白浜部落では壁、かわら、ガラス等の破損は顕著である。墓石は3割ぐらい倒れ、位置の移動したものを加えればほとんど全部に及ぶ。家屋は全壊1戸、小破50戸を生じた。
	被害 分図 No.31 参照	港湾施設	突堤護岸の数箇所に破損を来たし又給水施設の破壊のため小漁船の使用能力が半減するに至つた。
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数900戸) 津浪に因るもの 地震に因るもの 流失 6戸 全壊 1戸 全壊 14戸 小破 60戸 半壊 2戸 (特に砂浜上にある白浜部落において 小破 400戸 は土台の狂い、柱のねじれ、かわら、 床上浸水 100戸 壁、ガラスの破損は顕著である) 床下浸水 100戸 焼失家屋 700戸(県庁報告による、不確実)
		船舶	被害内訳(全船舶数182隻) 出漁中 2隻(動力船)被害皆無 3隻(ろ船)被害皆無 岸壁係留中 60隻(動力船)半壊25隻、小破35隻 110隻(ろ船)全壊5隻、半壊50隻、小破55隻 1隻(通貨船)沈没 停泊中 5隻(貨物船)被害皆無 1隻(鮮魚運搬船)乗上げ破壊

	<p>その他</p>	<p>道路2箇所決壊、橋りょう3箇所流失 港内は小島や諸岩が点在し実に雑然としている。港の奥部に南方に開口した船だまりがあり分岐して北及び西に延びているが、狭小で小舟のみに便するに過ぎない。河内川は船だまりの西方を走りその河口は船だまり外に注ぐ。この川に沿いわずかに平地が見られる程度で山岳地帯である。港の中心部においては水深7メートル、船だまり口は6メートル、その内側で2メートルできわめて浅い。津浪は船だまり北部奥岸で3.9メートル、西部で3.6メートルを示すが平地が少なく山のふもとに衝突する激浪波のための被害も注目される所である。</p>
--	------------	--

附図第7



分図No.31

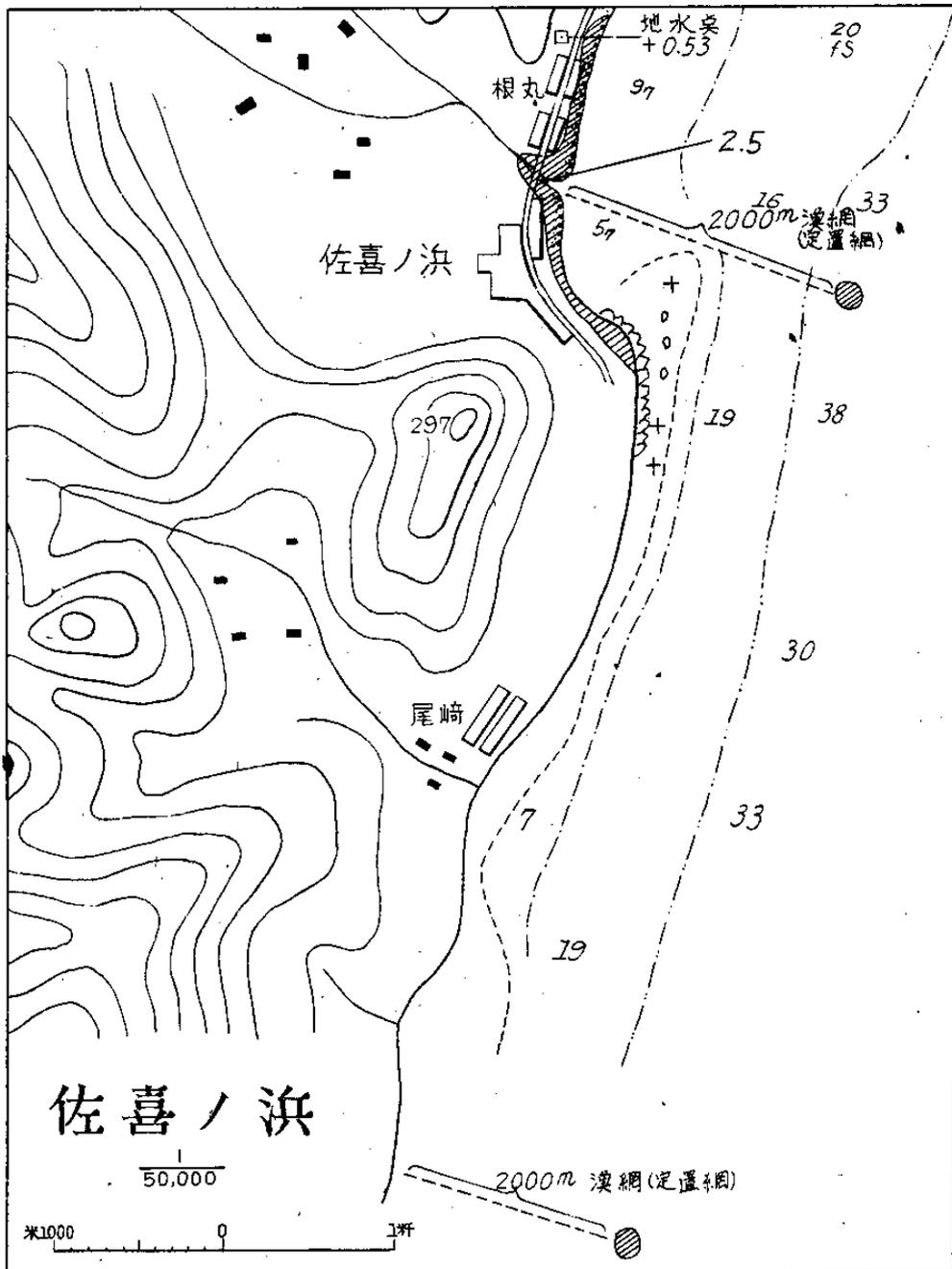


記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数字は隆沈量
	数值	地水点 地理調査所水準標、数字は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向
		+ 隆起 - 沈下 + 隆起 - 沈下

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
佐喜浜	津波	津波の状況	共に土地高く浸水なき為津浪の痕跡が認められないので漁民等の証言で高さを測り、佐喜浜では2.5メートル、椎名では4.4メートルを得た。但し椎名の分は砂濱の海岸での測定である為過大のおそれがある。3メートル程度と見るのが至当と考える。更にこの方面は土地が明かに隆起しておるので実際は之より低いかも知れない。佐喜浜では震後10分位、椎名では震後3～5分で、大きいもの1回来た外は不明であった。(椎名と共通)
		海面の状況	東方1マイル沖で泡が海底から生ずる様になった。
		海震	
		発光現象	地震時に山側の上空が赤くなった。
		その他	地震後は一般に漁が多いようである。
	地変 分図 No.32 参照	地盤の隆沈	佐喜ノ浜部落の北端の地理調査所水準線の測定によれば0.53メートルの隆起である。海岸線の状況からして一般には0.3メートル程度の隆起があるように見られるが港口の船だまりの沖合側は局所的に沈下した。
		海岸線の変化	東西方向の小さき裂が多数見られ、又海岸の所々に崩壊が出来た。
		井水の変化	混濁を生じたが1週間ほどで清澄となった。又震後海底よりあわの発生が見られるに至った。
		地震動の状況	振り時計は全部止まり、壁、障子等は縦のき裂が生じた。石がき、土べいは北東方向にあるものは全部倒壊し、南北方向のものは被害皆無であった。墓石は大部分が転倒したがその方向はおもに西側である。
	被害 分図 No.32 参照	港湾施設	地震に因り護岸数箇所が崩壊し又崩壊物は津浪のため流失し去った。港内の沖合側岸壁中部が約40メートル、山側の岸壁中部は15メートルぐらいの間がそれぞれ崩壊した。
		海岸建築物	
		船舶	被害内訳(全船舶数25隻) 出港中 5隻 被管皆無 岸壁係留中 20隻(動力船)沈没1隻、小破12隻
		その他	定置網1組中破

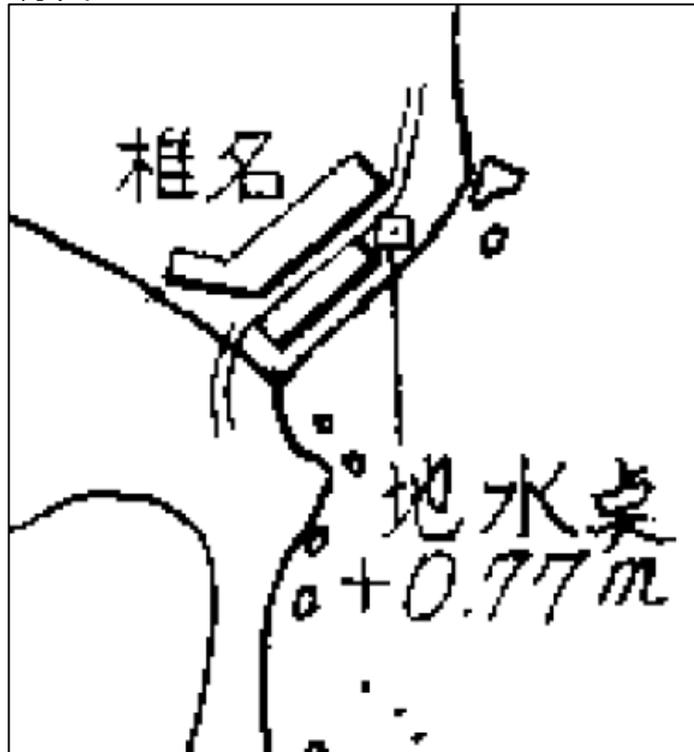
分圖 No.32



記載例	
	数值 浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值 水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值 地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)	験測線
	海面における矢符は津波の進行方向
	+ 隆起 - 沈下 + 隆起 - 沈下

地名	調査項目	内容	
椎名	津波	津波の状況	共に土地高く浸水なき為津浪の痕跡が認められないので漁民等の証言で高さを測り、佐喜濱では2.5メートル、椎名では4.4メートルを得た。但し椎名の分は砂濱の海岸での測定である為過大のおそれがある。3メートル程度と見るのが至当と考える。更にこの方面は土地が明かに隆起しておるので実際は之より低いかも知れない。佐喜濱では震後10分位、椎名では震後3～5分で、大きいもの1回来た外は不明であった。(佐喜濱と共通)
		海面の状況	
		海震	
		発光現象	
	地変	その他	
		地盤の隆沈	
		海岸線の変化	
		井水の変化	
	被害	地震動の状況	
		港湾施設	防波堤に若干のき裂を生じた(地震に因る)。又防波堤の礎石が一部取り去られた。又地盤の上昇に伴い船舶の出入は著しく困難となるに至った。
		海岸建築物	
		船舶	被害内訳(全船舶数27隻) 岸壁係留中 17隻(動力船) 10隻(ろ艇) } ほとんど被害はない
		その他	
分図 No.33 参照			

分図No.33



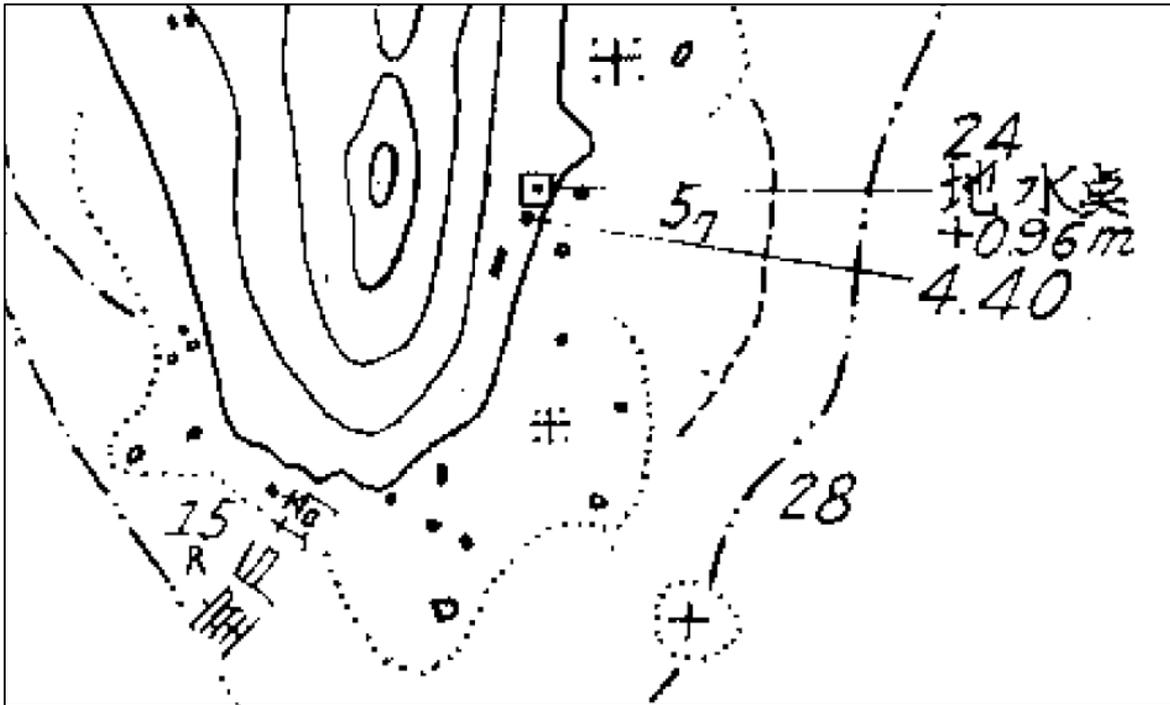
記載例	
	数值 浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值 水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值 地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)	験測線
	海面における矢符は津波の進行方向

+隆起
-沈下
+隆起
-沈下

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
室戸岬	津波	津波の状況	
		海面の状況	
		海震	機関の急回轉した様な震動を受けた、又遠洋漁業船(出漁場所不明)の一部のものは海震を感じ、一部のものは感じなかった。 室戸岬30マイルを航行中のQ45号の事務長からの報告によれば船体が突然がたがたと震動しはじめると同時に船首が前にのめるような感じを覚え丁度暗礁に乗り上げるようでした。それからは10ノットの船足が6ノットしか出なかった。(新聞紙より)
		発光現象	光は認めなかったという者もあるも、津呂では東方に桃色の様な光がパツパツと見えたという者もある。
		その他	地震後ぶり、さばは多少少くなった。いかの漁獲は多くなった。
	地変 分図 No.33 参照	地盤の隆沈	地理調査所水準標の測定結果は椎名においては0.77メートル、室戸埼突堤端部の東側における同所の1等水準標では、0.96メートルそれぞれ隆起した。一般には海岸線の状況からして0.9メートル程度の隆起があったものと見られる。
		海岸線の変化	
		井水の変化	
		地震動の状況	振り時計は全部止まり、大部分の壁はき裂を生じたが壁、かわらの落ちたものはわずかである。墓石は倒れたものは少く、移動は全部のものに見られるが主として北側に前進した。家屋は土台とともに北側に動いたがある一部では幾分時計方向にねじれた傾向がある。
	被害	港湾施設	
		海岸建築物	
		船舶	
		その他	

分図No.33

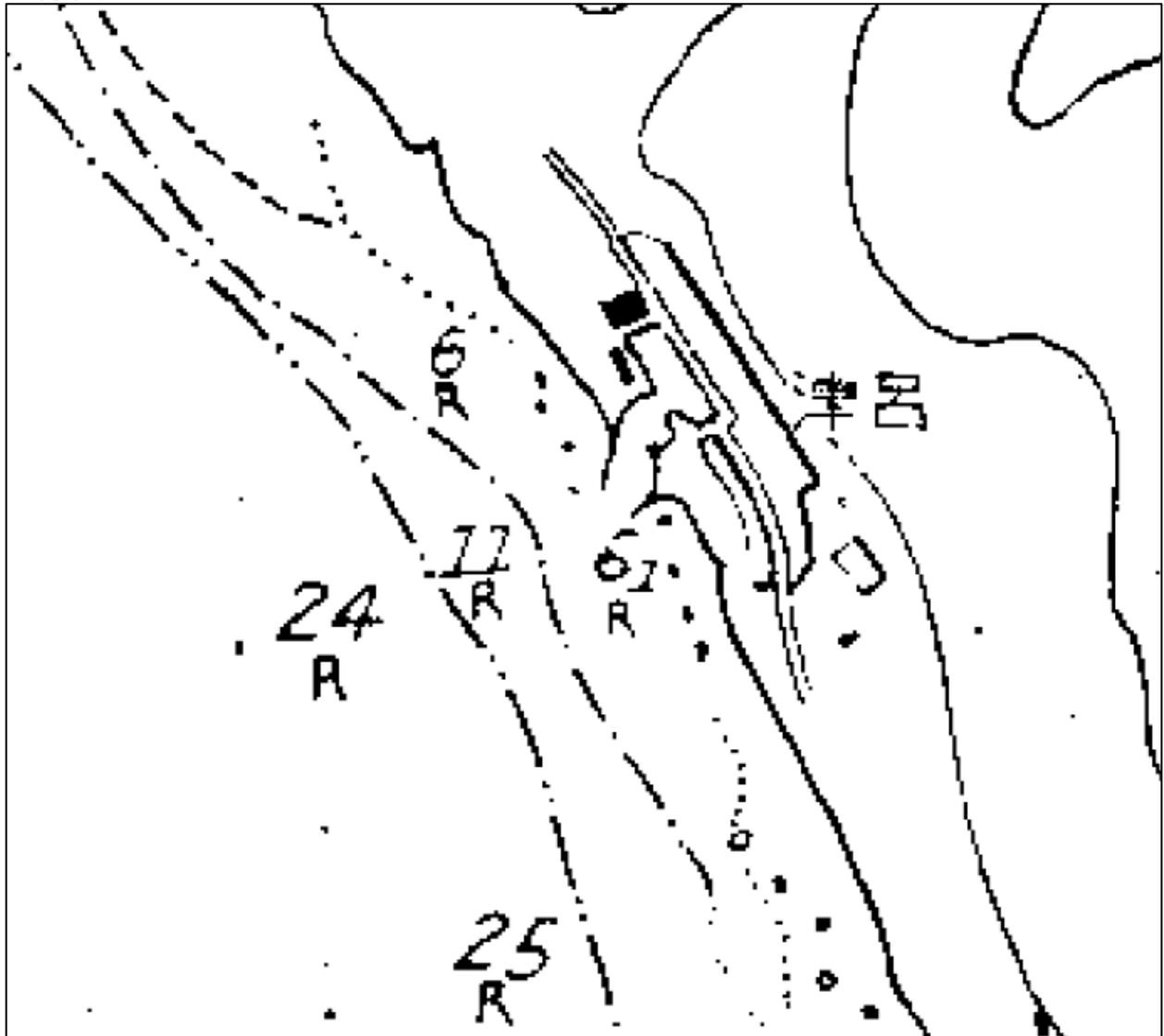


記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值	地下水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向
		+ 隆起 - 沈下
		+ 隆起 - 沈下

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容		
津呂	津波	津波の状況	地震後20～30分して大潮の低潮面より約1.5メートル程引いて後急に押し寄せて来た。船だまりでの津浪の高さは1.42メートルであった。	
		海面の状況		
		海震		
		発光現象		
		その他	当日はどんよりした気持ちの悪い天候であった。	
	地変	地盤の隆沈	地理調査所水準標の測定では0.78メートルの隆起である。一般には海岸線の状況からして1メートル程度の隆起が行われたものと見られる。	
		海岸線の変化	津呂より室戸埼燈台に通ずる道路上には長さ約6メートル、割れ口約0.2メートル、上下約0.6メートルの東西方向の地割れを生じた。又津呂南東の久米次山、山田山にはかなりの大きな山くずれがあった。	
		分図No.33参照	井水の変化	大部分は水位低下を来たしたが1箇月を経過するもなお以前の高さまでには至っていない。
		地震動の状況	石がき、へい等は北西方向にあるものが倒れた。又壁、障子は斜めにき裂が出来た。墓石の大部分は時計方向にねじれたが一部に倒れたものもある。地動はおもに水平動のみのようなものである。野中神社の所の石がき造りの堤防は長さ約20メートルが崩壊し、又防波堤上には全長60メートルの間にき裂を生じた。壁、かわら等に対しての被害は総戸数の8～9割に達する。	
	被害	港湾施設	石造護岸約20メートルが崩壊し又防波堤には約60メートル間がき裂を見たがいずれも地震に困る被害である。	
		海岸建築物		
	分図No.33参照	船舶	被害内訳(全船舶数83隻) 出漁中 8隻(遠洋漁船)被害皆無 岸壁係留中 70隻(動力船)小破3隻 5隻(る艇)被害皆無	
		その他		

分図No.33

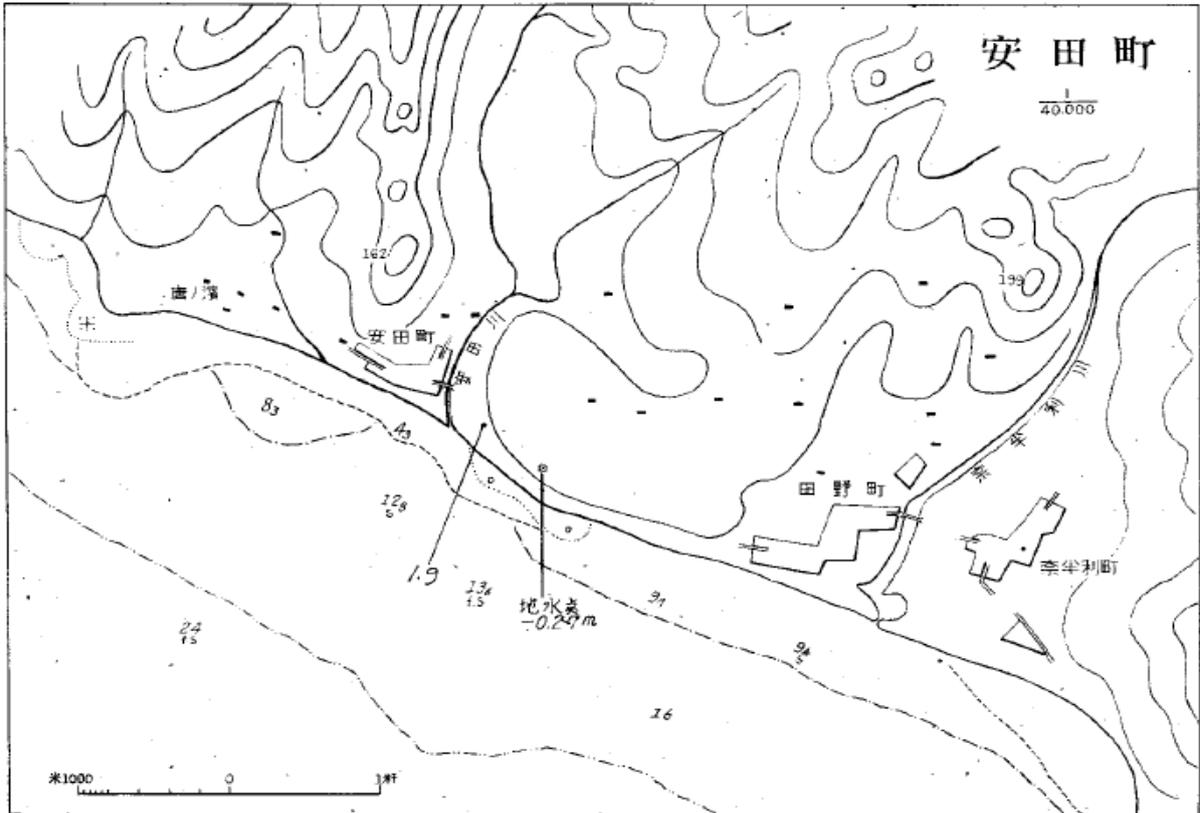


記載例	
	数值 浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值 水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值 地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)	験測線
	海面における矢符は津波の進行方向
	+隆起 -沈下 +隆起 -沈下

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
安田	津波	津波の状況	地震後10～15分で第1波来襲し、大きいもの1回のみで又浸水もなし。海岸での津浪の高さは1.9メートルであった。
		海面の状況	
		海震	
		発光現象	地震中室戸岬方面と足摺岬方面に光が点々と見えた。
	その他	地震後鰹漁業は不振であるがいかの漁は不変である。	
	地変	地盤の隆沈	安田町南東方の地理調査所水準標の測定では0.27メートルの沈下である。しかし一般には目認されるほどの隆沈はないようである。
		海岸線の変化	山くずれは所々に見られたが大規模なものはない。
		井水の変化	町内のごく一部にかれた所又は水位低下した所が出来た。混濁は震後数日にしてやんだ。
	分図No.34参照	地震動の状況	壁、かわらの落下した家屋数約3割、壁のき裂は斜めの方向を主とする。墓石は約3割が転倒した。家屋に対する被害は全壊6戸、半壊18戸、小破(土台の移動、ひさしの傾斜等)約30戸である(総戸数1,500戸)。
		港湾施設	
	被害分図No.34参照	海岸建築物	被害内訳(全建築物数1,500戸) 全壊 6戸(非住家) 半壊 19戸(住家13戸、非住家6戸) 小破 30戸(土台の狂い、ひさしの傾斜等)
		船舶	被害内訳(全船舶数214隻) 揚陸中 64隻(動力船) 200隻(ろ艇) } 被害はほとんどない
	その他		

分圖 No.34

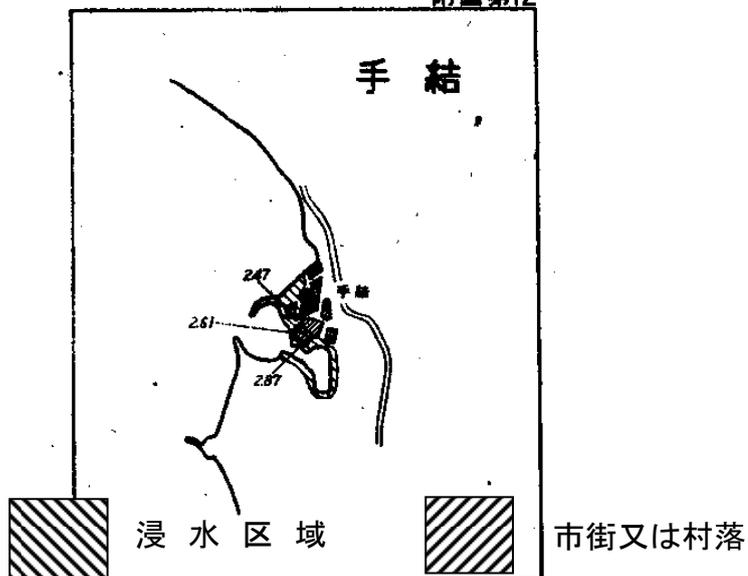


記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值	地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向
		+ 隆起
		- 沈下
		+ 隆起
		- 沈下

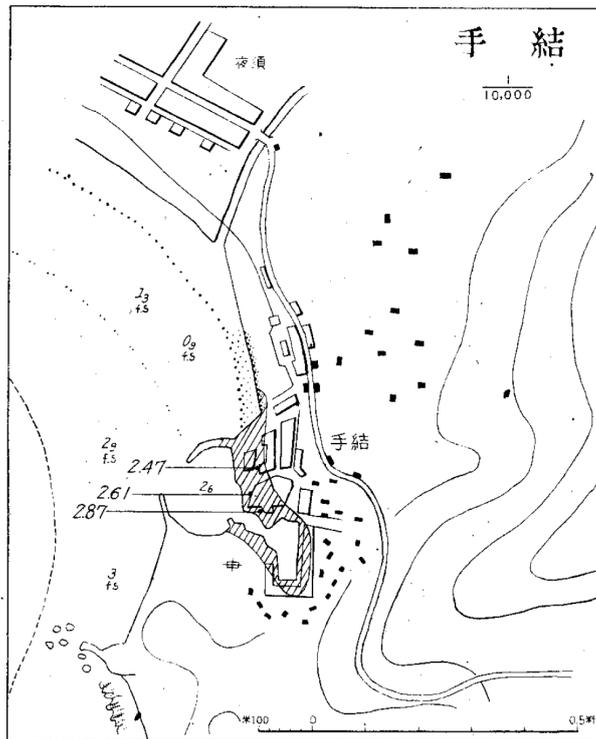
調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
手結	津波	津波の状況	引潮は認めておらず、震後15分位で第1波来襲し、大きいもの3回、第1波が最高で浸水は僅少、津浪の高さは船だまりの奥で2.87メートルであった(附図No.12参照)。
		海面の状況	
		海震	出漁船は舟底に大きな怪物が出て来て叩く様な感じを受けた。其の後舟は物凄く長い間急震動を受けた(確かに地震か何かあったとは思ったが津浪があったとは思わなかった)。
		発光現象	手結より北北西及び北西方向にガス燈の如く青くピカピカと何回も光った。船でも同様の光を見た。又他の漁夫は西方に桃色の光を見た。
		その他	地震後いか、いそ、鯛等の漁獲は20日間位皆無であった。現在でも僅かに獲れるに過ぎない。 地震前後海水温度が高かった。
	地変 分図 No.35 参照	地盤の隆沈	一般には海岸の状況からして0.7メートル程度の沈下があったと見られる。
		海岸線の変化	船だまり南西端では長さ約4メートル、割れ口約60センチメートルの南北方向の地割れを2箇所にした。
		井水の変化	震後10日間ぐらいは著しく水位低下したが1箇月以内に完全に復旧した。又ごく一部に従来水位の低かった所が上昇を見るに至った。
		地震動の状況	振り時計は全部止まり、壁、かわらはかなり落ちた。地動は水平動の後、上下動に変わった。全壊2戸、半壊3戸、小破23戸の家屋被害があった(総戸数約150戸)。
	被害 分図 No.35 参照	港湾施設	港内船だまり口北側は礎石の崩壊により長さ20メートルの間にき裂を見るに至った。
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数150戸) 津浪に因るもの 小破 3戸 床上浸水 30戸(手結埋立地) 床下浸水 10戸 地震に因るもの 全壊 2戸 半壊 3戸 小破 23戸(壁、かわらの落下)
		船舶	被害内訳(全船舶数31隻) 出漁中 3隻 被害皆無 岸壁係留中 28隻 小破10隻
		その他	

附圖第12



分圖 No.35

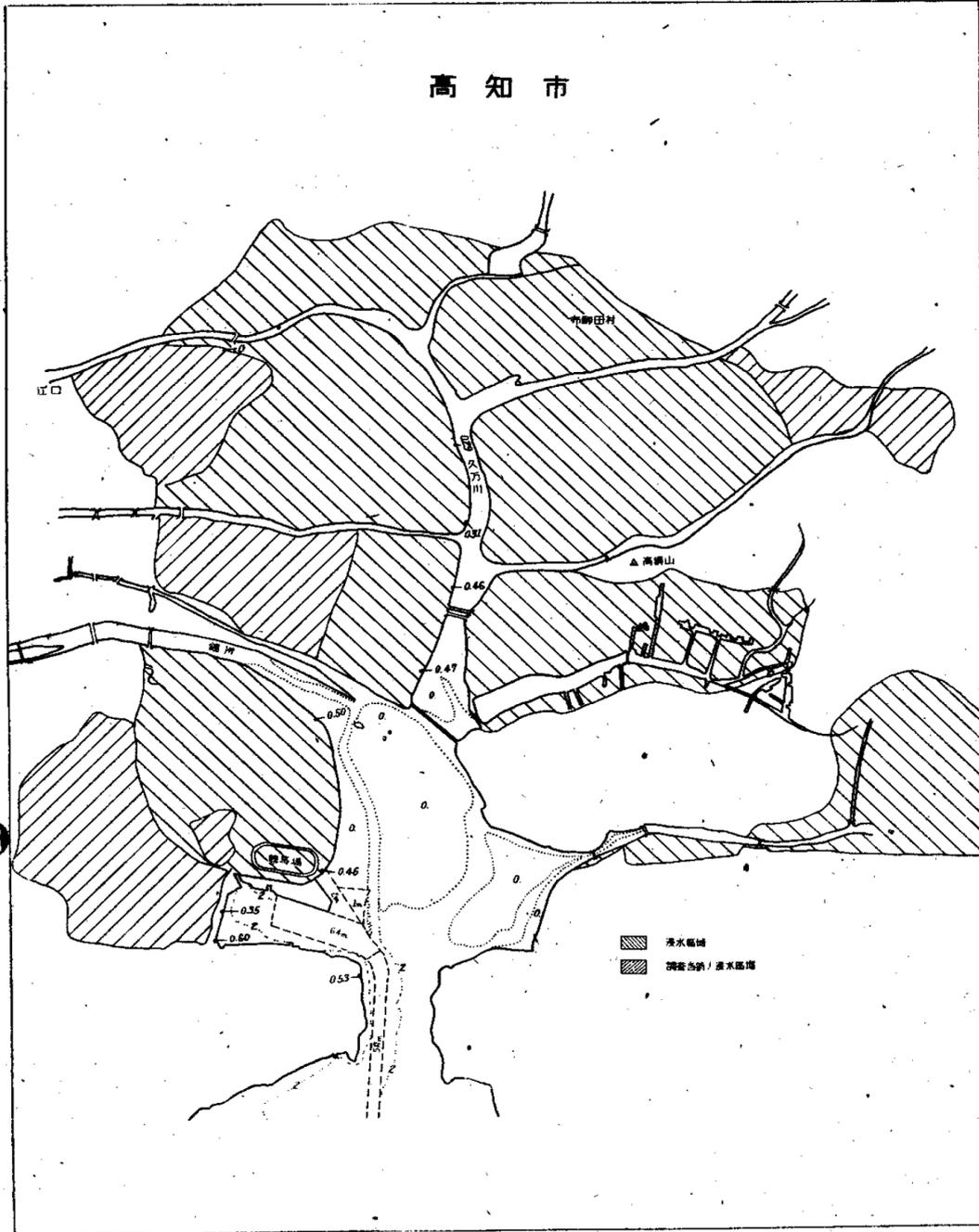


記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值	地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向
		+ 隆起
		- 沈下
		+ 隆起
		- 沈下

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容		
高知	津波	津波の状況	高知港口浦戸では震後約30分位で第1波来襲し、その来襲前に海水が引いたといい、又御豊瀬でも震後直ちに海水が引いたと云っている。回数は3～4回で最大波は浦戸では第3波、御豊瀬では第2波、高知では第4波と各々異なっている。津浪の高さは実測によれば浦戸1.79メートル、御豊瀬0.92メートル、高知0.6メートルで比較的低いにも拘らずその浸水区域はぼう大で1,400町歩に及ぶという(附图9参照)。水準測量及び岩高測定によっても約70センチメートル沈下したことは事実で、之が浸水区域の大きかった1原因であることは疑う余地がない。(御豊瀬、浦戸と共通)	
		海面の状況		
		海震	釣舟は港内で何か湧いて来る様な感じを受けた。	
		発光現象		
		その他	港内でちぬの漁業が地震後少なくなった。	
	地変	地盤の隆沈	高知市北端及び同市北東方の山腹までの地理調査所水準標の測定結果はそれぞれ0.65メートル、0.68メートル、0.69メートルの沈降である。一般には岸壁等の状況よりして港奥郎は約1メートル程度の沈下と見られるが埋立地では1.2～1.3メートルぐらいに達するといわれる。	
		分図No.36参照	海岸線の変化	
		井水の変化		
		地震動の状況	振り時計は全部止まったが、墓石はほとんど倒れない。ガラス、壁の破損、かわらの落下等はかなり多いようである。地動は東西方向の水平動であって上下動はなかったようである。	
	被害	港湾施設	港の奥部の最も利用されている岩松町物揚場は全長460メートルに全壊を来たし、潮江埋立岸壁は破壊及び沈降のため係船に一大支障を生ずるに至った。その他堤防、護岸等に被害を被った。又給水施設も破壊したが直ちに修理復旧した。	
		分図No.36参照	海岸建築物	被害内訳(全建築物数27,700戸) 焼失2戸 全壊 1,689戸 半壊 2,822戸 床上浸水 } 3,286 戸(床上、床下はおおむね半壊程度) 床下浸水 }
		船舶	浦戸湾は中間附近のくびれたひょうたん形をなすがその港口の浦戸附近での水深は7メートルぐらいで港奥部の潮江津壁附近では4メートル程度である。高知平野の浸水面積は今次の被害地区のうち最大であるがおもなる原因は地盤の沈下に基因するのであって来襲する津浪の浸入を容易ならしめたものと見られる。津浪の高さは港口御豊瀬岸壁附近で0.9メートル、港奥部で0.5メートルできわめて低い波である。(御豊瀬、浦戸と共通)	
		その他	高知附近では十数箇所に道路の破壊を見た。木材その他の漂流物により小舟に損害があったがはなはだ軽微。	

附圖第9



浸水区域

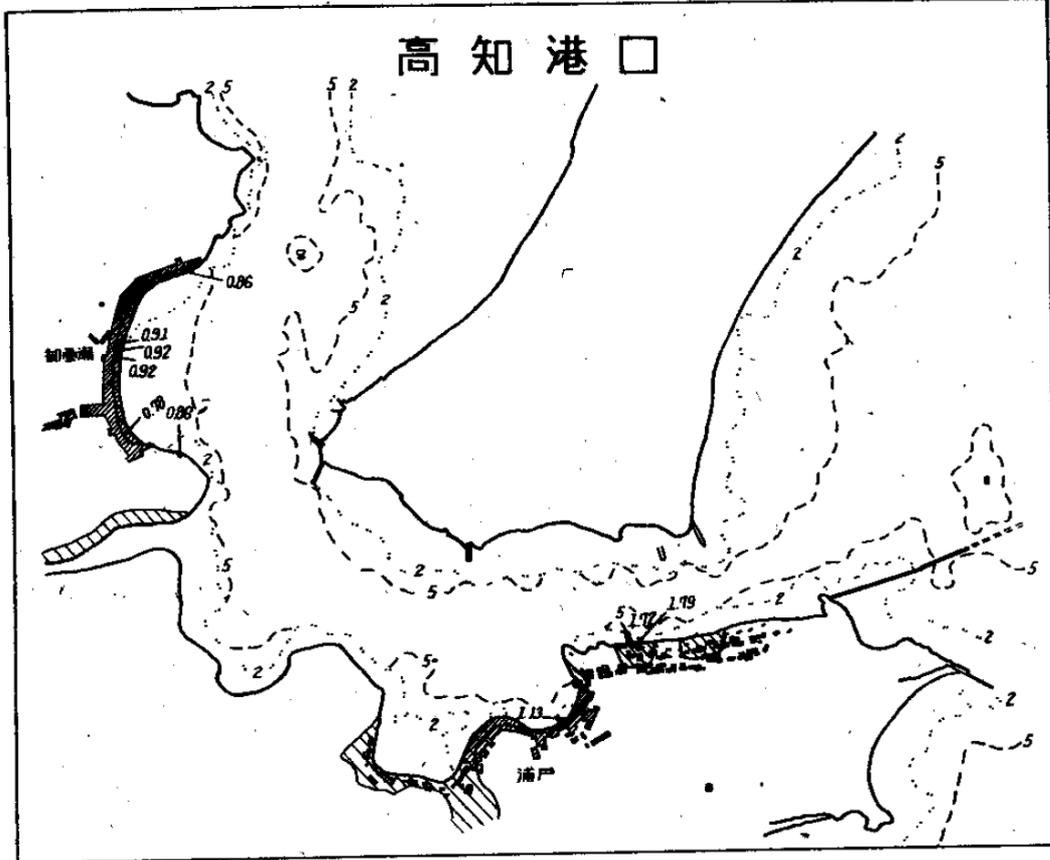


調査当時の浸水区域

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
御豊瀬	津波	津波の状況	高知港口浦戸では震後約30分位で第1波来襲し、その来襲前に海水が引いたといい、又御豊瀬でも震後直ちに海水が引いたと云っている。回数は3～4回で最大波は浦戸では第3波、御豊瀬では第2波、高知では第4波と各々異なっている。津浪の高さは実測によれば浦戸1.79メートル、御豊瀬0.92メートル、高知0.6メートルで比較的低いにも拘らずその浸水区域はぼう大で1,400町歩に及ぶという(附図10参照)。水準測量及び岩高測定によっても約70センチメートル沈下したことは事実で、之が浸水区域の大きかった1原因であることは疑う余地がない。(高知、浦戸と共通)
		海面の状況	出漁中の船は潮流の激変は感じなかった。港内では船、材木、漂流物等と一緒に往復流動したが渦はなかった。港内は1週間位濁っていた。
		海震	沖合の船は機関をかけたような震動を受けた。又航海中の船は暗礁にのし上げたようなショックを受けた。
		発光現象	地震前南西方向に非常に強い光を見た。
		その他	震後4～5日間はいわしが大漁であった。
	地変 分図 No.37 参照	地盤の隆沈	測定点は棧島の水路局基本水準標でその沈下量は0.72メートルである。又同島北岸の高さ2.5メートルの袂石及び1.2メートルの水上岩においてはそれぞれ0.6メートル、0.7メートルの沈下量となる。測深は港口内の湾曲部(御豊瀬部落前面)においてなしたが水深13メートル附近は1.2メートル、岸壁附近は0.5メートルで平均値は0.7メートルの沈降である。浦戸附近では一般に岸壁等の状況よりして約1メートル程度の沈降があったようにいわれている。(浦戸と共通)
		海岸線の変化	き裂の小規模のものが所々に見られた。(浦戸と共通)
		井水の変化	
	被害 分図 No.37 参照	地震動の状況	御豊瀬部落においては振り時計は全部止まったが、墓石はほとんど倒れたものはない。壁、かわらの被害は総戸数の約半数に達し、小破家屋30戸を生じた。
		港湾施設	岸壁は6メートル、10メートル間の2箇所が決壊を生じた。又御豊瀬、浦戸共に1メートル程度の沈下のため係船は困難である。給水施設は破壊されたが修理済である。
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数350戸) 床上浸水 30戸 小破 30戸(地震に因る)
		船舶	被害内訳(全船舶数253隻) 出漁中 15戸(動力船) 被害皆無 岸壁係留中 110戸(動力船、ろ艇) } 流失15隻(ろ艇)、全壊1隻(ろ艇)、中揚陸中 120戸(動力船、ろ艇) } 小破29隻(内動力船14隻、ろ艇15隻) 係泊中 8隻(大形船) 被害皆無
		その他	浦戸湾は中間附近のくびれたひょうたん形をなすがその港口の浦戸附近での水深は7メートルぐらいで港奥部の潮江津壁附近では4メートル程度である。高知平野の浸水面積は今次の被害地区のうち最大であるがおもなる原因は地盤の沈下に基因するのであって来襲する津浪の浸入を容易ならしめたものと見られる。津浪の高さは港口御豊瀬岸壁附近で0.9メートル、港奥部で0.5メートルできわめて低い波である。(高知、浦戸と共通)

附圖第10

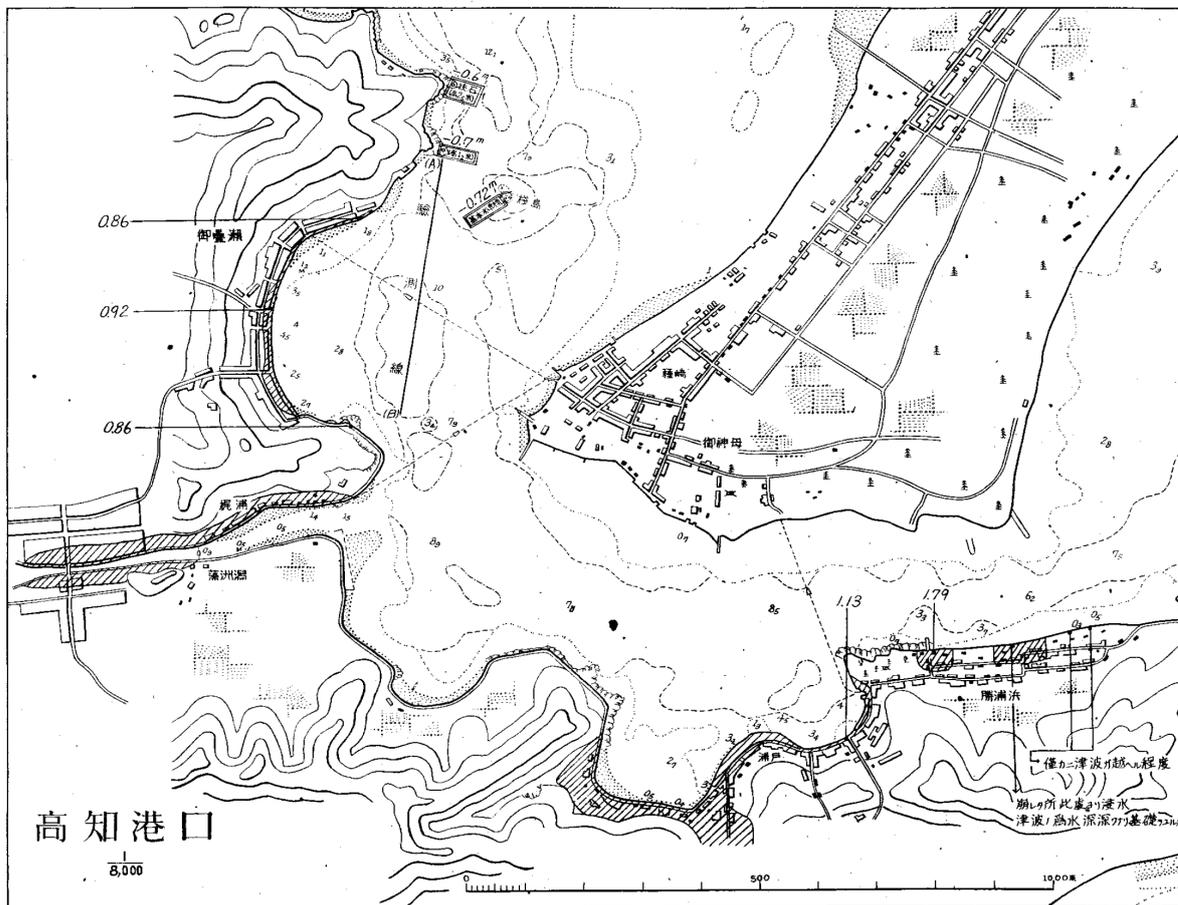


浸水区域



市街又は村落

分圖 No.37

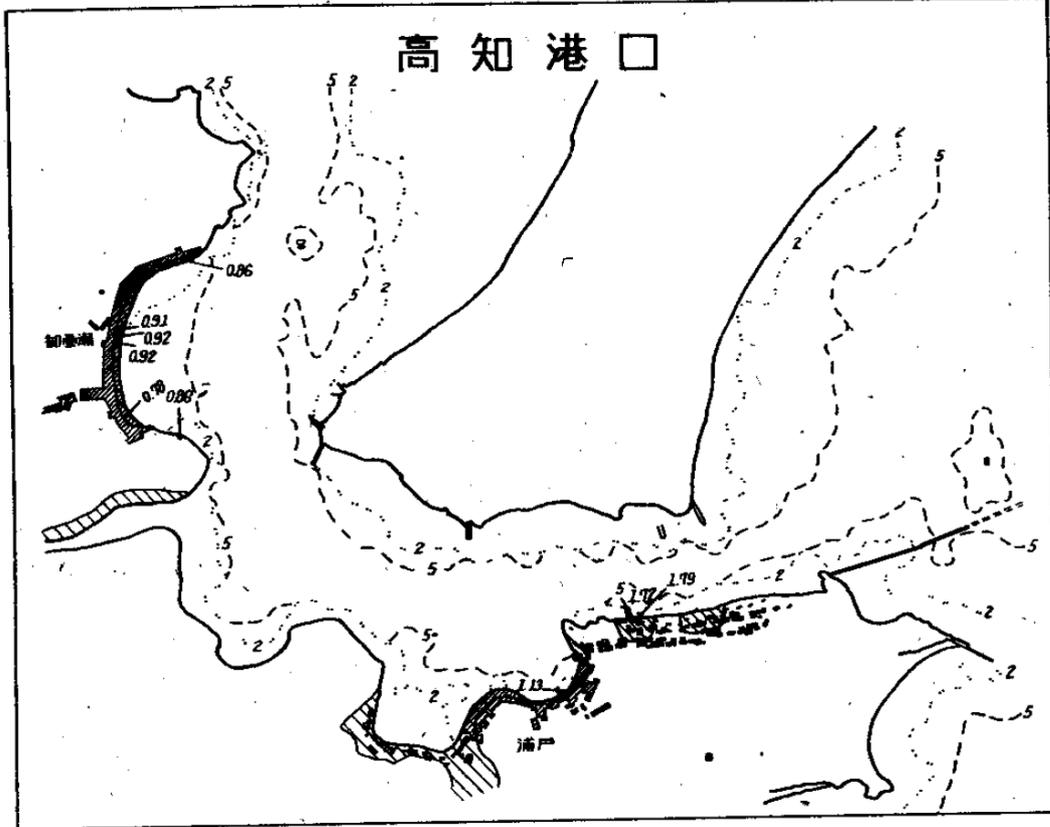


記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数字は隆沈量
	数值	地水点 地理調査所水準標、数字は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
浦戸	津波	津波の状況	高知港口浦戸では震後約30分位で第1波来襲し、その来襲前に海水が引いたといい、又御豊瀬でも震後直ちに海水が引いたと云っている。回数は3～4回で最大波は浦戸では第3波、御豊瀬では第2波、高知では第4波と各々異なっている。津浪の高さは実測によれば浦戸1.79メートル、御豊瀬0.92メートル、高知0.6メートルで比較的低いにも拘らずその浸水区域はぼう大で1,400町歩に及ぶという(附図No.10参照)。水準測量及び岩高測定によっても約70センチメートル沈下したことは事実で、之が浸水区域の大きかった1原因であることは疑う余地がない。(高知、御豊瀬と共通)
		海面の状況	浦戸西方湾入部附近は反時計方向に渦をなした。湾口附近では2週間位濁っていた。
		海震	室戸岬東方120マイル附近にて操業中の動力漁船(10トン)は地震時に全く何等衝激を感じなかった。紀伊藤浦南東沖にて操業中の動力漁船(18トン)は地震を感じた。
		発光現象	光は浦戸より見て東方に見えた。
		その他	津浪後3日間位は海底は非常に濁って居り漁はあまり獲れなかったが4日目位からよく獲れるようになった。
	地変 分図 No.37 参照	地盤の隆沈	測定点は棧島の水路局基本水準標でその沈下量は0.72メートルである。又同島北岸の高さ2.5メートルの袂石及び1.2メートルの水上岩においてはそれぞれ0.6メートル、0.7メートルの沈下量となる。測深は港口内の湾曲部(御豊瀬部落前面)においてなしたが水深13メートル附近は1.2メートル、岸壁附近は0.5メートルで平均値は0.7メートルの沈降である。浦戸附近では一般に岸壁等の状況よりして約1メートル程度の沈降があったようにいわれている。(浦戸と共通)
		海岸線の変化	き裂の小規模のものが所々に見られた。(御豊瀬と共通)
		井水の変化	浦戸部港では震前2日ごろよりかれたが震直後に復元した。又震後混濁を生じたが1週間ぐらいで清澄となった。
		地震動の状況	浦戸部落では振り時計は全部止まり、墓石も相当に倒れたがその方向はおもに北側である。かわらはかなりの家屋に落下を見た。
	被害 分図 No.37 参照	港湾施設	給水施設は破壊されたが修理済である。
		海岸建築物	
		船舶	被害内訳(全船舶数77隻) 出漁中 2隻(動力船)被害皆無 岸壁係留中 10隻(動力船)沈没1隻、小破3隻 40隻(ろ艇)小破10隻 揚陸中 5隻(動力艇)被害皆無 20隻(ろ艇)流失2隻 浦戸湾は中間附近のくびれたひょうたん形をなすがその港口の浦戸附近での水深は7メートルぐらいで港奥部の潮江津壁附近では4メートル程度である。高知平野の浸水面積は今次の被害地区のうち最大であるがおもなる原因は地盤の沈下に基因するのであって来襲する津浪の浸入を容易ならしめたものと見られる。津浪の高さは港口御豊瀬岸壁附近で0.9メートル、港奥部で0.5メートルできわめて低い波である。(高知、御豊瀬と共通)
		その他	

附圖第10

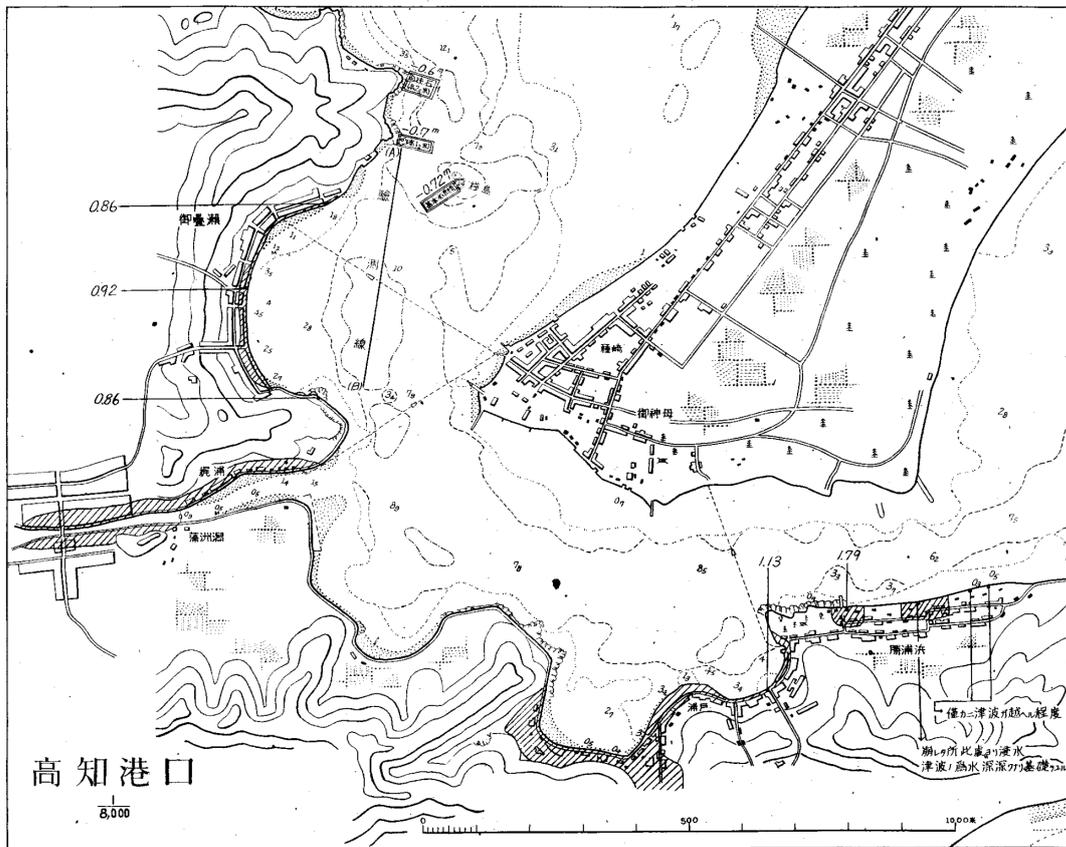


浸水区域



市街又は村落

分圖 No.37

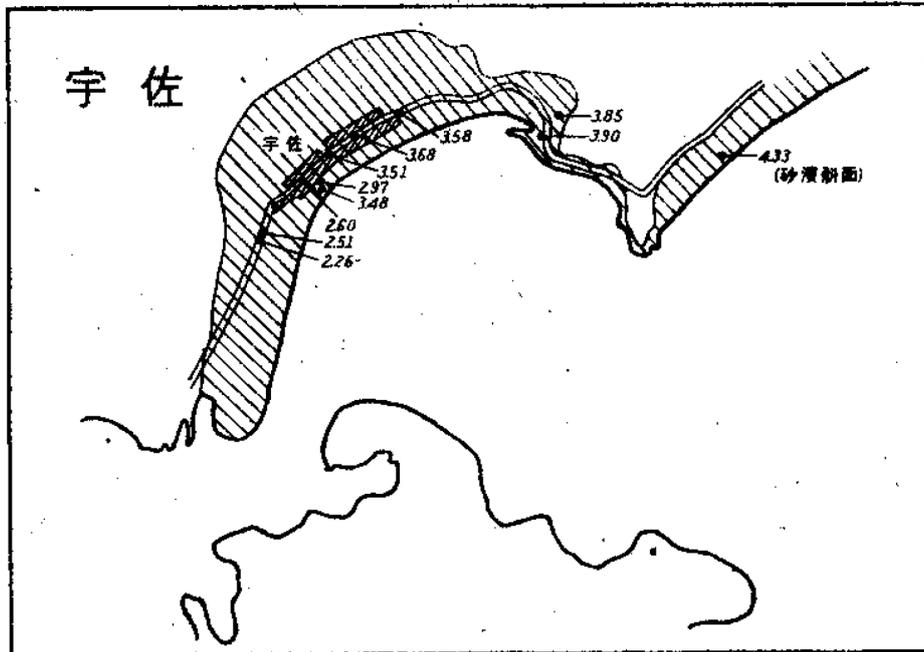


記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值	地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向
		+ 隆起 - 沈下
		+ 隆起 - 沈下

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
新宇佐	津波	津波の状況	須崎と共に高知県下では津波の被害甚大であった所の一つで、その浪高も最高3.90メートル(橋田)(写真No.14参照)に及んでいる。浸水区域及び浪高は附図No.12にするしてあるが、北部一帯が3.5メートル以上であるのに中央部に2.6メートル程度の所のあるのは護岸の影響かと思考される。震後10分位して大潮の低潮面より2メートル以上に引いて後第1波が壁の如く突立って急激に来襲した。面して押浪の方が引返し浪より被害が大であった(津浪による倒壊家屋が山の方にたおれている。)大きいもの3回で第3回が最大であった。
		海面の状況	宇佐湾内では多少渦巻をなした様であるが詳細不明。
		海震	宇佐沖2~3マイルに出漁中の漁船はドンと鳴る音を聞き舟はひどく震動し潮の流れは急変しこの為舟は往復運動をした。
		発光現象	光は東方に見えたが高圧線のスパークと思うという者あり、又眞西方向に火柱を見た(此の方面に高圧線がある)。
		その他	地震後漁獲は少い。
	地変	地盤の隆沈	諸状況よりして一般に0.9メートル程度の沈降があったと見られる。
		海岸線の変化	き裂及び崩壊の小規模なものが見られた。
		井水の変化	震後一部にかれた所も出来たが一般に水位の変化はない。混濁は一部にあった、から味は1箇月ぐらい続いたが所によっては一度復旧し、その後1週間ぐらいで再び塩分を伴うようになった。
		地震動の状況	振り時計は全部止まり、墓石は大部分轉倒した。壁、かわらの落ちた家屋はかなりの数に達した。
	被害 分図 No.38 参照	港湾施設	湾首岸壁は所々に決壊を見たが又これに平行した防波堤は崩壊するに至った。小漁船は岸壁破壊並びに地盤沈下により係留困難となった。給水施設、製氷工場(半壊)及び魚市場(半壊)等は被害を受けた。
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数1,400戸、被災建築物数1,100戸) 焼失 142戸 流失 303戸 全壊 180戸 半壊 323戸 小破 500戸 床上浸水 1,100戸 床下浸水 100戸
		船舶	被害内訳(全船舶数234隻) 出漁中 14隻(動力船) 被害皆無 20隻(ろ艇) 被害皆無 岸壁係留中 80隻(動力船) 流失6隻、全壊49隻、半壊7隻、小破16隻 120隻(ろ艇) 流失28隻、全壊87隻、半壊5隻
		その他	海岸道路通路に数箇所決壊、橋りょう1箇所流失 海岸線の出入に富む補ノ内湾の湾口に岸線の弧状形を為す宇佐港がある。本港は南東方に開口しその北岸に萩埼があり南岸は東南東方向に延びこの中間附近より南寄りに州を作り港を囲むような形状を取る。又港首のやや南寄りに岸線に沿い砂州が見られる。港内水深はきわめて浅く1メートル程度である。新宇佐町は港首にある。港の背後は平地を成す。津浪の高さは北岸で3.9メートル、新宇佐港内北部で3.5メートル、同南部で2.5メートル、萩埼東部海岸で4.3メートルを示し、その港形、水深、岸壁の高さ及び平地は被害を顕著にしたものと見られるが、前記の海岸線に平行に設置した防波堤の存在することにより半分その程度を軽減したことは明らかであるが、将来の対策上この防波堤を更に高く築造することが望ましい。

附図第12

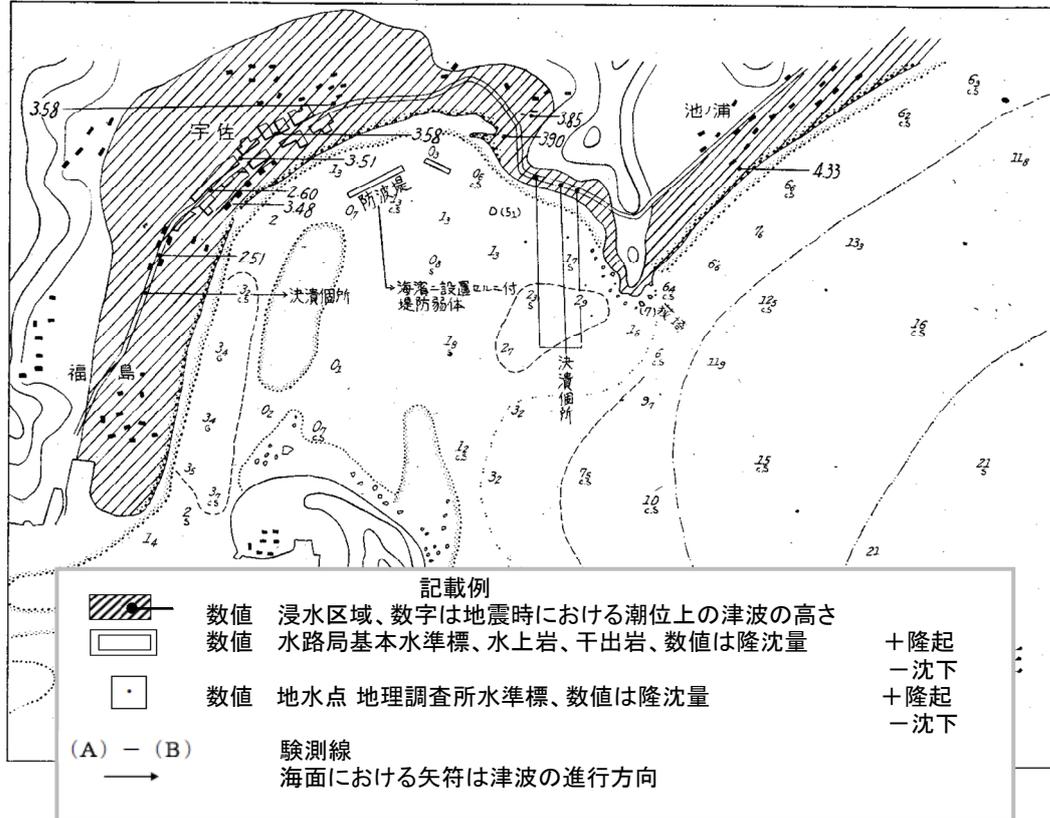


浸水区域



市街又は村落

分圖 No.38

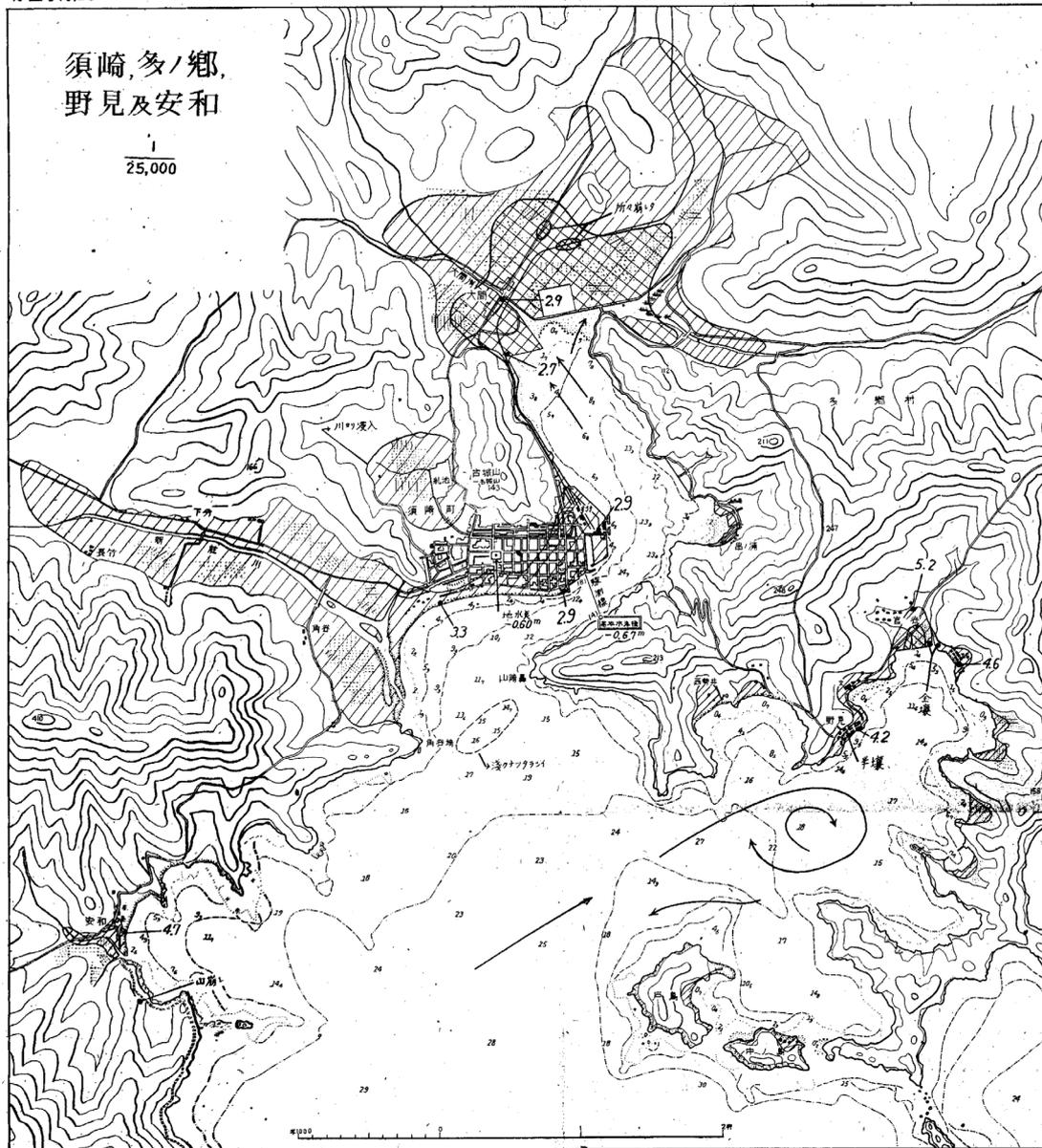


地名	調査項目	内容	
須崎・多ノ郷	津波	津波の状況	須崎では震後10分位、多の郷では15～20分位で第1波来襲、共に来襲前低潮面より1メートル以上も引いたという。その有様は初め満潮の如く来襲したが、ザーザーという音を立てかなり激しい流れをなして、一度陸上に上ってから水田上を壁の様に役立って眞白くなって押寄せた。その高さは多の郷での測定によると3.05メートルとなり、須崎では2.96メートルを最高とする(詳細附図No.11参照)。
		海面の状況	港内では約15日間海水は濁った。(須崎)
		海震	須崎町沖合4～5マイル附近に出漁中の船は船体が破壊されるような強い震動を受けた。(須崎) 多ノ郷 出漁中の舟は急震動を受けた。又舟底を突上げられるような感じを受けた。(多ノ郷)
		発光現象	地震時南西方、北東方、北方、北西方の順に光が廻って行ったのを見た。又青い光が北方に見えて其の為家の中の物が明るく見えたと云う者があつた。出漁中の船は高知方面より西の方へ進む光を見た。(須崎) 野見湾神島や牛竜山沖に出ていた船は北方に光を見た。野見に出漁中の船は東から北西須崎方面に火の玉が飛ぶのを見た。又地震直後0430頃南東方の空が夕焼のように明るくなった。(多ノ郷)
		その他	地震後釣漁は殆ど漁獲が皆無である。地震後底曳網がかなり大漁であつた。多ノ郷 地震後いそえびが全々獲れなくなった。津浪来襲前はどんよりした生ぬるい天候であつた。地震前に水温高く次第に下り地震後は急に下つた。(須崎) 牛龍山沿岸では漁獲に変化がないが一般に地震前後40日位は漁業が不振であつた。12月中下旬頃から海水の色が変化し震後40日間もこの状況が続いたので漁獲が振わないのであろう。12月中旬頃から海水の色が変化した。(多ノ郷)
	地変 分図 No.39 参照	地盤の隆沈	須崎港東岸の水路局基本水準標の測定結果は0.67メートルの沈下である。測深は前記水準標と須崎町岸壁との間の一線上で行つたが中央の水深16メートル附近は1.2メートル、接岸付近は0.5メートルで平均0.9メートルの沈下である。町内にある地理調査所水準標の測定では0.60メートルの沈下である。一般的に見る時岸壁附近の沈下量は比較的大きく約1.2メートル程度沈下したといわれている。又須崎町南端のさんばしは更に沈下して約1.8メートルぐらゐにも達するといわれているが、しかしその沈下の概況より見ての数値は明確性を欠くように思われる。(須崎) 岸壁の状況よりして須崎港奥部の大間海岸附近はおおむね0.6～0.9メートルぐらゐ沈下したように見られる。(多ノ郷)
		海岸線の変化	海底は一部浅くなった所が出来たといわれる。(多ノ郷)
		井水の変化	水位は以前より幾分増加したものと見られる。震後より塩分を伴い1箇月半を経過するもなお復旧していない。(須崎) から味を帯びたが1箇月半にしてやや薄くなった。(多ノ郷)
		地震動の状況	振り時計は全部止まり、壁は全家屋に落下を見たがかわらもかなり落ちた。墓石は大部分は時計と反対方向にねじれたが倒れたものは約2割である。(須崎) 墓石はほとんど全部に転倒が見られた。壁は大部分の家屋ではく落があり、又かわらの動いたものもほとんど全家屋に及んだ。(多ノ郷)
		港湾施設	町内北東部岸壁は全部崩壊し商船さんばし附近の岸壁も破壁された。又同町東岸の埋立岸壁及び南部岸壁も局所的に崩壊又は決壊を生じたが結局須崎町を囲む岸壁はほとんど全長に被害を被つた。この破壊及び岸壁沈下により係船は不可能となり荷役作業は一大支障を来たすに至つた。その他給水所2箇所破損。(須崎) 須崎港奥部の西方に開口する大間川河口の東岸岸壁は全壊しその南岸の岸壁にも半壊を生じた。港首東岸に流出する櫻川の南部の防波堤は全壊し、又この河口附近の富士ヶ鼻北東方護岸には決壊を見た。岸壁破壊及び沈下により係船不能となつた。(多ノ郷)

調査結果 高知県

被害 分図 No.39 参照	海岸建築物	<p>被害内訳(全建築物数2,500戸) 全壊 266戸(内住家80戸、非住家186戸) 半壊 88戸(内住家56戸、非住家32戸) 床上浸水 970戸 床下浸水 113戸 (須崎)</p> <p>被害内訳(全建築物数600戸、多ノ郷村全建築物数1,100戸) 流失 46戸(大間26戸、土崎8戸、串ノ浦1戸、その他11戸) 全壊 25戸(大間14戸、土崎5戸、串ノ浦1戸、その他5戸) 半壊 34戸(大間18戸、土崎10戸、串ノ浦3戸、その他3戸) 床上浸水 194戸(大間107戸、土崎28戸、串ノ浦8戸、その他51戸)(多ノ郷)</p>
	船舶	<p>被害内訳(全船舶数414隻) 出漁中 4隻(動力船) 被害皆無 10隻(ろ艇) 被害皆無 岸壁係留中 100隻(動力船) 流失15隻、全壊30隻、中小破55隻 300隻(ろ艇) 流失30隻、全壊100隻、中小破170隻(須崎)</p> <p>被害内訳(全船舶数174隻、多ノ郷村全船舶数440隻) 出漁中 1隻(動力船) 被害皆無 4隻(ろ艇) 被害皆無 岸壁係留中 25隻(動力船) 被害はほとんど無い 79隻(ろ艇) 小破5隻 揚陸中 45隻(ろ艇) 流失3隻、乗上げ破壊4隻(多ノ郷)</p>
	その他	<p>道路5箇所決壊、木材28,320石流失(須崎) 大間川より吾桑方面に至る湾曲部附近までの鉄道士盛延長2キロメートルは流失し、特に大間川附近では線路共流失した。その他道路には十数箇所に決壊又は流失を生じ5橋りようにも一部流失を来たした。耕地は水田243町歩、畑地50町歩に浸水を見たが一部は流失した。(多ノ郷)</p>

分圖 No. 39



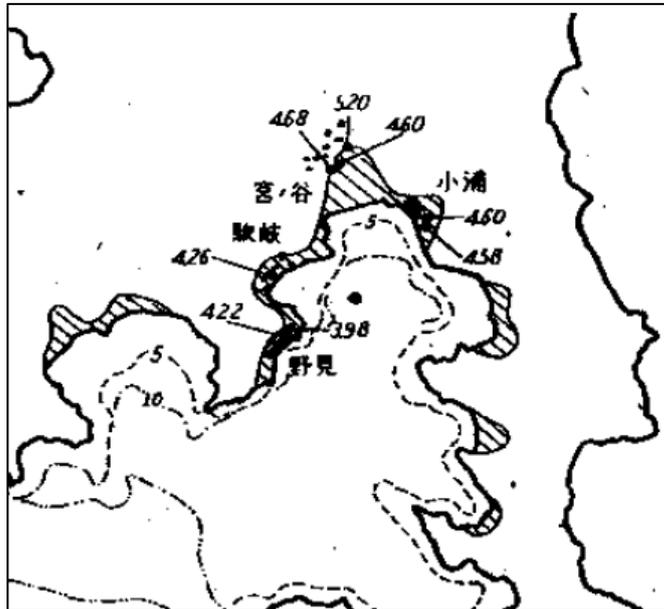
記載例	
	数值 浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值 水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值 地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)	験測線
	海面における矢符は津波の進行方向

+ 隆起
- 沈下
+ 隆起
- 沈下

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
野見	津波	津波の状況	津浪の高さはこの湾が高知県下では最高であったが、民家が少い為被害は大したことはなかった。震後15分位で極めて静かに海水が増して来たが湾奥では白壁の如く突立って来た。回数は6～7回で第3波(又は第4波ともいう)が最大であった。浪高は宮谷5.20メートル、小浦4.60メートル、駿岐4.26メートル、野見4.22メートルであった(附図No.11参照)。
		海面の状況	湾内は20日間位海水が濁っていた。又潮流は時計方向に流れた。
		海震	
		発光現象	
		その他	
	地変	地盤の隆沈	海岸の状況からして野見岸壁附近で1.2メートルぐらい沈下し、湾の海底も一般に深くなったようである。
		海岸線の変化	
		井水の変化	山ぎわでは平常かかれることがない所が一部震直後かれを生じた。一般には震後よりから味を帯び1箇月半経過しても幾分塩分を含んでいる。
	分図No.39参照	地震動の状況	振り時計は全部止まり、壁は大部分はく落し、かわらはほとんど全家屋のものが動いたが落下したものはわずかである。墓石は半数ぐらいが転倒した。
	被害	港湾施設	野見岸壁、仔官の各岸壁は共に全壊した。岸壁破壊及び沈下により満潮時には係船困難である。
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数500戸、多ノ郷村全建築物数1,100戸) 流失 71戸(野見37.駿岐8.宮ノ谷8.小浦3.中ノ島2.その他13) 全壊 35戸(勢井1.野見16.駿岐2.宮ノ谷6.小浦4.中ノ島1.その他5) 半壊 30戸(勢井1.野見10.駿岐2.宮ノ谷7.小浦6.中ノ島2.その他2) 床上浸水 228戸(勢井7.野見63.駿岐11.宮ノ谷27.小浦43.中ノ島14.その他63)
		船舶	被害内訳(全船舶数266隻、多ノ郷村全船舶数440隻) 出漁中 4隻(動力船) 被害皆無 12隻(ろ艇) 被害皆無 岸壁係留中 51隻(動力船) 流失1隻 169隻(ろ艇) 流失10隻、全壊2隻、半壊1隻、小破3隻 揚陸中 30隻(ろ艇) 流失10隻
		その他	海岸道路数箇所決壊。 その他県庁報告によると多ノ郷村においては焼失家屋は226戸である。 須崎湾は北部に須崎港、東部に野見港を有する。須崎港は屈折して北方に湾入しその湾曲部の西岸突出部に須崎町、港前に大間、土崎(多ノ郷村)部落がある、須崎町南西岸に新荘川、機首西岸に大間川、同東岸に櫻川が河口を開いている。平地はこれらの河川の両岸に沿って展開するが特に港奥部はやや広い面積を有している。水深は港口で16メートル、須崎岸壁附近で5メートル、港首で1メートル程度である。須崎港に面した須崎町及び港首大樹方面共に浸水ははなはだ大で諸施設、船舶等の被害も又大である。津浪の高さは須崎東岸で3.3メートル、港首で2.9メートルで著しい高さではないが、河川、平野の存在及び護岸の破壊等は浸水を容易にしたものと見られる。その最大到達距離は新荘川方面では3.5キロメートル、港奥部では2.4キロメートルに及ぶ。野見湾は平地のほとんどない山地の海岸にまで迫っておる所で港内は数支の湾入を成すが大局からするとおおむねだ円形を呈する。水深は港口で約27メートル、港の中心部では約6メートルぐらいである。津浪は港奥部の宮ノ谷で5.2メートル、港北岸で4.2メートルを示すが施設、船舶の被害は大であるが、浸水面積は平地が乏しいのでわずかに海岸線附近にのみ見られるが一股被害は港奥部より顕著である。
	分図No.39参照		

附図第11

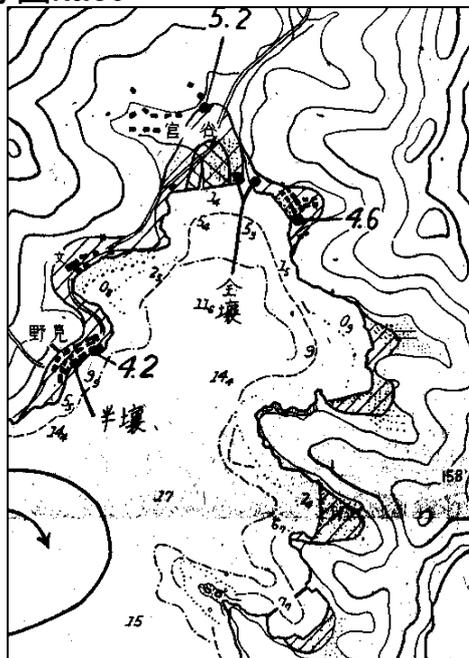


浸水区域



市街又は村落

分図No.39



記載例

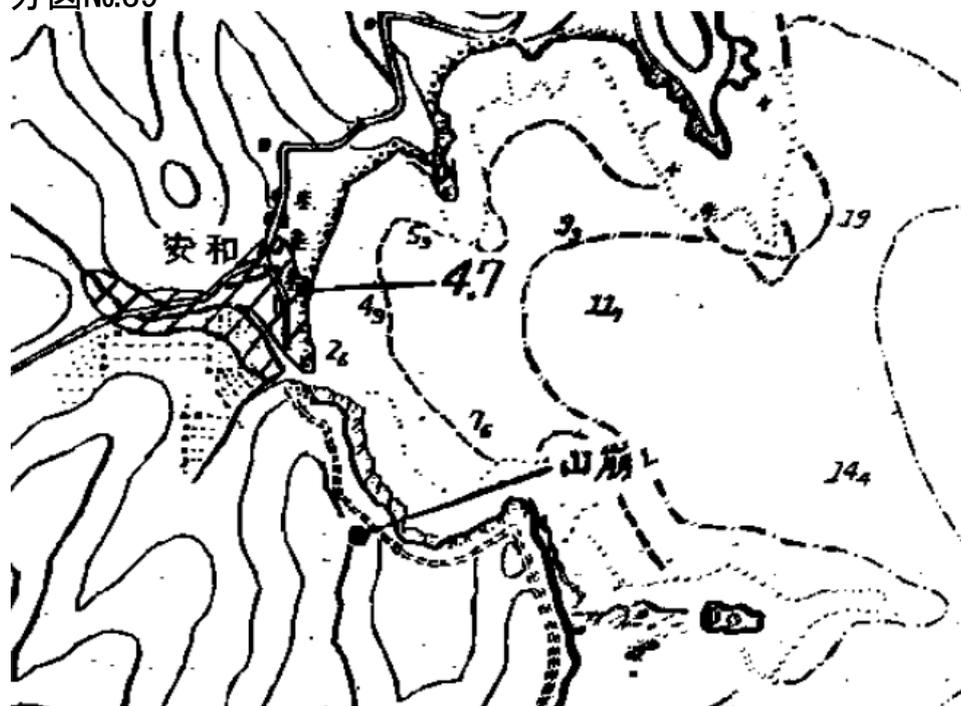
- | | | | |
|---|----|--------------------------|------------|
|  | 数値 | 浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ | |
|  | 数値 | 水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数字は隆沈量 | +隆起
-沈下 |
|  | 数値 | 地水点 地理調査所水準標、数字は隆沈量 | +隆起
-沈下 |
| (A) - (B) | | 験測線 | |
|  | | 海面における矢符は津波の進行方向 | |

地名	調査項目	内容	
安和	津波	津波の状況	須崎湾の湾口西部にある安和では、震後15分位で第1波来襲し、その来襲前に大潮の低潮面より更に低く引いた由である。大きいもの3回で第3波が最高であった。津浪の高さは海岸の砂濱上では4.7メートルであったが、家屋の浸水痕跡より測ると2.99メートルとなり、1.7メートルが波の影響と考えられる。
		海面の状況	
		海震	出漁中の舟はドンドンという音を2度聞いた。これと同時に魚が取れなくなった。
		発光現象	出漁中の舟は沖の方に光を見た。陸上でも同様な光を見た。
		その他	地震後1週間位の間鯛が特によく獲れた。津浪前0時頃潮が引いた為たこが鳴いた。
	地変	地盤の隆沈	潮高面からして約1.2メートル程度沈下したもののようである。
		海岸線の変化	
	分図 No.39 参照	井水の変化	震後1週間ぐらいは濁りとから味を生じた。
		地震動の状況	振り時計は止まり、壁、かわらは大部分落下し、墓石も相当に転倒した。又家屋には戸の開閉の不自由になったものがかなりの数に達する。
	被害	港湾施設	
		海岸建築物	
		船舶	
		その他	

附図第11



分図No.39



記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值	地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向
		+ 隆起
		- 沈下
		+ 隆起
		- 沈下

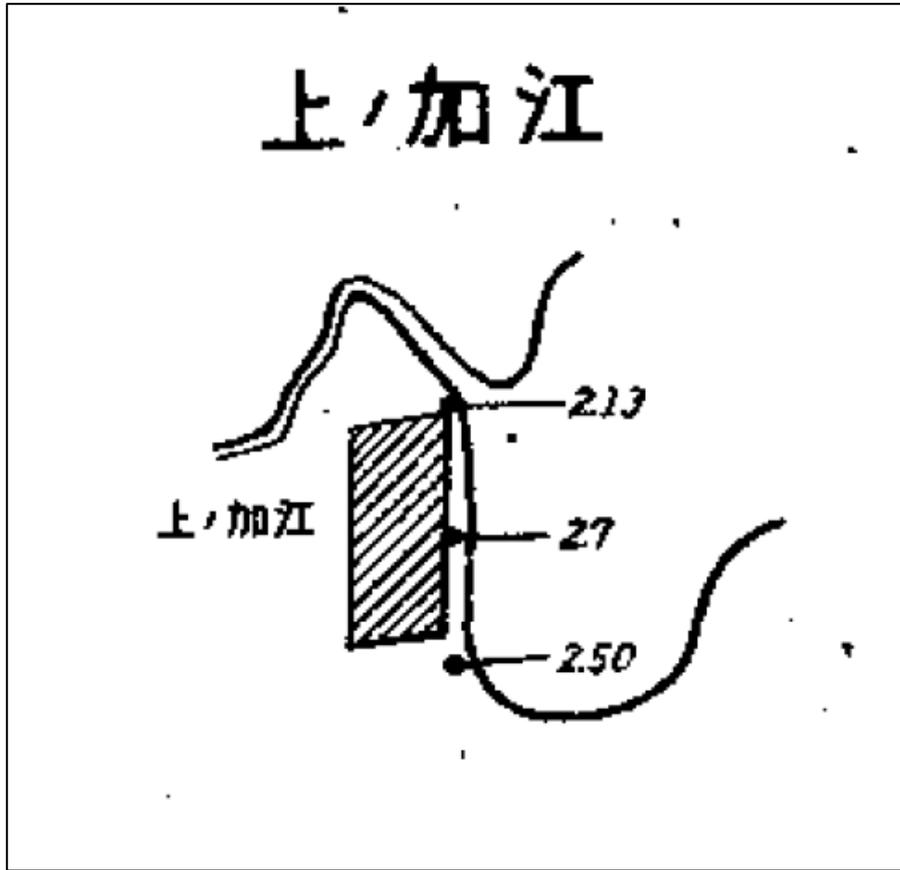
調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
久礼・鎌田	津波	津波の状況	震後10分位で大潮の低潮面より約1.5メートル引いて後第1波来襲し(久礼漁業会では引かないという)津浪は静かに満潮の如くやって来た。その回数は6回位で第3波が最大であった。津浪の高さは鎌田のポンドでは2.81メートル、久礼町の海岸では3.9メートルであったが、民家での痕跡によれば1.91メートルとなり比較的低い。之も護岸の影響であろうか(附図No.11参照)。
		海面の状況	磐だまり内は時計方向に渦を巻いた。久礼湾内は10日間位濁っていた。
		海震	出漁中の舟は海面の変化も震動も気付かなかった。
		発光現象	地震時に陸上及び沖合の漁船は南方沖合に瞬間的な光を見た。光の明るさは月夜のように明るく手の指紋が見える程度であった。
		その他	冬季は漁獲の少い時季なるも一般に地震後は漁業は不振である。即ち釣漁は一般に収穫なし。鯛の漁もない。
	地変 分図 No.40 参照	地盤の隆沈	船だまり岸壁の状況からしてこの附近では0.3～0.9メートル沈下したようにいわれている。(鎌田) 久礼湾奥接岸部附近の干出1.7メートル岩では隆沈零で、湾口北寄りの高さ2.6メートル及び湾口南岸附近の高さ1.6メートルの両水上岩の測定ではいずれも0.5メートルの沈下である。一般に海岸の状況からして岸壁は約1メートル程度沈下したようである。又漁労状況より見て大津埼東方300メートル沖合は約1.5メートルぐらい沈下したといわれる。(久礼)
		海岸線の変化	山くずれ等の小規模のものがわずかに見られる。(鎌田)
		井水の変化	震後1週間ぐらい混濁を生じた。又から味は大部分のものに生じ飲料不能となったが1箇半月にしてかろうじて飲める程度になった。(鎌田)
		地震動の状況	神社の石がきはくずれ、石碑、燈ろうに転倒を見た。壁、かわらは総戸数の約2割程度落ちた。家屋はねじれ戸の開閉が不自由となったのがかなりある。又納屋1戸に半壊を見た。船だまり岸壁は一部に崩壊を生じた。(鎌田)
	被害 分図 No.40 参照	港湾施設	地震に因り船だまり岸壁崩壊、沈下により高潮時の係船幾分困難(鎌田)
		海岸建築物	被害内訳 津浪に因るもの 地震に因るもの 床上浸水 8戸 半壊 1戸(納屋) 床下浸水 8戸 (鎌田) 被害内訳(全建築物数1,300戸) 焼失 3戸(住家) 全壊 2戸(住家) 半壊 5戸(住家3戸、非住家2戸) 床上浸水 100戸 床下浸水 300戸 (久礼)
		船舶	被害内訳(全船舶数34隻) 出漁中2隻(ろ艇) 被害皆無 岸壁係留中 15隻(動力船) 全壊1隻、中小破3隻 14隻(ろ艇) 全壊1隻、中小破5隻 停泊中 3隻(貨物船) 被害皆無(鎌田) 被害内訳(全船舶数180隻) 出漁中 12隻 被害皆無 港内 168隻 流失6隻、全壊2隻、半壊4隻、小破42隻(久礼)
		その他	道路決壊18箇所、橋りょう決壊4箇所。(久礼)

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
上ノ加江	津波	津波の状況	震後7分位で第1波来襲し引潮は認めていない。大きいもの3回で第3波が最高であった。高潮性ではあるが幾分急激な流れをなして増水した。浪高2.50メートルを得た。
		海面の状況	潮の変化は認められなかった。
		海震	出漁中の舟はドシンと下から突上げられるような感じを5～6回受けた。又ズルズルという音を立てて震動した舟もある。
		発光現象	地震時に北東方に電雷光のような光を見た。又出漁中の船では高知方面に探海燈のような光を見た。其の後須崎方面に同様の青光を見た。
		その他	地震後れんこ鯛が全くとれない。但しはも等は地震後約1ヶ月は昼間でもとれた。
	地変	地盤の隆沈	一般的に見るとき船だまり及び港内中央海底では約0.6メートル程度沈下したようである。
		海岸線の変化	
		井水の変化	当地方の井水は例年は11月ごろより塩分を合むのを普通とするがこの変化が見られなかった。しかし地震以来これを伴うようになったが1箇月半ぐらいでから味はなくなった。水位は震後10日間ぐらい0.9メートル程度低下した。
		地震動の状況	振り時計は全部止まり、壁は大部分はく落しかわらも相当落下した。墓石は約半数程度転倒した。家屋は大部分土台に狂いを生じ、戸の開閉は困難となった。又特に注意することは当町の地震に因る被害は総戸数1,000戸のうち全壊70戸、半壊298戸の著しい数である。
	被害	港湾施設	北防波堤は決壊し又南北の両船だまり堤防はいずれも60メートルぐらいが全壊し、又この南船だまりの東方埋立地約2万坪も全く流失し去った。両船だまりとも被害により使用には困難である。なお建坪300坪の大倉庫は流失した。
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数1,000戸) 焼失 378戸 流失 36戸(住家4戸、非住家57戸) 全壊 70戸(住家13戸、非住家57戸) 半壊 298戸(住家144戸、非住家154戸) 床上浸水 210戸 床下浸水 168戸
		船舶	被害内訳(全船舶数149隻) 出漁中 2隻(動力船) 被害皆無 5隻(ろ艇) 被害皆無 岸壁係留中 32隻(動力船) 流失2隻、全壊8隻、中破2隻、小破1隻 90隻(ろ艇) 流失15隻、全壊10隻、中破17隻、小破8隻 停泊中 8隻(大形船) 被害皆無 揚陸中 10隻 全壊6隻、半壊4隻
		その他	前記北防波堤の決壊により畑地に浸水したが1箇月以上を経過するもなお畑地の3町歩には浸水を見る。木材の流失400石。上ノ加江港は北北東に開口する小船の停泊港である。港の東側は加江崎が出ており北方は大津崎が延びており平地は港首附近と港西岸の河岸附近に見られる。港の中心部の水深はおおむね4メートル程度である。津浪の高さは溝の東岸で2.1メートル、港首で2.5メートルで大した高波ではないがその被害ははなはだ大である。

附図第11



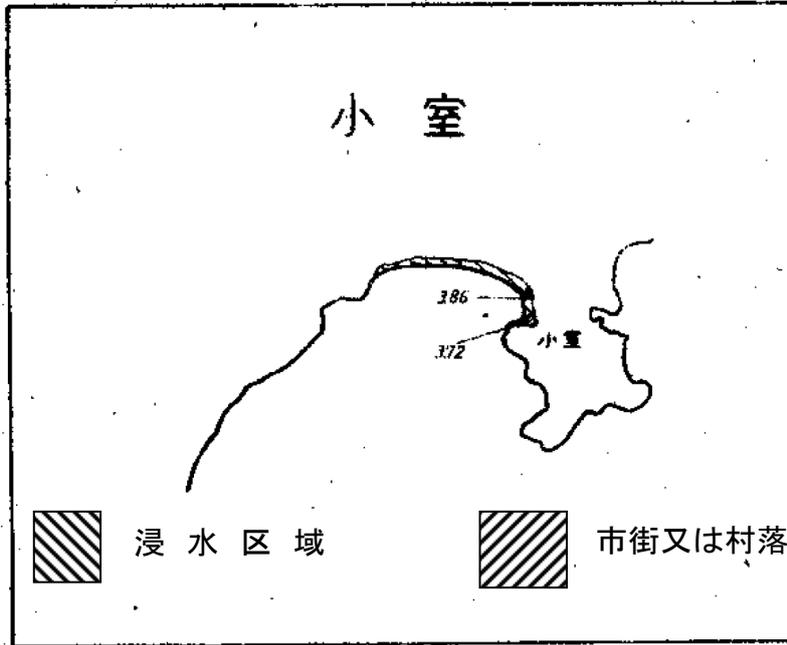
浸水区域



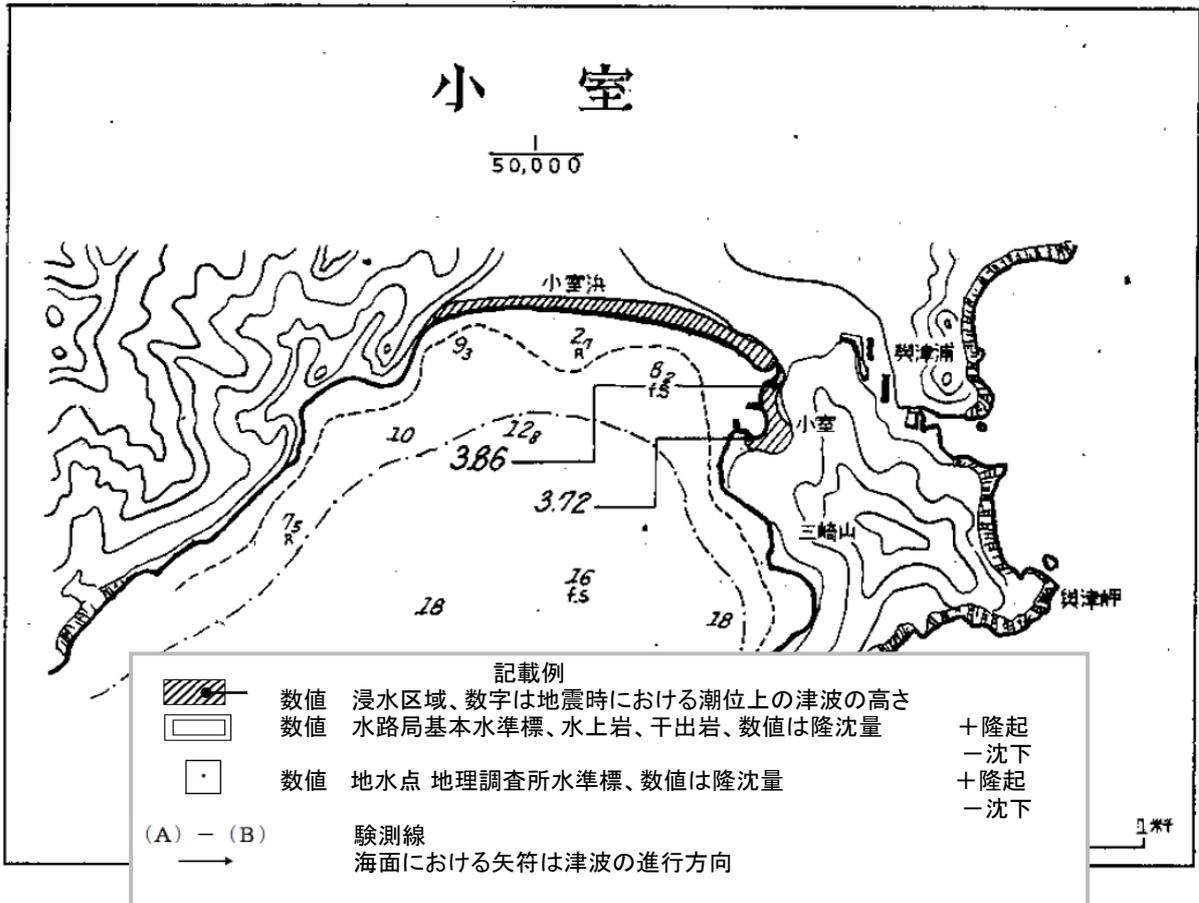
市街又は村落

地名	調査項目	内容	
小室	津波	津波の状況	震後5分位で大潮の低潮より約2メートル海水が引いて後第1波が来襲した。この為船だまりは空になったという。大きいもの3回で第3波が最高であった。船だまり横の倉庫及び民家に明瞭な痕跡があり、それぞれ3.72メートル、3.86メートルを測定した(附図No.12参照)。
		海面の状況	
		海震	
		発光現象	地震中光は東から北東へ電雷の如く飛んだ。
	その他	ぶり、たこ等漁獲は不振になった。古人は地震後は漁獲が多くなると言っているが、今回の地震では収穫がない。あゆの子や、ぼらは全く獲れなくなった。但しかたくち、いわしのみは地震後普通より幾分獲れる様である。	
	地変 分図 No.41 参照	地盤の隆沈	小室港及び船だまり岸壁等の状況から見て0.9メートル程度沈下したようである。
		海岸線の変化	ごく小さいがけくずれ等は若干あった。
		井水の変化	震前1週間ぐらいでかれたが震直後に復旧した。又地震後2日間ぐらいは白濁を生じた。
		地震動の状況	墓石は約半数ぐらい転倒した。壁は若干落ちた程度であるがかわらは総戸数の5割ぐらい落ちた。全壊家屋1戸を生じた。
	被害 分図 No.41 参照	港湾施設	
		海岸建築物	被害内訳 津浪に困るもの 地震に困るもの 半壊 1戸 全壊 1戸 小破 10戸 床上浸水 20戸 床下浸水 10戸
		船舶	被害内訳(全船舶数30隻) 揚陸中 30隻 流失2隻、全壊3隻、半壊10隻、小破15隻
		その他	

附図第12



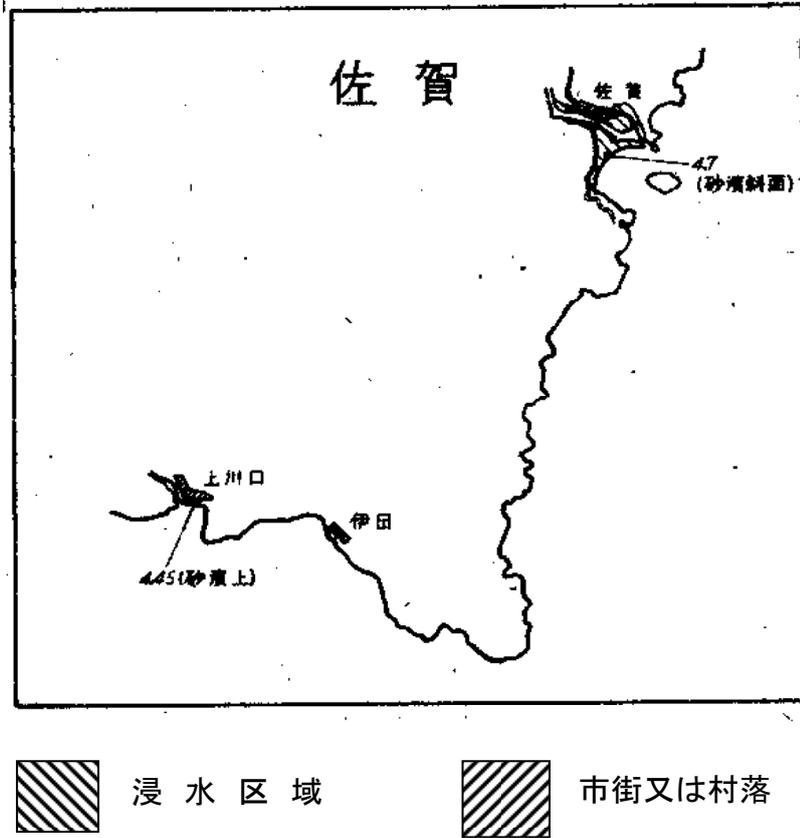
分圖 No.41



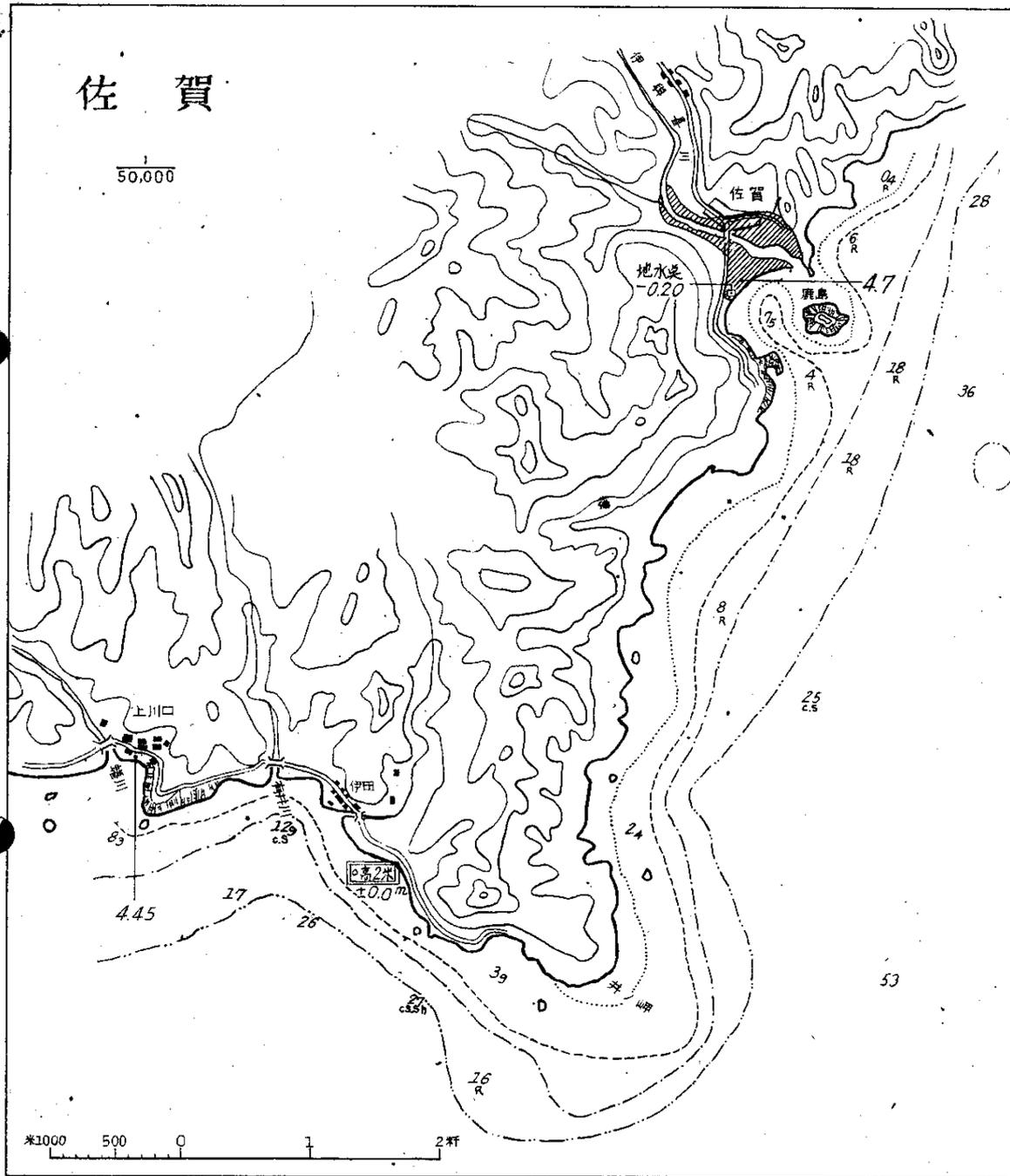
調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
佐賀	津波	津波の状況	震後30分位で第1波来襲し、大きいもの3回で第2波が最高、津浪は伊奥喜川を3キロメートルも逆行したという。海岸の横浜では津浪の高さ4.7メートルであったが、之は砂濱上の推定位置より測定したものであるから波の影響があり、之より低いものとする。来襲前の引潮については部落民は引潮を認めており、漁業会では認めていない(附図No.12参照)。
		海面の状況	湾内は時計と反対方向の潮の流れがあった。1週間程濁っていた。
		海震	出漁中ドシンと震動した漁船あり、又或る船は上下に激しくガタガタと震動した(佐賀沖5マイル)。
		発光現象	出漁中船で東から西へ飛んだ光を見た。又西の山の方が光ったという者がある。下田町沖に出漁中の船は潮が非常に光ったのを見た。
		その他	下田町沖の漁船は潮が非常に光ったのを見た。
	地変 分図 No.42 参照	地盤の隆沈	佐賀町伊興喜川南方の地理調査所水準標の測定結果は0.20メートルの沈下である。潮の状況からして一般には船たまり岸壁附近は0.3メートル程度沈下し、又湾の南西岸壁附近のばえも同程度の沈降と見られる。
		海岸線の変化	
		井水の変化	ごく一部に水位が震前に低下した所が見られた。しかし一般には大部分は1週間ぐらい混濁を生じ、又10日間ぐらいから味を帯びた。
		地震動の状況	振り時計は全部止まり中には落下したのものもある。壁は大部分、かわらは半数ぐらい落ちた。墓石は5割ぐらい倒れたがその方向はおもに南側である。
	被害 分図 No.42 参照	港湾施設	佐賀町橋下地側岸壁は6メートル間が流失し南側岸壁は28メートル間に事故を生じた。又船だまり防波堤はその基部が約20メートル間が崩壊し、西側船だまり附近約20メートル間に流失を見るに至った。船だまり附近に設置してあった石油タンクは山ぎわに振るい落された。
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数800戸) 全壊 35戸(住家) 半壊 50戸(住家) 小破 20戸 床上浸水 30戸 床下浸水 100戸
		船舶	被害内訳(全般船舶数263隻) 出漁中 1隻(動力船) 被害皆無 岸壁係留中 100隻(動力船) 流失5、全壊14、半壊14、小破4(軽微不確実) 150隻(ろ艇) 流失6、全壊5、半壊20、小破119 揚陸中 10隻(ろ艇) 被害皆無 停泊中 2隻(貨物船) 被害皆無
		その他	伊奥喜川の河口北岸に佐賀町がありとの河岸沿線に水田地帯が見られるほかほとんど山岳の支配するところである。佐賀の泊地は弧状形に湾入しその東方に鹿島あり湾入の形成を著しくする。その水深は港の中心郡で7メートル程度である。本港は機帆船等の避泊地として良港であるので漸次用度が高まる現状にある。津浪は港首岸壁附近で4.7メートルで浸水面積はおもに伊奥喜川河岸沿線に見られる。

附図第12



分圖 No. 42



記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值	地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向
		+ 隆起 - 沈下 + 隆起 - 沈下

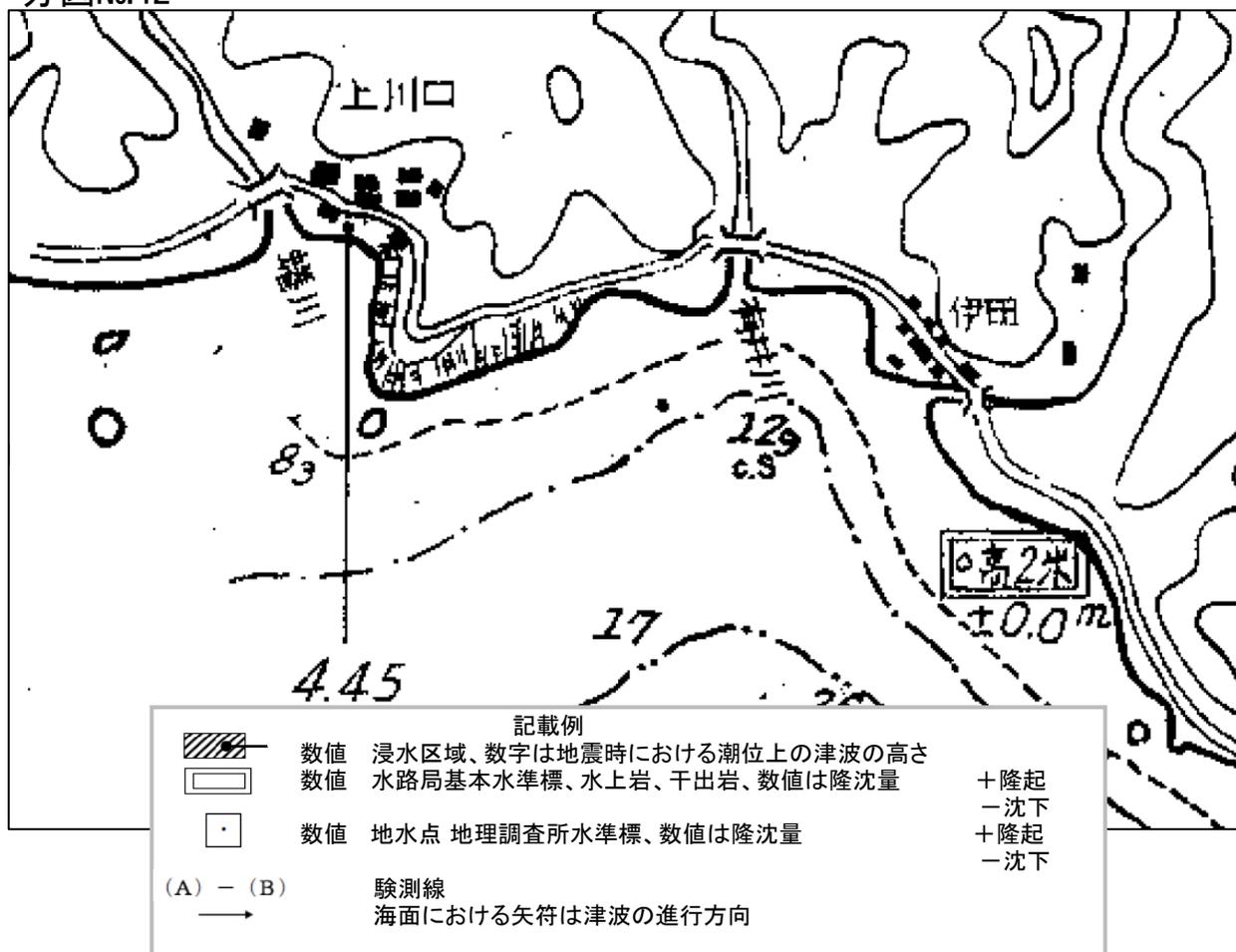
調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
上川口	津波	津波の状況	震後30分位で第1波来襲し、大きいもの5回で第4波が最高であった。護岸での津浪の高さは村民の証言により4.45メートルを測定した。
		海面の状況	
		海震	出漁中の船は突上げられる様なショックを受けた。又船に立っていることも出来得ない位のショックを受け櫓も漕げなかった船もある。
		発光現象	上川口港沖3マイルの海上で東から西へ向う光を見た。
		その他	地震後1ヶ月位は漁獲(ちたい、いそうお、いそえび)が少かった。20日朝頃から夜までうねりの様な大きな波が1日中寄せては返していた。かつて此の様な不思議な波は見たことがない。
	地変 分図 No.42 参照	地盤の隆沈	伊ノ岬と上川口との中間岸線附近の高さ2メートルの水上岩の測定結果は隆沈零である。一般には岸壁等の状況よりして約0.9メートル程度の沈下があったといわれる。
		海岸線の変化	
		井水の変化	震後15日間ぐらい混濁を生じた。
		地震動の状況	振り時計は全部止まり一部に落下したものがある。墓石は全部転倒した。全家屋に壁、かわらの落下を見た。又土台が狂い、戸の開閉が不自由となった家屋は全部である。小川にかけた橋(部落内)は0.6メートル程度南方にずれた。
	被害 分図 No.42 参照	港湾施設	
		海岸建築物	
		船舶	被害内訳(全船舶数133隻) 出漁中 3隻(ろ艇) 被箸皆無 岸壁係留中 40隻(動力船) 揚陸中 30隻(ろ艇) } 被害軽微 60隻(ろ艇)
		その他	浸水、接岸附近に若干。

附図第12



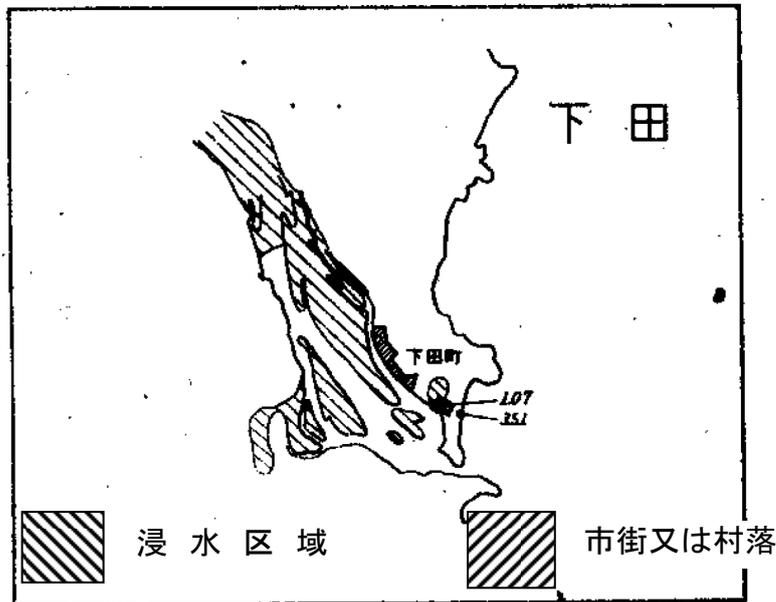
分図No.42



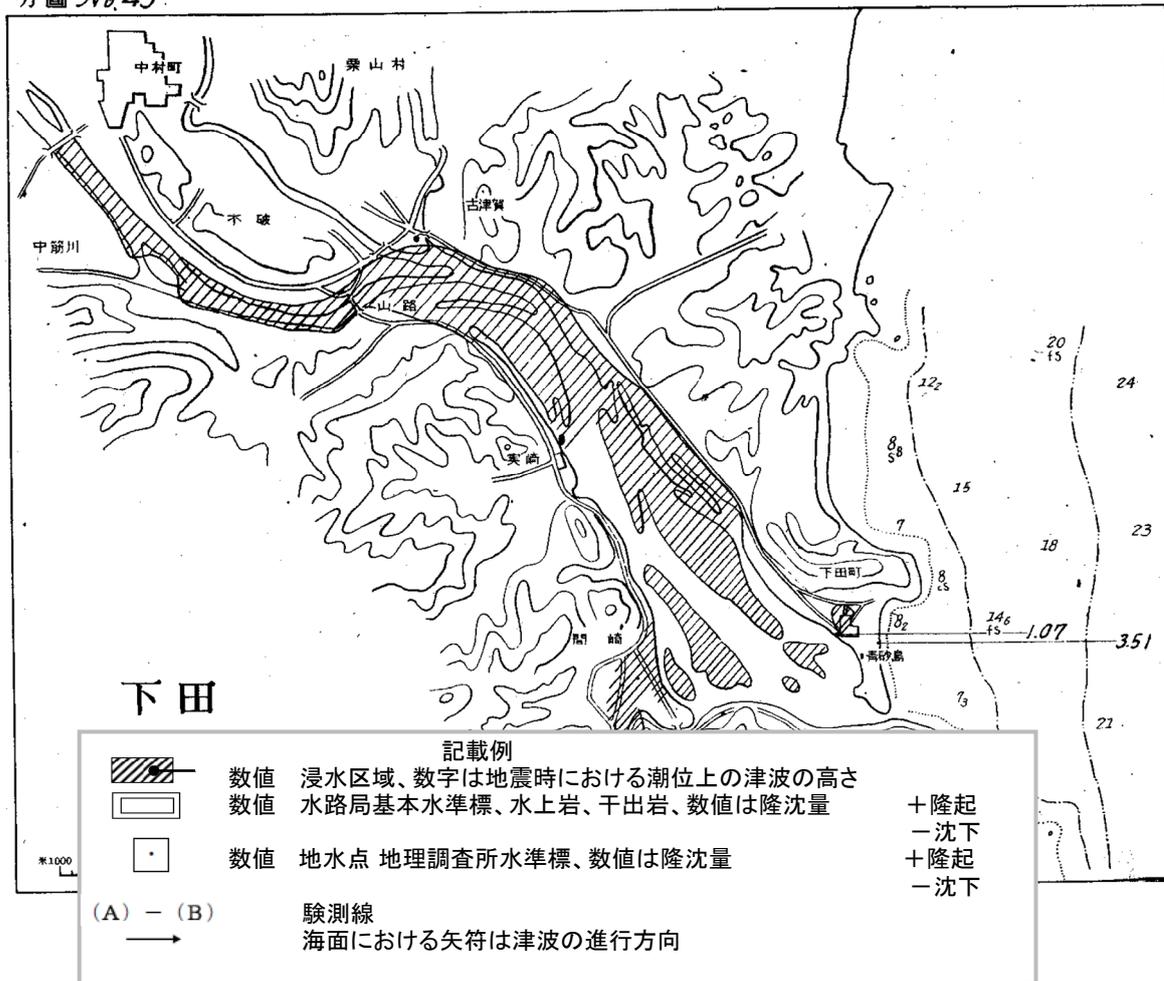
調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
下田 (青砂島)	津波	津波の状況	第1波来襲前大潮の低潮面より約2メートル引いてから静かに来襲した。その時刻は震後約40分で大きいもの3回、第1波が最高であった。津浪の高さは海岸では到達地点より測って3.5メートルを得たが、下田町では1.07メートルであった。川が大きい為か四万十川での波高は比較的低かった(附図No.12参照)。
		海面の状況	湾内は約1週間位濁っていた。潮の流れは渦をなさず河口に向け前後運動があったのみである。
		海震	いか釣に出漁した船は地震浪はあまり気付かなかった。又或る船はズーという音がして地震が感ぜられた。
		発光現象	地震時青砂島海岸で見ると東方沖合に電雷のような光を見た。
		その他	地震後1ヶ月位は総ての漁獲(たい、いか、いそ等)は皆無であった。現在(昭和22年2月)も尚不振である。
	地変 分図 No.43 参照	地盤の隆沈	ごく一部に沈下があったが、一般には隆起し青砂島附近では0.6~0.9メートルぐらい隆起したものと見られる。又漁労状況よりして海底にはおうとつが出来たといわれている。
		海岸線の変化	がけくすれは小規模のものが若干見られる。
		井水の変化	青砂島においては地震1週間前にかれたが大部分は震直後に復元し、他のものは3~4日後に復旧した。混濁は1箇月ぐらい続いた。
		地震動の状況	振り時計は全部止まり、壁、かわらは半数ぐらいが落ちた。墓石は約2割ぐらいが転倒し、位置の移動したものもかなりの数に達する。移動の傾向はおもに右回りである。青砂島においては総戸数300戸中位置の移動したものは半数ぐらいで、全壊 11戸、半壊残り全部でその被害は顕著である。
	被害 分図 No.43 参照	港湾施設	四万十川護岸一部崩壊
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数300戸) 地震に因るもの 全壊 11戸 半壊 289戸
		船舶	被害内訳(全船舶数34隻) 揚陸中 14隻(動力船) 内3隻は津浪に上り位置移動しきわめて軽微な害を受けた。 " 20隻(ろ艇)
		その他	浸水は下田附近一帯で560万平方メートル。

附図第12



分圖 No.43

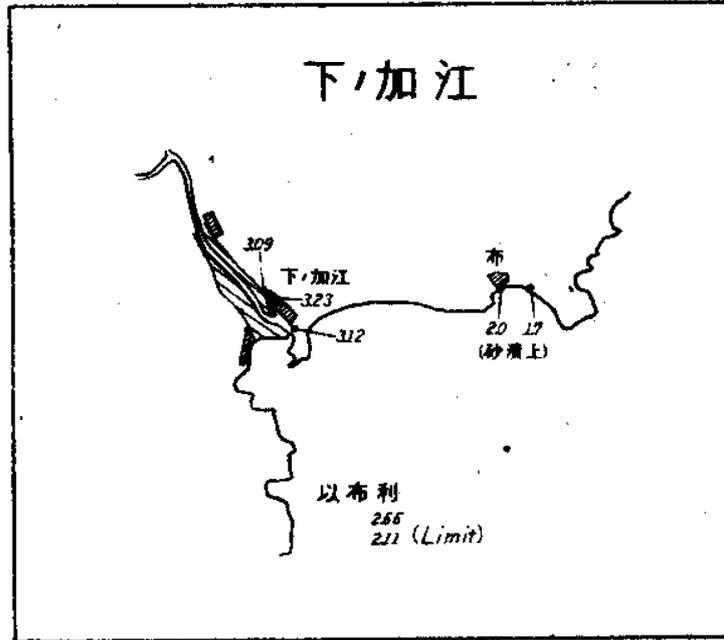


地名	調査項目	内容	
布・下ノ加江	津波	津波の状況	湾奥の下の加江及び以布利では津浪来襲前川の水や船だまりの海水が大潮の低潮より約1メートル引いたので船だまりでは水がなくなった。津浪は加江湾の方から増量する如く静かに来襲し海岸線附近に来て、急激に押波性にかわった。その時刻は震後30分位であったといい、大きいもの6回、布では第3波が最高であった。波高は湾奥の下の加江では3.23メートル、湾口の布では約2.1メートル、又以布利では2.7メートルであった(附図No.12参照)。又布では20日の夜半(24時頃)通常の高潮では引かない所まで引いたという。前の小室といい、上川口といい、又布といい、湾の形及び方向が同一であるにも拘らず前二者は津浪が高く、最後の布だけが比較的低いのは何が原因か不明であるが、布のみが布崎のかげになる様な方向に浪源があったのかも知れない。
		海面の状況	布東西突端より南方400間の所に新しい潮の流れを生じ今日に及んでいる。(布)
		海震	出漁中の船は初めドシンと上下に突き上げられるような震動を感じた。同時に潮の流れが8~9ノットの急流となって船を前後に流した。(布)
		発光現象	出漁中の船は足摺埼(南方)方向にパツパツと点滅する光を見た。(下ノ加江)地震直前南東方向に電雷の如き光を見た。(布)
		その他	漁獲は地震前後に大した変化はないが、あまだい、れんこだいはとれ方が少なくなったようである。(下ノ加江) 地震直後より漁獲は(あじ、さば、たち、さわら、いか等)殆ど皆無であった。特にまついかは地震直後全く獲れなかった。(布)
	地変 分図 No.44 参照	地盤の隆沈	砂浜及びばえの状況からして0.6~0.9メートル隆起したと見られる。(布) 船だまり状況よりして0.6~0.9メートル程度隆起し、船の出入は困難となった。しかし船だまり外の海底は幾分深くなったようにいわれている。(下ノ加江)
		海岸線の変化	山くずれの小さいものが数箇所に出た。(布) がけくずれ、地割れの小さいものが見られる。(下ノ加江)
		井水の変化	地震1週間前に一部かれた所が出来たが震後15日ぐらいで復旧した。又混濁とから味とは震後半箇月ぐらい続いた。(布) 震後1週間ぐらい混濁を生じた。(下ノ加江)
		地震動の状況	振り時計は全部止まり。壁、ふすま、障子等には全部縦のき裂を生じた。墓石は若干倒れた程度であるが壁、かわらは相当落下した。総戸数約300戸中全壊3戸、半壊11戸で柱の折損等は約4割に及び、小破(壁、かわら、建具等の破損)を加えればほとんど全部に被害を生じた。又防潮風堤は4箇所延長400メートルに全壊を見た。(布) 墓石は大部分倒れ、家屋の土台が狂い、戸の開閉困難になった所も相当に出来たが、壁、かわらの落下はほとんど全家屋に及んだ。(下ノ加江)
	港湾施設	港湾施設	船だまり防波堤40メートルぐらいが全壊し導水堤40メートルは破壊した。又地勢の上昇により船舶の出入は壁わめて不自由となる。(下ノ加江) 地震に困り防潮風堤4箇所延長の400メートル全壊。(布)
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数259戸) 流失 2戸 床上浸水 90戸 全壊 2戸 床下浸水 33戸 半壊 3戸 小破 230戸(床上、床下浸水を含む) (下ノ加江) 被害内訳(全建築物数300戸) 地震に因るもの 全壊 3戸 半壊 11戸 小破 286戸 (布)

調査結果 高知県

被害 分図 No.44 参照	船舶	<p>被害内訳(全船艇数144隻)</p> <p>出漁中 3隻(動力船) 被害皆無.</p> <p>岸壁係留中 46隻(動力船) 流失1隻、全壊16隻、半壊10隻、小破13隻</p> <p>揚陸中 90隻(ろ艇) 流失8隻、全壊30隻、半翼15隻、小破30隻</p> <p>5隻(ろ艇) (下ノ加江)</p> <p>被害内訳(全般船数75隻)</p> <p>出漁中 5隻(ろ艇)</p> <p>岸壁係留中 4隻(動力船)</p> <p>30隻(ろ艇) } 被害きわめて軽微 (布)</p>
	その他	<p>浸水は接岸附近に見られる。加江湾は東岸に湾口を有しその湾首北部に下ノ加江港がある。本港は南東方向に港口を向け岸線は半円形を成しその北岸に下ノ加江が河口を開いている。水深は港口で5メートル、港の中心部では3メートルである。津浪は河口で3.1メートル、船だまりの奥部で3.2メートルを示しその浸水は河岸附近にたまった区域に見られる。被害は土佐海湾西浜南部では顕著であっておもに湾形、河川に影響されたものと見られる。(下ノ加江)</p> <p>大敷網の錨流失したが網には大した被害を被らない。(布)</p>

附図第12

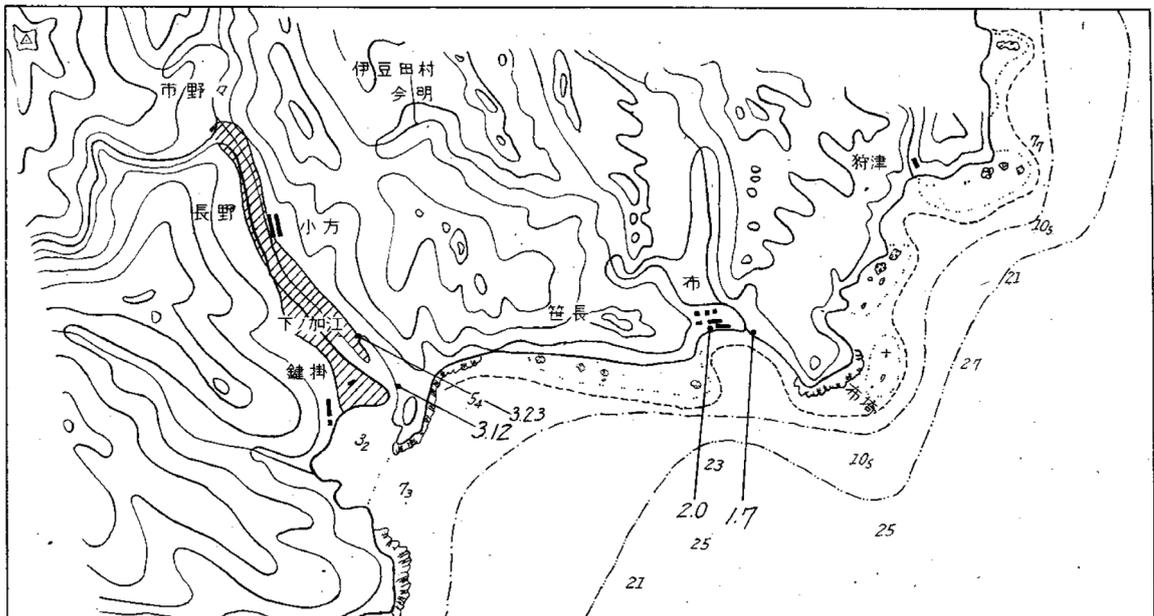


浸水区域



市街又は村落

分圖 No.44



記載例



数値 浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
数値 水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数値は隆沈量



数値 地水点 地理調査所水準標、数値は隆沈量

(A) - (B)



験測線
海面における矢符は津波の進行方向

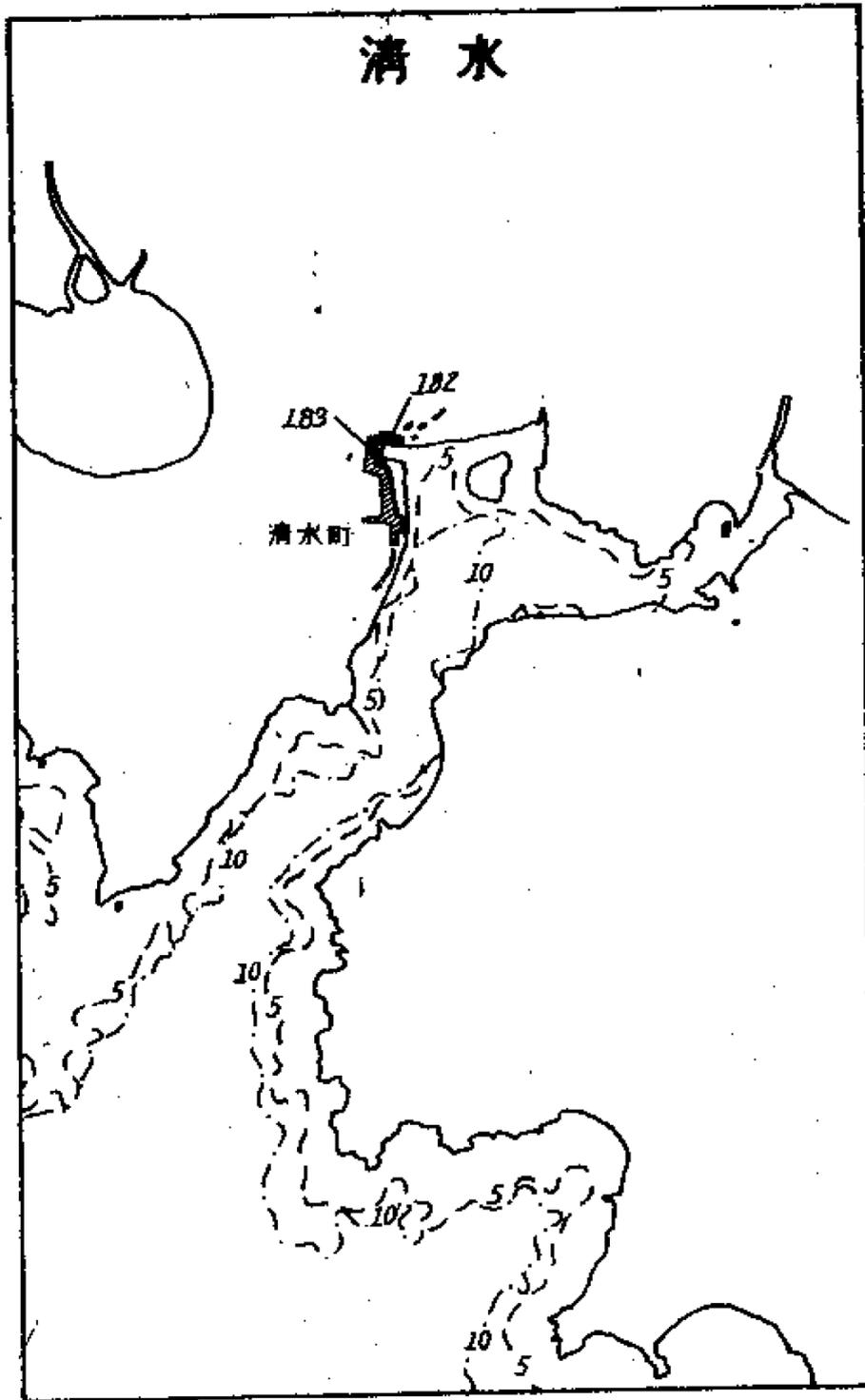
+ 隆起
- 沈下
+ 隆起
- 沈下

地名	調査項目	内容	
以布利	津波	津波の状況	
		海面の状況	下ノ加江湾は2～3日、船だまり内は4～5日間濁った。潮流は下ノ加江湾では直線運動をなし渦はなかった。
		海震	下ノ加江、以布利沖3マイルに出漁中の船は上下に突き上げられる様な強い震動を受けた。
		発光現象	
		その他	地震後1週間位は漁獲不振であったが現在(昭和22年2月5日)は従前と変りない。
	地変	地盤の隆沈	以布利川の満潮時の潮の到達地点に震後よりは潮がはいって来なくなり、又船だまり海底等も幾分浅くなったがこれらのことからして隆起したことは明らかであるが、隆起後の船だまりや護岸の状況よりしておおむね0.6メートル程度の隆起と見られる。
		海岸線の変化	
		井水の変化	ごく一部に混濁を生じた。
	被害	地震動の状況	墓石は1%ぐらいに転倒を見たがその方向はおもに北側である。又大部分のものはねじれたがその傾向はおおむね時計回轉と同一方向である。壁、障子、ふすま等にき裂を見たが大部分は横である。家屋総戸数約200戸中大部分の土台に狂いを生じ、壁、かわらも相当に落下し、14戸が半壊で二十数戸を除く他はすべて小破損を見るに至った。
		港湾施設	地震に因り船だまり岸壁は全長200メートル間に局所的にき裂を生じた。又地盤の隆沈により船の出入は困難となった。
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数200戸) 地震に因るもの 半壊 14戸 小破 166個
		船舶	被害内訳(全般船数34隻) 岸壁係留中 4隻(動力船) 小破4隻 30隻(ろ艇) 流失1隻、半壊1隻、小破28隻
		その他	

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容		
土佐清水	津波	津波の状況	験潮器の時計故障の為その来襲時刻は知り得なかったが、町民の言によれば震後20～30分で第1波来襲し、大きいもの5回位、第2波が最高で津浪は道路の一部に浸水した程度で波高1.83メートルを測った。之をML上に換算すると2.33メートルとなり、測候所での実測ML上2.42メートルと略一致する。従って同町の被害も他に比し僅少であった。	
		海面の状況	港内では流れは前後運動のみであって渦は認められなかった。港内の海水は1週間位濁っていた。	
		海震		
		発光現象	清水港遠見崎0.5マイル沖にいか釣に出漁中の漁船は南東方向に光を見た。	
		その他	地震時にえびが相当数岸壁にとび上がった。	
	地変	地盤の隆沈	港の中央附近の磯崎防波堤突端のヒ島の水路局基本水準標では0.1メートルの隆起で、港口西岸の大浦鼻附近の戒ばえの高さ2.5メートルの水上岩で0.4メートル、又この附近の干出1.2メートル岩では0.3メートル、港口南東岸遠見崎附近の高さ2.6メートルの水上岩では0.3メートルそれぞれ隆起した。一般には潮高面よりして岸線附近はおおむね0.6メートル程度の隆起と見られる。	
		海岸線の変化		
		分図No.45参照	井水の変化	水位は幾分低下したが2～3日後復旧した。しかし埋立地附近の手押しポンプには震後1時間ぐらい自然いつ流を見た。一部に混濁を生じたが4～5日で復旧し、海岸附近では2～3日間から味を帯びた。
		地震動の状況	墓石の大部分に位置の移動を見た。壁の落ちた家屋数は1割程度である。壁、ふすま、障子のき裂はおもに縦方向を取る。家屋は総戸数800戸中全壊8戸、小破約半数である。岸壁にき裂を生じ、又幾分傾斜を来たしたが将来崩壊する恐れがある。	
	被害	港湾施設	港首西岸岸壁は全延長140メートル間にき裂を生じ他の数箇所に若干の被害を見た。港外の南東方の大浜においては揚陸場に局所的の被害を生じた。港内水深は地盤の隆起により浅くなった。	
		分図No.45参照	海岸建築物	被害内訳(全建築物数800戸) 地震に因るもの 全壊 8戸 床下浸水 50戸 小破 400戸(不確実)
			船舶	
			その他	

附図第10

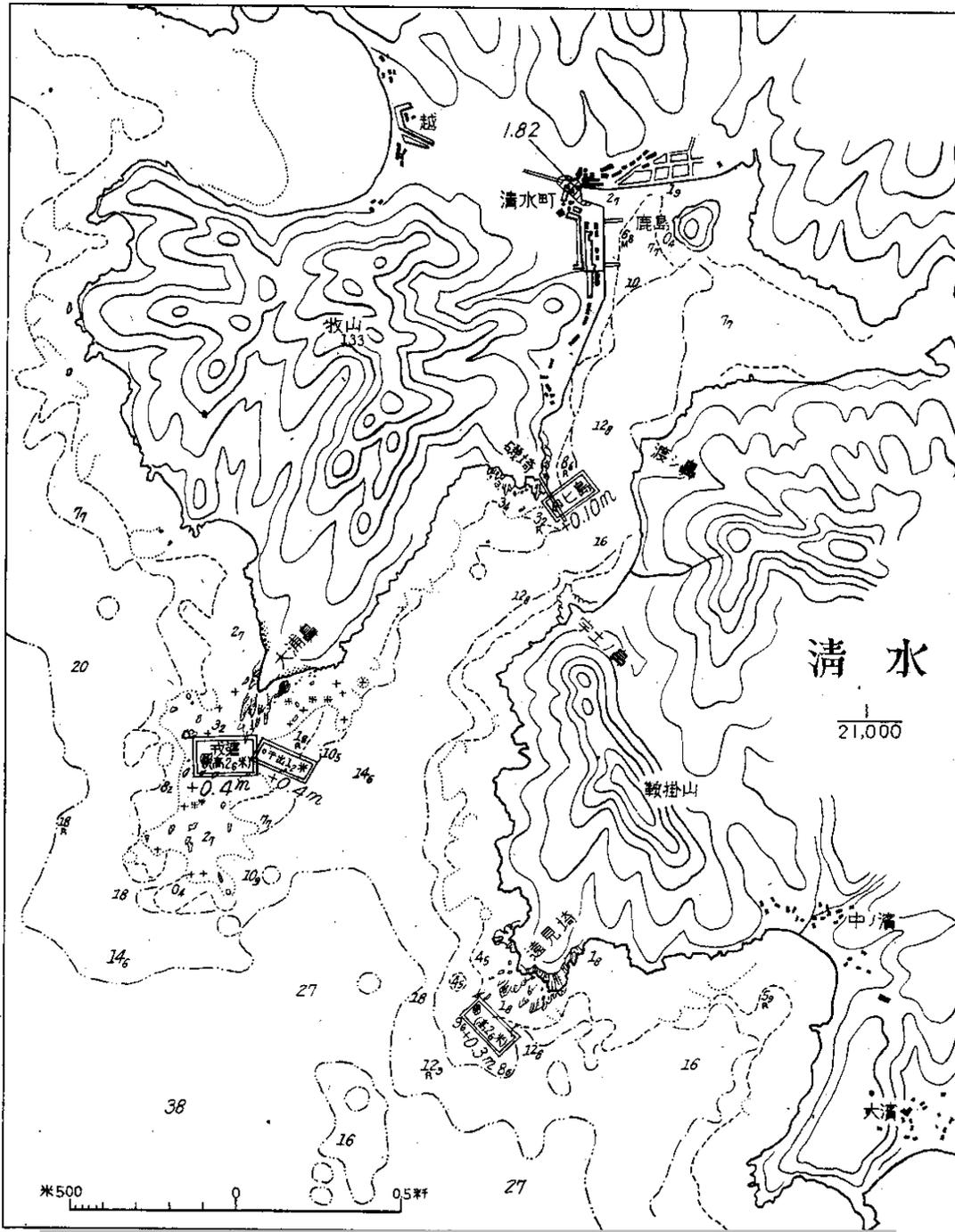


浸水区域



市街又は村落

分圖 No.45



記載例		
	数值	浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值	水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值	地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)		験測線
		海面における矢符は津波の進行方向
		+ 隆起 - 沈下 + 隆起 - 沈下

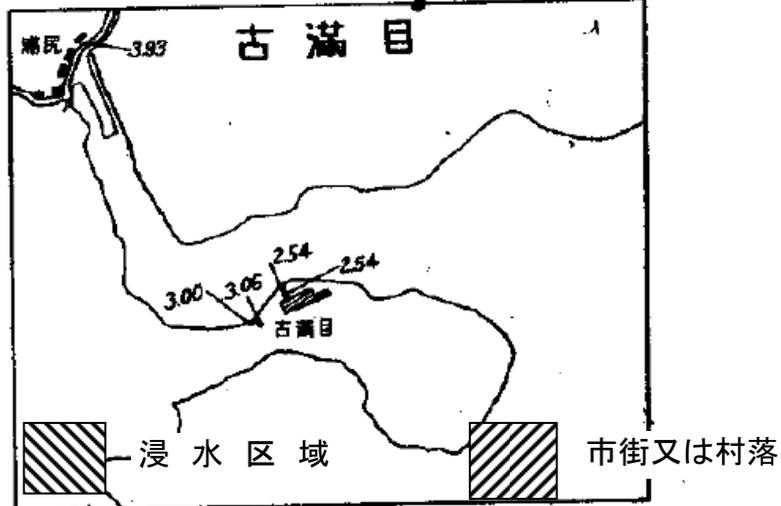
調査結果 高知県

地名	調査項目	内容	
古満目・浦尻	津波	津波の状況	普通津浪による被害大な所は足摺埼で終りの如く考えられていたが、予想外であったのがこの古満目港である。特に湾奥の浦尻での津浪は高さ3.93メートルに及び被害又大であった(写真No.18, 19参照)。古満目では震後30~40分位で第1波来襲し、大きいもの4回で第3波が最高であった。又第1波来襲前大潮の低潮面より約1.5メートル位引いたという。又津浪は静かに高潮性で来た。湾口での波高は2.54メートルであった(附図No.10参照)。(古満目)
		海面の状況	湾内潮流は前後運後はあったが渦巻はなかった。港内は1週間位濁っていた。(古満目)
		海震	古満目沖3マイル附近では家に居て受けるよりも激しい震動を受け激流の為5馬力の船が進行し得なかった。(古満目)
		発光現象	沖合3マイル附近に出漁中の漁船は北方にパツパツと電光のような光を見たが陸上の者は知らなかった。(古満目) 光は東方にピカリピカリと光ったが電雷光のようではなくにぶいものであった。又燐鑛採掘人が見た所に依れば東方の山が各所光ったが崖崩れであったろうという。(浦尻)
		その他	漁獲は一般に震後不振であるが地震後20日間位は鰯が比較的多くとれた。(古満目) 漁獲には大した変化はない。(浦尻) 地震前どんよりした気持ちの悪い日が続いた。(浦尻)
	地変 分図 No.46 参照	地盤の隆沈	古満目港口南東方の2.4メートル水上岩の測定結果に0.2メートルの沈下である。潮の状況よりして古満目部落の岸壁は約0.6~0.9メートル程度沈下したと見られるがこの沈下は局部的のものようである。しかし一般的の傾向としては古満目港口南西の干出0.6メートルばえ等の状況よりして幾分沈下したようである。(古満目) 海岸の状況からして一般には0.2メートル程度沈下したものと見られる。(浦尻)
		海岸線の変化	震時に古満目埼北側突端附近に小がけくずれが出来た。又古満目の北側対岸のやや東寄り附近に震後5日目に大がけくずれを生じ附近に相当の震動が感ぜられた。(古満目)
		井水の変化	震後かれたがその一部は4~5日で復旧した。1箇月ぐらい赤色のどろ水となったが1箇月半にして復旧した(古満目) 震後混濁及びから味を生じたが1箇月半を経過するもまだから味を帯びている。(浦尻)
		地震動の状況	振り時計は全部止まり、一部に落ちたものもある。墓石は5割ぐらい転倒し、その方向はおもに北側であった。総戸数約110戸中かわらの全部落ちたもの10戸、局部的に落ちたもの残り全部で、土台が狂い、戸の開閉困難な家屋はほとんど全部である。(古満目) 墓石は東側に倒れた。又位置の移動は主として時計の回転と同一方向である。(浦尻)
	被害 分図 No.46 参照	港湾施設	古満目港岸壁は140メートル間が全壊し、係船、荷役に大支障を来たした。又漁業会事務所及び同倉庫は岸壁の崩壊により傾斜し使用不能となった。(古満目) 堤防は5箇所(延長150メートル)に決壊を見た。(浦尻)
		海岸建築物	被害内訳(全建築物数110戸) 全壊 6戸(内住家5戸、非在家1戸) 半壊 65戸(住家) 床上浸水 100戸(全壊、半壊を含む) (古満目)
		船舶	被害内訳(全船舶数114隻) 岸壁係留中 114隻 全壊1隻、半壊3隻、小破27隻 (古満目) 10隻に流失を見た。(浦尻)

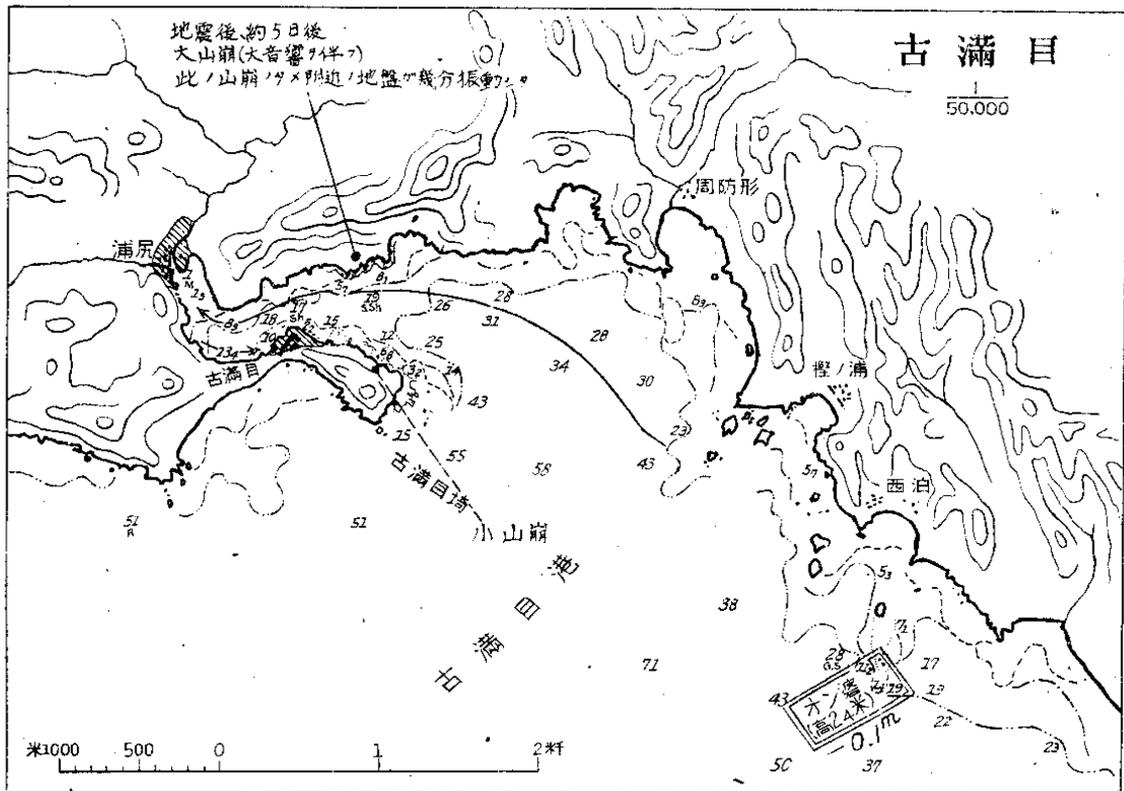
調査結果 高知県

	<p>その他</p>	<p>古満目港は一見するとき地震のき裂により生じたように鋭く湾入しその水深も比較的深く両岸の山地はがけを成しており平地はほとんどない。古満目部落は港南岸中央附近の湾曲部にあり、港首には浦尻部落がある。水深は港口で20メートル、港の中心部でもなお18メートルを示し船舶の避泊港としては良好であるが水深過大の欠点がある。本港における津浪は古満目岸壁で3.0メートル、港首の浦尻で3.9メートルを示しなお津浪被害の顕著な所として注目されたがき裂状の海岸、形状等の関係は特に考慮に値する。(浦尻)</p>
--	------------	--

附図第10



分圖 No.46

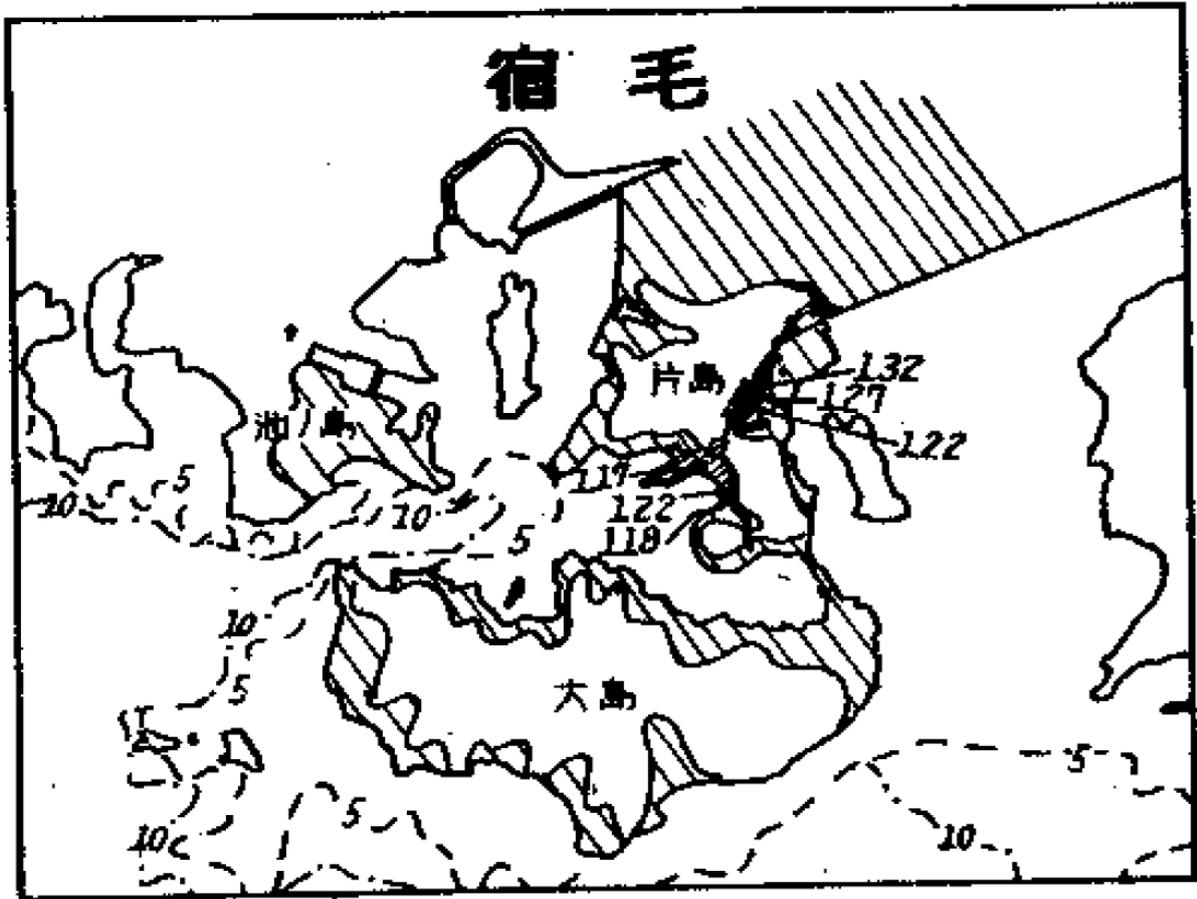


記載例	
	数值 浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数值 水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数值は隆沈量
	数值 地水点 地理調査所水準標、数值は隆沈量
(A) - (B)	験測線
	海面における矢符は津波の進行方向
	+ 隆起 - 沈下 + 隆起 - 沈下

調査結果 高知県

地名	調査項目	内容																								
宿毛（片島）	津波	津波の状況	震後20分位で大潮の低潮面位迄引き後第1波来襲し、大きいもの4回、第3波が最高で波高は海岸附近の民家では1.32メートルであった（附図No.10参照）。																							
		海面の状況	潮流は前後運動が主であったが所により小さい時計の方向の渦流を生じた。海水は1週間から10日間位濁った。																							
		海震	出漁中浪が高くなり上下に非常に激しく小波を伴って震動した。																							
		発光現象	宿毛湾中央付近に出漁中の船は北東の空に相当明るい雷光のような光を見た。又南西方向に青白いソッパツと光る弱い光を2回見た。																							
		その他	地震後よりあじ、さば、めじか、いわし等の漁獲は現在（昭和22年2月6日）に至るも皆無に近い。																							
	地変	地盤の隆沈	片島港池ノ島東端の水路局基本水準標の測定結果は0.3メートルの沈下である。一般的に見ると片島、大島等は0.9メートル程度沈下したものとされているが実際には大島においては昭和22年2月の大干潮特に例年通り船底を焼く予定であったが今年は潮が引かないためこの作業は中止となりついに造船所に依頼するのほかなきに至った。																							
		海岸線の変化	大島の西から東にかけ海岸線に平行に割れ口15～30センチメートルぐらいの地割れが多数出来た。																							
		井水の変化	震後20日間ぐらい、でい水化した。																							
	分図No.47参照	地震動の状況	<p>振り時計は全部止まり、宿毛市街地では墮落したものは相当数に達した。墓石は2割ぐらい倒れたがその方向はおもに北東又は南西である。又位置の移動はおおむね時計の回転の反対方向を取るようである。家屋は大部分が土台に狂いを生じ、戸の開閉は困難となった。かわらは市街地では相当に落ちた。壁、障子、ふすまにはき裂を生じたがその方向は横又は斜である。地動に困る家屋の被害は次の通りである（総戸数的 3,500戸）。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>大島</th> <th>片島</th> <th>宿毛市街地</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全壊</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>34</td> </tr> <tr> <td>半壊</td> <td>8</td> <td>0</td> <td>80</td> </tr> <tr> <td>小破</td> <td>20</td> <td>0</td> <td>残りのほとんど全部</td> </tr> </tbody> </table>		大島	片島	宿毛市街地	全壊	6	1	34	半壊	8	0	80	小破	20	0	残りのほとんど全部							
		大島	片島	宿毛市街地																						
	全壊	6	1	34																						
	半壊	8	0	80																						
	小破	20	0	残りのほとんど全部																						
	被害	港湾施設	片島よりその北方の小深浦に至る防波堤全壊、大島東側岸壁延長50メートル半壊、片島南東護岸100メートル全壊。																							
海岸建築物		<p>被害内訳（全建築物数3,500戸） 町役場の報告 全壊 99戸 半壊 185戸 床上浸水 90戸 床下浸水 100戸 津浪に因るもの（漁業会の報告） 地震に因るもの（漁業会の報告）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>大島</th> <th>片島</th> <th>大島</th> <th>片島</th> <th>宿毛町内</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>床上浸水</td> <td>50戸</td> <td>40戸</td> <td>全壊 6戸</td> <td>1戸</td> <td>34戸</td> </tr> <tr> <td>床下浸水</td> <td>50戸</td> <td>50戸</td> <td>半壊 8戸</td> <td>—</td> <td>80戸</td> </tr> <tr> <td>小破</td> <td>若干</td> <td>若干</td> <td>小破 20戸</td> <td>—</td> <td>3,100戸</td> </tr> </tbody> </table>		大島	片島	大島	片島	宿毛町内	床上浸水	50戸	40戸	全壊 6戸	1戸	34戸	床下浸水	50戸	50戸	半壊 8戸	—	80戸	小破	若干	若干	小破 20戸	—	3,100戸
		大島	片島	大島	片島	宿毛町内																				
床上浸水		50戸	40戸	全壊 6戸	1戸	34戸																				
床下浸水	50戸	50戸	半壊 8戸	—	80戸																					
小破	若干	若干	小破 20戸	—	3,100戸																					
分図No.47参照	船舶	<p>被害内訳（全船舶数129隻） 出漁中 35隻 係留中 64隻 停泊中 30隻</p> <p>被害軽微</p>																								
	その他	片島大島間を結ぶ大島橋半壊。宿毛港は散在する小島により囲まれ岸線は出入きわめて顕著でいわゆるリアス地形を示している。湾は大島により二分されその東南東に宿毛港、北北西に片島港が見られるが港口はいずれも西南西方向を成す。宿毛町は港の北東方にある。港首附近より宿毛町方面に松田川の作る比較的広い沖積平野が開けている。水深は片島港で5メートル、岸線で3メートル、宿毛港は12メートルで岸壁附近は不出面が見られ至って浅い。本港の津浪は片島岸壁附近で1.2メートルであるが被害を大きくするのは岸線の出入著しいためと松田川の存在並びに平地の低いためと見る。																								

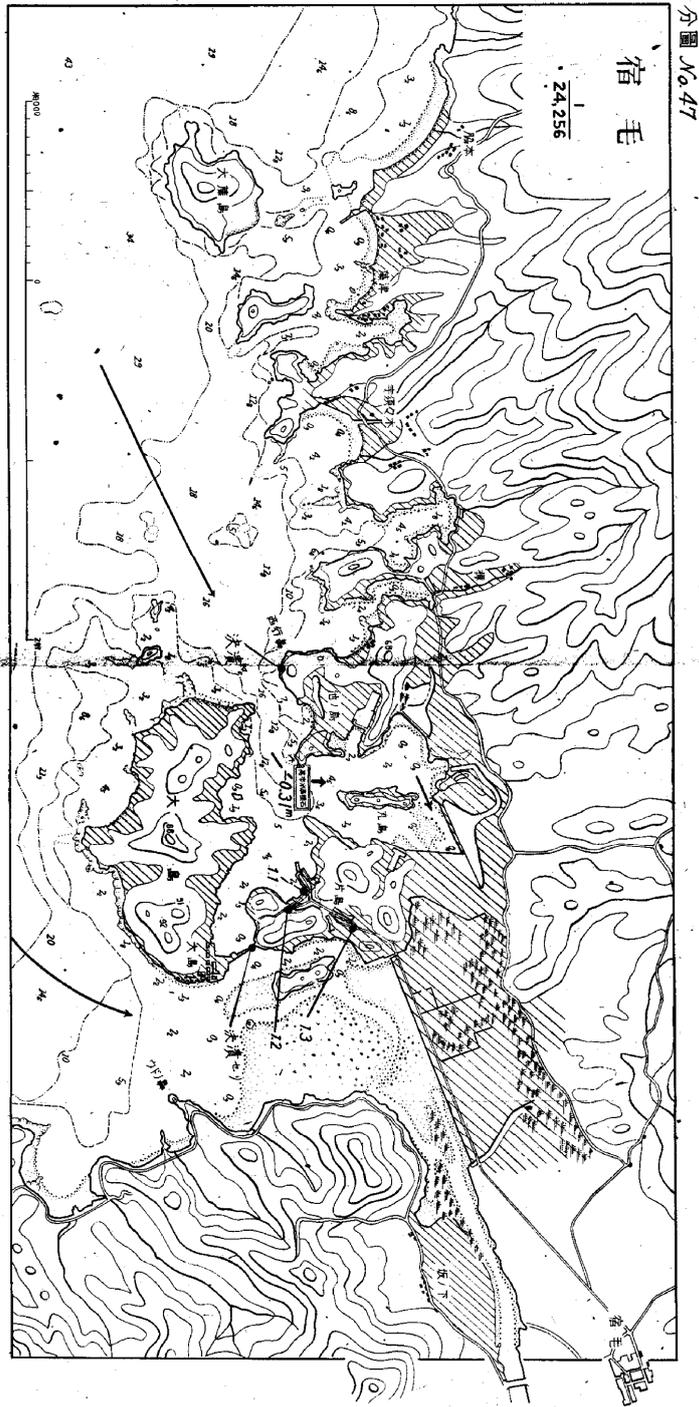
附図第10



浸水区域



市街又は村落



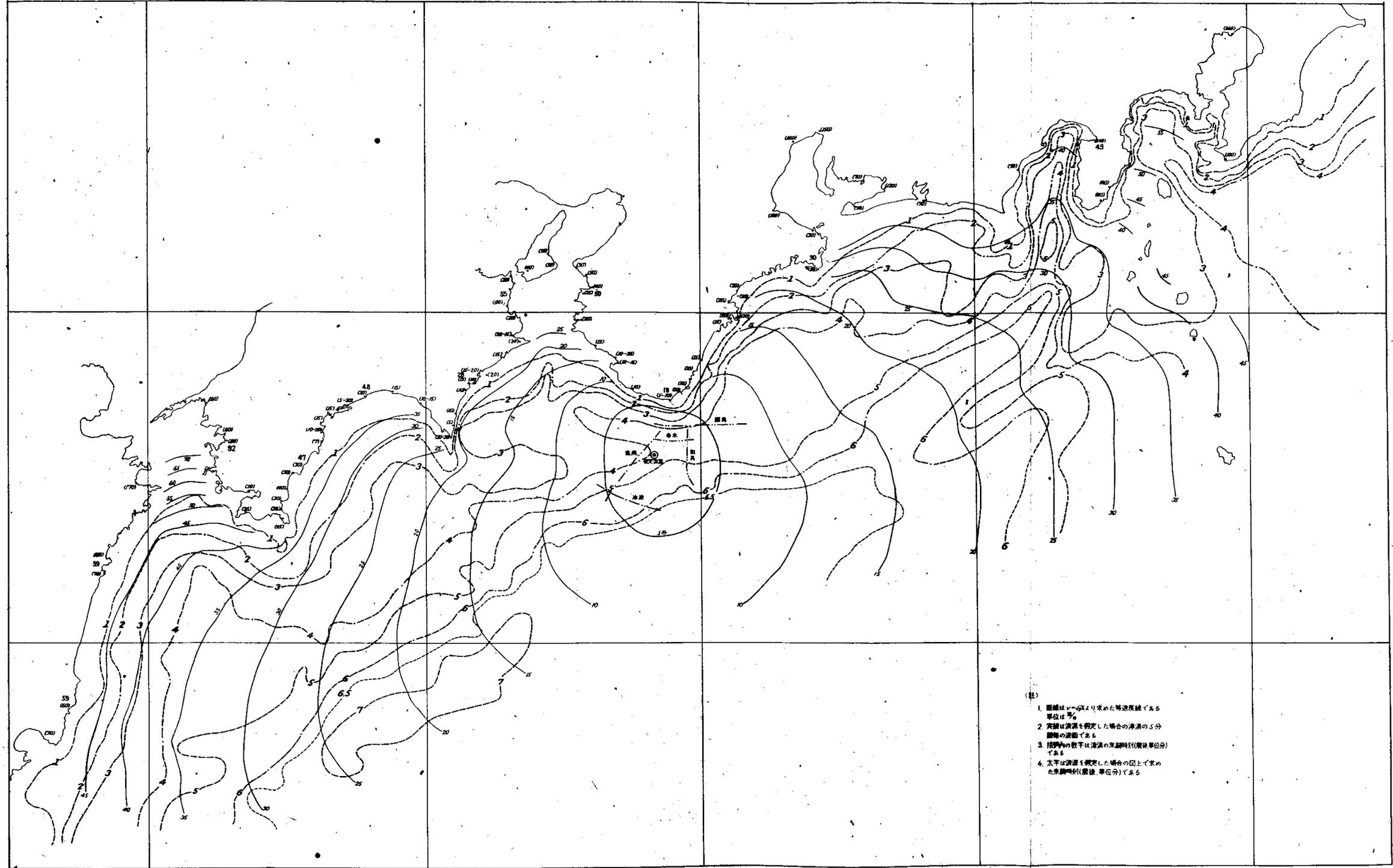
記載例	
	数値 浸水区域、数字は地震時における潮位上の津波の高さ
	数値 水路局基本水準標、水上岩、干出岩、数値は隆沈量
	数値 地水点 地理調査所水準標、数値は隆沈量
(A) - (B)	験測線
	海面における矢符は津波の進行方向

分圖 No. 47

宿毛

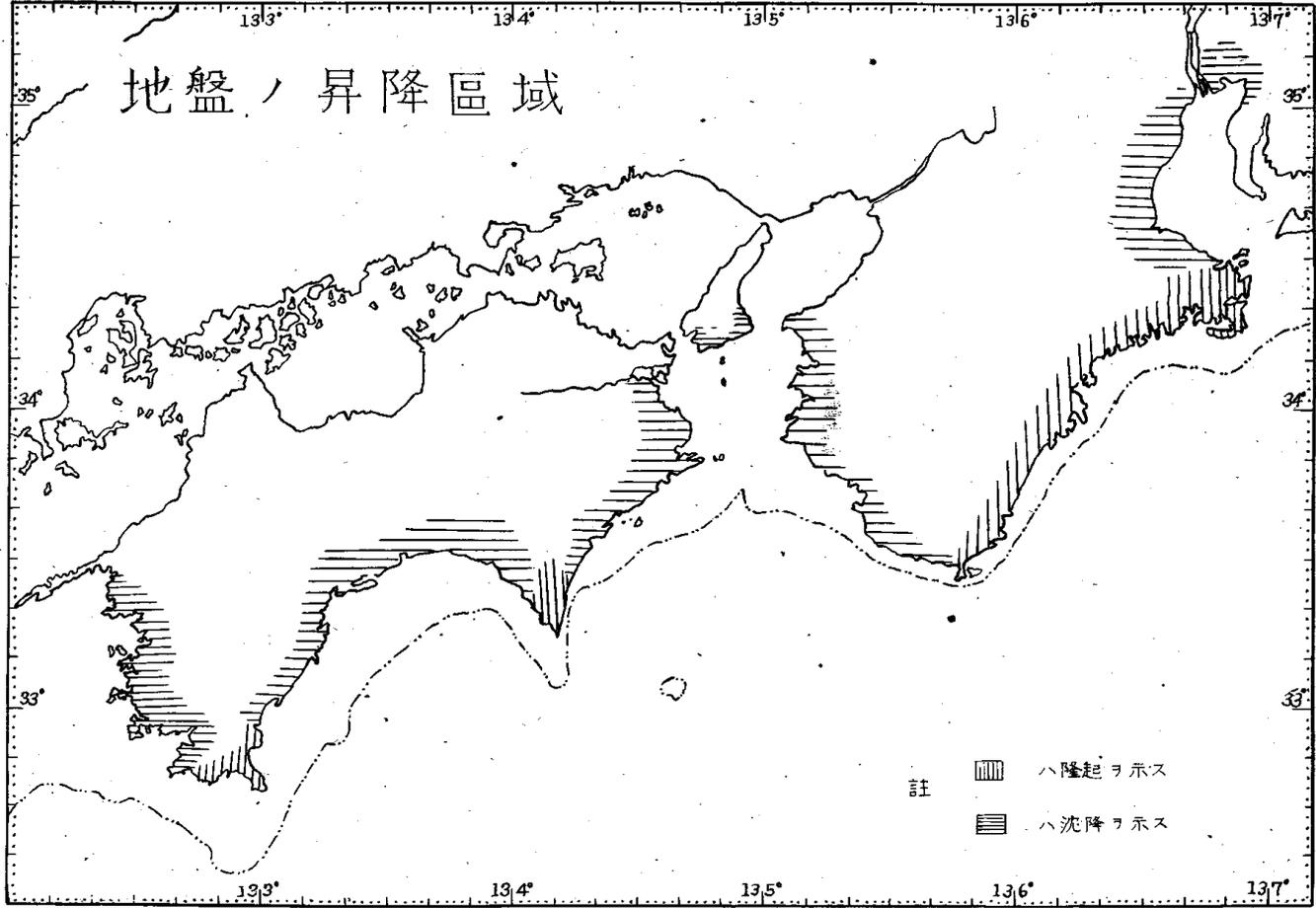
1
24,256

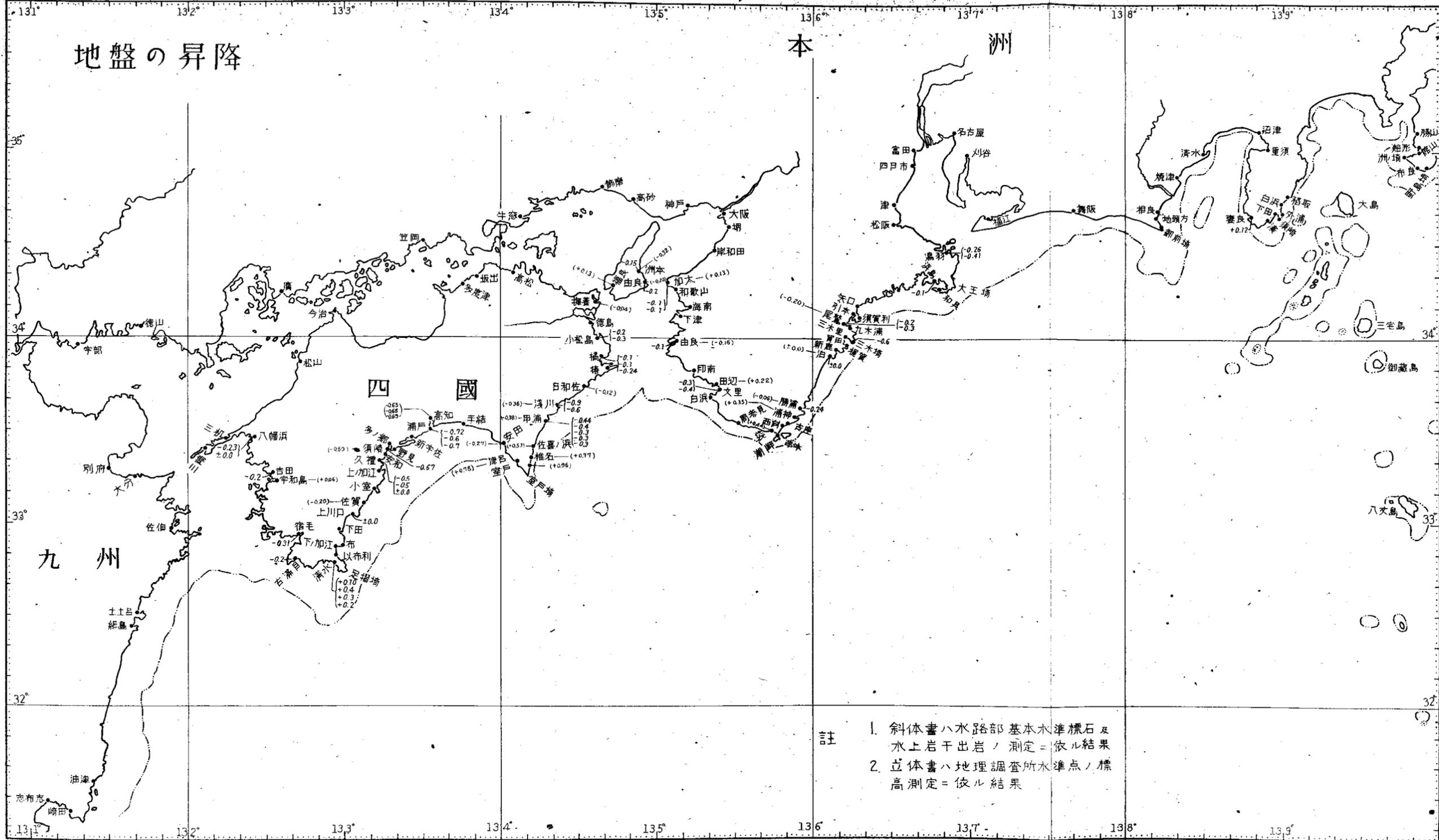
第 1 圖



- (註)
1. 距離は100メートル単位で等速度線である
単位は100
 2. 実際の震度を観定した場合の震度の5分
間の波面である
 3. 括弧内の数字は震度の末数(震後単位分)
である
 4. 太平洋を震度を観定した場合の図上での
最大震度(震後、単位分)である

總圖 10.1

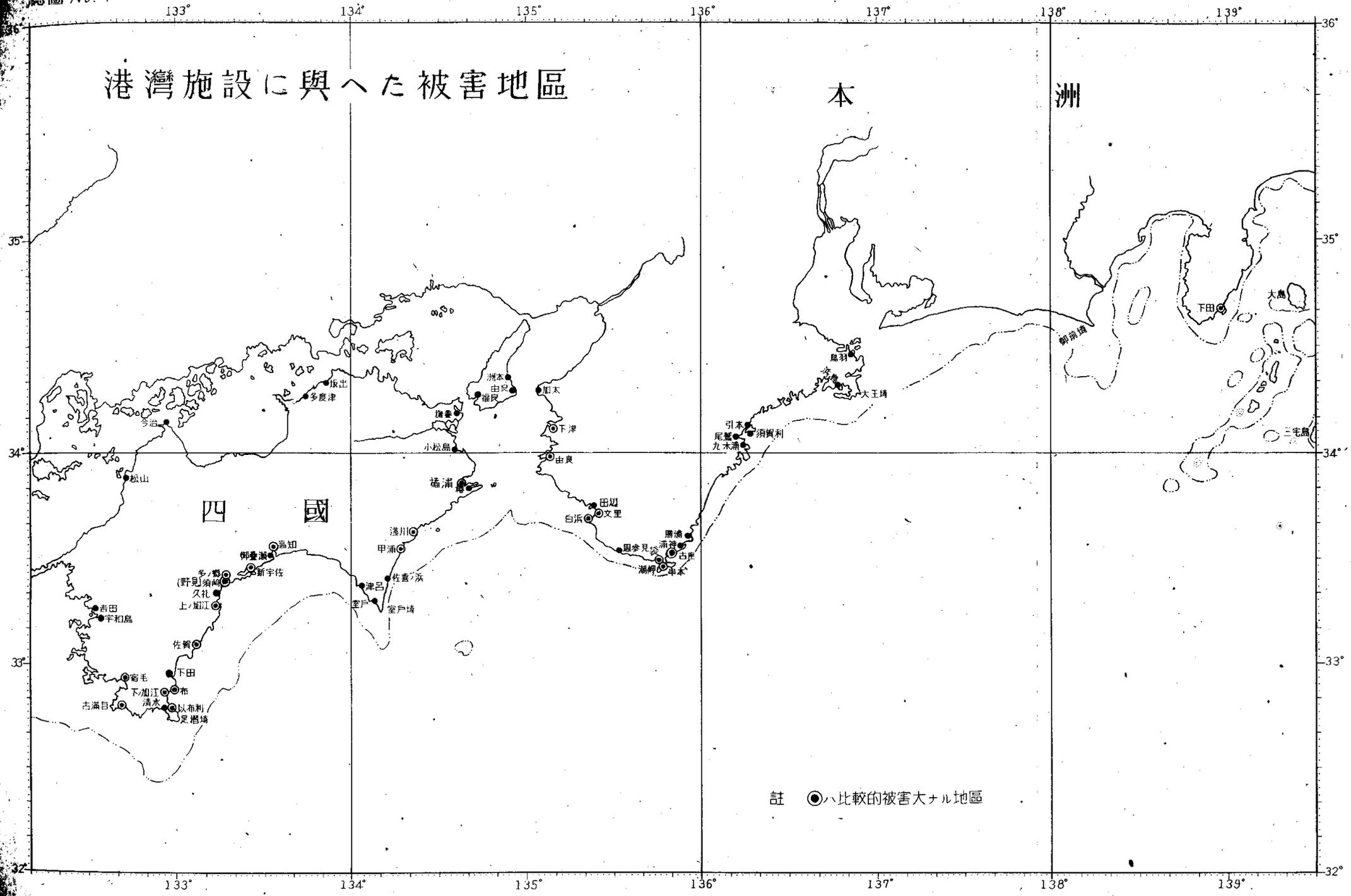


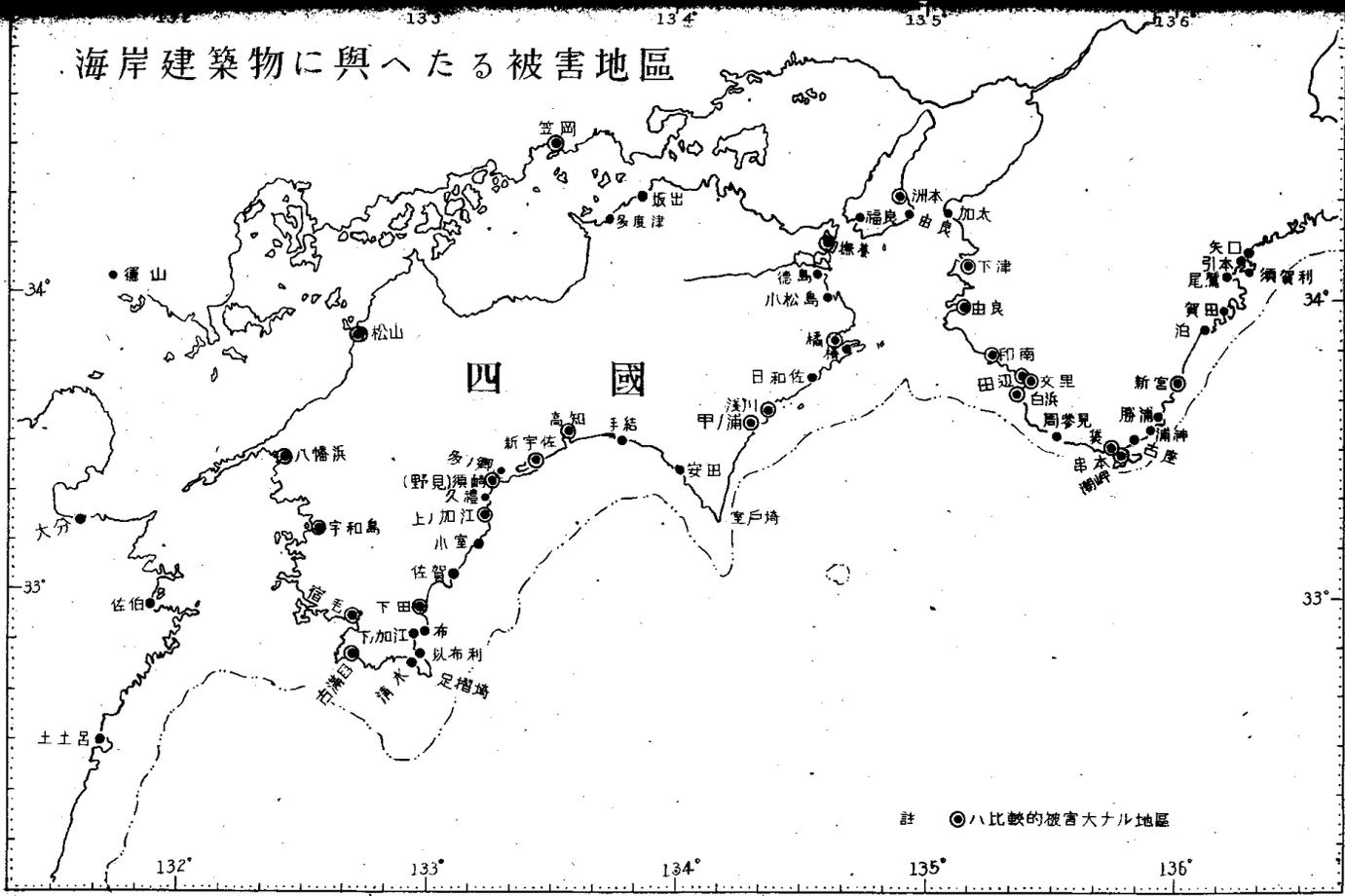


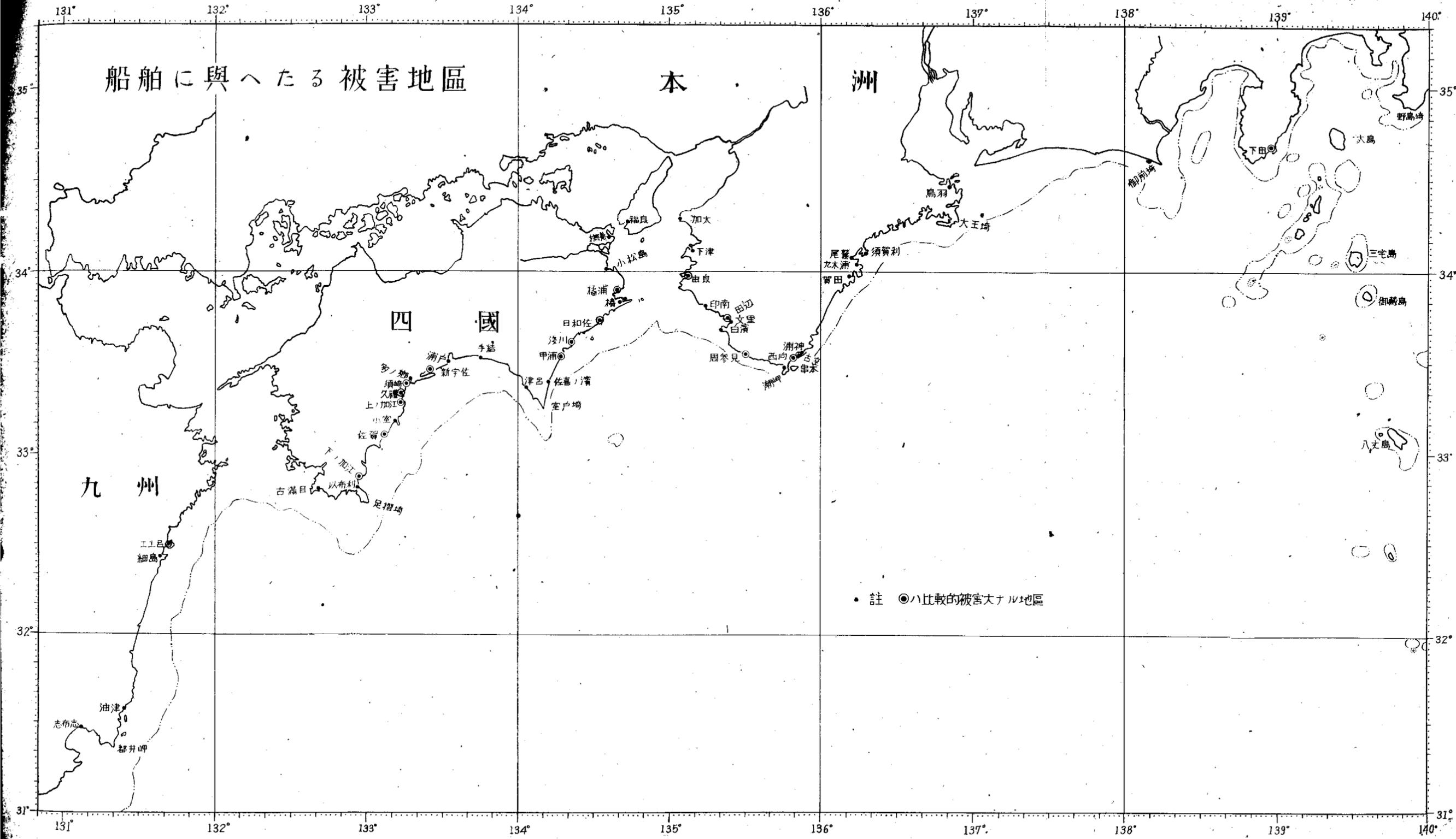
港灣施設に與へた被害地區

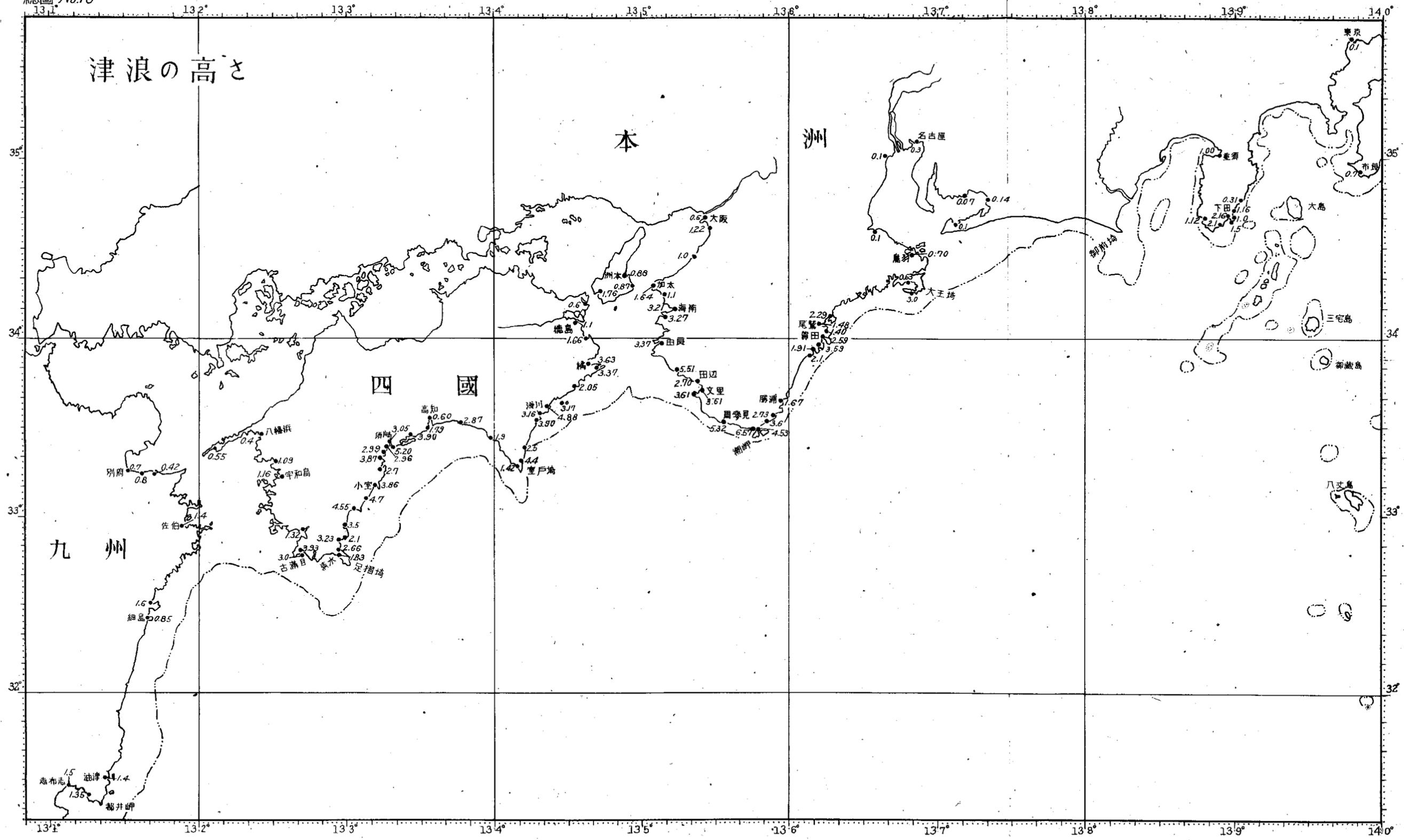
本 洲

四 國









地 名	来 襲 状 況	間 隔	回 数	最大波	来 襲	津波の高さ 〔当時の潮位上〕	平水上の値を 求めるに 加算すべき 常数	速 さ
島 崎	大潮程度の昇降を見た	10			220			緩
布 良		8~14			100	0.7	0.30	緩
洲ノ崎	引潮にて始まる	10~30			110			緩
館 山		30			220			緩
船 形	但し洲ノ崎では初め 幾分潮が増したとい う	10			220			緩
東 京		験潮器にて判断し得る 程度				160	0.1	0.27
稻 取			2			0.3	0.35	
白 浜	高潮の大きい程度		3~4			1.16	0.35	徒歩より稍速し
外 浦			3	2	40	1.0	0.35	"
須 崎		10	2		100	1.5	0.35	徒歩程度
下 田	引潮にて始まる、静かに増水 引潮にて始まるという も正確ならず	30	4	4	40	2.38	0.35	"
湊		4	4	40	2.1	0.35	徒歩より稍速し	
妻良子浦	引潮にて始まる	20	4		100	1.12	0.35	潮波と同程度
重 須	押波	97	4	2	48	1.0	0.50	
沼 津	津波現象なし 昇降差1.3メートル							
清 水	引潮なく海面が高くなる、 昇降差2メートル				170			6~7 kt
焼 津	昇降差1.3メートル				70			
相 良	津波現象なし 波が少々高くな							
地頭方								
御前崎	潮の昇降が平日より大 きい程度	15	8		230			
舞 坂				1	70			10 kt
福 江	験潮器にて判断し 得る程度	20		1	70	0.1	0.80	
前 芝		1	112	0.1	0.76			
豊 橋	50	3	1	120	0.1	0.68		
西 浦				70	0.1	0.87	緩	
名古屋	験潮器にて判断し 得る程度	110	2		150	0.3	0.82	
富 田		1	160	0.1	0.90			
松 坂	40	3	1	100	0.1	0.64		

地名	来襲状況	間隔	回数	最大波	来襲	津波の高さ (当時の潮位上)	平水上の値を 求めるに 加算すべき 常数	速さ	
鳥羽	大潮の大きい程度	15~20	3	2	25~30	0.70	0.40	大人の歩く程度 子供の逃られる程度	
和具	高潮性		5	1	30	3.0	0.41		
浜島	引潮にて始まり、高潮性		3		20~30	0.63	0.41		
須賀利	"		7~8	1	20	1.11	0.36		
矢口	初め引かず、高潮性		8	2	20	2.29	0.36		
引本	引き潮にて始まる	7~10	4	2	20				
尾鷲	初め引かず、高潮性	30	8	2	20	1.48	0.36		大人の駆足程度
九木浦	"		4~5	1	20	1.40	0.36		
三木浦	高潮性					2.14	0.36		
三木里	高潮性			3	30	2.59	0.36		
名柄						2.31	0.36	大人の駆足程度	
賀田	押波性		7~8	2又八4	20~30	3.59	0.36		
曾根						2.83	0.36		
古江						2.53	0.36		
梶賀	高潮性		6	4	30	2.17	0.36	大人の駆足程度	
新鹿	初め引かず、高潮性		3~4	1	30	1.91	0.36		
大泊	引潮にて始まり、高潮性		4~5		15	2.0	0.35	子供の逃られる程度	
古泊	"	7	2	2	15~16	2.3	0.35		
新宮	"		4	2	14~15				
勝浦	初め僅か引く、高潮性		4	2	10	1.67	0.38	大人の駆足より幾分速い	
古座	引潮にて始まり高潮性		3	2	10~15	3.63	0.44	大人の駆足程度	
西向	"		5~6	1	8~10	2.15	0.44	大人の駆足程度	
浦榊	初め僅かに引く、高潮性		3~5	1	10	2.73	0.42		
串本	"		5	3	5~10	4.53	0.32		
袋				3		6.57	0.32	第1波は駆足よりおそい2,3波は早い	
周参見	引潮にて始まり押波性		3	2	10	5.32	0.33		
白浜	初め引かず、高潮性		5	3	5~8	3.61	0.39	大人の駆足よりおそい	
田辺	引潮にて始まり、高潮性	15~20	3	3	10~20	2.70	0.39	5 kt	
文里港	引潮にて始まり押波性		4	1又八3	10~15	3.63	0.39	大人の駆足程度	

地名	来襲状況	間隔	回数	最大波	来襲	津波の高さ (当時の潮位上)	平水上の値を 求めるに 加算すべき 常数	速さ
印南	高潮性		3~4	4	15	5.51	0.25	大人の駆足程度
由良	引潮にて始まり押波性		5	1	20	3.37	0.28	"
下津	初め僅かに引く、高潮性		3	3	25	3.27	0.26	"
海南	引潮にて始まり、第2波は押波性	40	6	2	40	3.21	0.26	6 kt
和歌山		20	4		50	1.1	0.20	5~6 kt
加太	高潮性		3	2	30	1.6	0.12	大人の駆足程度
岸和田					100	1.0	0.30	8~10 kt
堺	引潮にて始まる	60	4	1	131	1.22	0.30	
大阪		40~60	3		120	0.5	0.30	
洲本	高潮性		3	2	50	0.9	0.06	
淡路由良	"		2	1又は2	30	0.9	0.01	自動車の全速程度
副良	"		5	1	40~50	1.76	0.34	大人の駆足より速い
撫養	大潮程度		2~3		30	0.6	0.34	
徳島	引潮にて始まり高潮性	145	3	1	40	1.1	0.30	
小松島	引潮にて始まり高潮性 (大潮の低潮より更に 0.3メートル程引く)		3	2	250	1.66	0.33	自動車程度
橘浦	初め引かず、高潮性	30	7	2	20~25	3.63	0.33	大人の駆足以上
樺	引潮にて始まり、湾奥 では押波性		3	3	15~30	3.36	0.33	"
日和佐	初め引かず、湾奥では 押波性		3	3	15	2.05	0.43	自動車程度
浅川	湾奥では押波性		3	2	13~20	4.88	0.43	大人の早く走る程度
出羽島	初め引いたというも不 確実	10	5	1	20	3.17	0.43	"
鞆奥	引潮にて始まり押波性	10	3	1	10	1.61	0.43	大人の走る程度
那佐	初め引かず、高潮性	10	3	1又は2	直後	3.73	0.43	"
穴喰	引潮にて始まり高潮性		3	2	15	3.16	0.43	"
甲浦	"		6	2	15	3.90	0.43	
佐喜浜	高潮性		1	1	10	2.5	0.44	
椎名	"		1	1	3~5	4.4	0.44	
津呂	引潮にて始まり押波性	10~15		1	20~30	1.42	0.44	大人の駆足よりはるかに早い
安田	高潮性		1	1	10~15	1.9	0.44	
手結	初め引かず、高潮性		6	1	15	2.87	0.44	自動車の速さ

地名	来襲状況	間隔	回数	最大波	来襲	津波の高さ 〔当時の潮位上〕	平水上の値を求めるとに計算すべき 常数	速さ
高知	高潮性	60	4	4	20	0.6	0.30	逃げられる程度
御豊瀬	引潮にて始まり高潮性	60	4	2	10	0.92	0.39	6 kt
浦戸	"	20~25	3	3	30	1.79	0.39	9 kt
新宇佐	引潮(2メートル程)にて始まり押波性		3	3	5~20	3.90	0.42	大人の駆足程度
須崎	引潮にて始まり高潮性	40	3	1	10	2.96	0.42	自動車の速度
多の郷	初め低潮より1メートル以上引いて後押波性	20~30	5	3	15~20	3.03	0.42	大人の駆足程度
野見	湾奥では押波性	60	6	3	15	5.20	0.42	大人の駆足より早い
安和	引潮にて始まり高潮性		3	3	15	4.7	0.42	
久礼	" 〔低潮より1.5メートル引く〕	10~20	6	3	10~20	3.3	0.42	6~7 kt
上の加江	初め引かず、高潮性	5	3	3	7	2.7	0.42	1波大人の駆足程度3波は自動車の速さ
小室	初め低潮より2メートル位引く、高潮性		3	3	6	3.86	0.44	大人の駆足程度
佐賀	初め低潮より1メートル位引く、高潮性	15~20	3	2	30	4.7	0.44	"
上川口		30	5	4	30	4.5	0.44	
下田	初め低潮より2メートル位引く、高潮性		3	1	40	3.5	0.44	大人の駆足より早い
下の加江	初め低潮より2メートル位引く、高潮性	15	6		30	3.23	0.44	大人の駆足程度
布	高潮性		6	3	30	2.1	0.44	
以布利	初め低潮より2メートル位引く、高潮性		5	5	30	2.7	0.44	大人の駆足程度
清水	引潮にて始まり高潮性	20	5	2	20~30	1.86	0.50	大人の歩く程度
古満目	初め低潮より1.5メートル位引く、高潮性	5~6	4	3	30~40	3.96	0.50	大人の駆足程度
片島	初め大潮時の低潮位引く、高潮性	30	4	3	30	1.32	0.52	
宇和島	初め引かず、高潮性	70	4	2	80	1.16	0.32	
吉田	高潮性	20	10	6	60	1.1	0.42	
八幡浜	幾分推量が増した程度				60	0.4	0.46	
三崎	高潮性	15			60	0.55	0.61	
内浦						0.1	0.61	
三机	津波の現象なし							
牛窓	地震後海面が0.3メートル位盛り上がる							
高松		56	5	4	186	0.25	0.63	
別府	引潮にて始まり、うねりの大きい程度				210	0.7	0.40	大人の歩く程度

地名	来襲状況	間隔	回数	最大波	来襲	津波の高さ 〔当時の潮位上〕	平水上の値を求めると加算すべき 常数	速さ
大分	引潮にて始まり、高潮性	120	7		238	0.8	0.40	大人の歩く程度 " "
大野川	初め引かず		3	2	130	0.42	0.33	
佐伯	引潮にて始まり、高潮性	30~40	3		170	1.4	0.10	
土土呂	高潮性	20		3	60	1.6	0.20	
細島	初め引かず、高潮性	45	3	3	70	0.85	0.32	
油津	引潮にて始まる	40	3	3	60	1.4	0.20	
崎田	"	40	3	3	70	1.35	0.30	
志布志		40	3	3	40	1.5	0.20	

附表No.5

被害一覽表

項 地 目 名	港 湾	建 築 物							船 舶					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考		
		全 建 物 数	被 害						全 船 舶 数	被 害				破 壊	流 失						
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破	床 浸 上		床 浸 下	流 失	沈 没	全 壊							中 破	小 破
伊豆 下田	護岸1ヶ所大破	1880				2		140	146		5	15	22	23	33		1	相当あり			
清水																					係留中の船の系索 切断せるもの若干 かき養殖だな流失 破壊せるもの若干
焼津																					係留中の船の系索 切断せるもの若干
地頭方																					塩田にわずかの被 害あり
相良																					塩田にわずかの被 害あり
御前岬										3											
鳥羽	1.岩崎さんばし破壊 2.中之郷附近沈下のため 高潮時に岸壁浸水すた だし昭和19年の地表に よる									45	1			5							
須賀利	岸壁破壊(約50m) 1ヶ所				3		50							2							
矢口					2		12														

項 地 目 名	港 湾	建 築 物								船 船					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考
		全 建 物 数	被 害							全 船 船 数	被 害				破 壊	流 失				
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破	床 上 水	床 下 水		流 失	沈 没	全 壊	中 破						
浜 島	堤防破壊 2ヶ所																			
引 本	堤防破壊(約430m) 2ヶ所	950			15	15	70	29	100								1200石		田畑浸水14町7反 真珠いかだ200流 失	
尾 鷲	船だまり全破(地震による) 堤防小破(津波による)				1				60	170			7		12					
九木浦				1	1				3		11								流失のうち6隻は 漁船	
賀 田		980		18	5	2		126	30	102			3		3					
泊 村		270			6	24													建築物の被害はほ とんど古泊 被害は地震による	
新 宮		6800	2398		600	1000											2000		昭和22年 人口31,125	
勝 浦	岸壁き裂、崩壊数ヶ所	1300			2	13		73	324									き裂に よる1	田畑浸水4反歩	
浦 神	湾奥の護岸破壊数ヶ所	800		1	3	25	74	30	120	106				4	5	1	1		被害の大部分は津 波による	

項 地 目 名	港 湾	建 築 物							船 船					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考	
		全 建 物 数	被 害						全 船 船 数	被 害				破 壊	流 失					
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破	床 上 水		床 下 水	流 失	沈 没	全 壊							中 破
古 座	岸壁崩壊、埋立地流失 導水堤全壊(全長約50m)	820			3			11	91	96	1		7	58		1 津波				田畑浸水13町5反
西 向					3 地震			2	1											
串本及び 袋附近	漁業会前岸壁き裂により 若干崩壊	2000		99	50	113	1153	264	321	200			5	35	46	1		数ヶ所		
周 参見	岸壁及び護岸破壊各1ヶ 所	900		30	20	50	500	270	300	109	1	1	11	60	30					被害家屋600軒(床 下浸水及び小破家 屋は重複す)
白 浜	網不知の岸壁破壊	1000		24	6	41	200	306	36	65	15					2	小破壊 数ヶ所			被害は地震による
田 辺	堤防破壊2ヶ所	7800		54	29	104		490	354	282	80		1	39	77	1		1000石		
文 里	1. 大阪商船発着所附近埋 立岸壁破壊 2. 跡ノ浦岸壁全壊	1100		162	173	446		121	30	46		28	5		5			鉄道 4		田畑浸水80町歩 (跡ノ浦を含む)
印 南		600		6		15		200	400	51			23	8						田畑浸水80町歩
由 良	堤防破壊約4割	1115		13	53	541		594	52	100	10		20	11	18					床上浸水は全壊半 壊を含む
下 津	岸壁破壊9ヶ所(全長約 250m)	1290			11	6	500	570	50	185				7	10					小破家屋は半数床 上浸水を含む

項 地 目 名	港 湾	建 築 物							船 船					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考	
		全 建 物 数	被 害						全 船 船 数	被 害				破 壊	流 失					
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破	床 上 水		床 下 水	流 失	沈 没	全 壊							中 破
加 太	防波堤及び岸壁小破(数ヶ所)(地震による)				2	2				175	2		4	20						港湾家屋被害は地震による
淡 路 由 良	波止場小破(3ヶ所)				4	32	113			400								1	被害の大部分は地震による	
洲 本	北防波堤崩壊(約20m)	7849			125	178	392													
福 良	護岸小破数ヶ所、駅南東の堤防流失(10m)	2200			2-3	100	788		415		2			20			1		家屋の被害は地震による	
撫 養	川口東岸附近の岸壁崩壊2ヶ所	3300			60	135			230		5	3	2	10						
徳 島					60	31														
小 松 島	岸壁の局部的沈下により若干破壊	5000		2	8	62	4530			110	1		2	2	2					
椿 泊	岸壁崩壊前部、須屋 - 土ヶ鼻全壊	1200		14		61		166	100	188	4	1	7	10	5					被害の大部分は津波による
橘 浦	堤防延長破壊(4188m) 堤防延長破壊(2792m)	1290		50	53	196		867	66	125	24		31	18	9			5300石		被災戸数1165戸、床上浸水は全壊半壊を含む
日 和 佐					2	72		59	180		15	3	50			1	1000			

項 地 目 名	港 湾	建 築 物							船 舶					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考	
		全 建 物 数	被 害						全 船 舶 数	被 害				破 壊	流 失					
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破	床 上 水		床 下 水	流 失	沈 没	全 壊							中 破
浅川	護岸及び岸壁崩壊各1ヶ所	900			263	150		65		170	10	3	73	42						
甲浦	護岸その他数ヶ所破壊	900		6	15	2	450	300	100	182		1	5	75	90		3	2		小破家屋450戸のうち50戸は地震による
佐ノ喜浜	護岸数ヶ所破壊(地震による)									25		1			12				定置網 1中破	
室戸	防波堤のき裂若干(地震による)									27										
津呂	防波堤崩壊(約20m)防波堤のき裂若干(約60m)									83					3					被害は地震による
安田		1500			6	19	30			214										被害は地震による
手結		150			2	3	26	30	10	31					10					被害は地震による
高知	岩松町物揚全壊(460m)埋立地岸壁破壊沈下海岸防波堤崩壊数ヶ所	2700	2		1689	2822		3286									18			床上、床下浸水はおおむね半数ぐらいずつ
御畳瀬	岸壁破壊2ヶ所	350						30	30	253	15		1	29						被害(家屋)地震による
浦戸										77	2	1			13	1				

項 地 目 名	港 湾	建 築 物								船 船					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考	
		全 建 物 数	被 害							全 船 船 数	被 害				破 壊	流 失					
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破	床 上 浸 水	床 下 浸 水		流 失	沈 没	全 壊	中 破							小 破
新宇佐	岸壁破壊数ヶ所	1400	142	303	130	323	500	1100	100	234	34		136	12	16		1	13			床上浸水は半壊以上の被害全部を含む
須崎	北東部岸壁全壊商船さんばし附近岸壁崩壊、その他被害4ヶ所東部埋立地岸壁崩壊数ヶ所	2500			266	88		970	113	414	45		130	225				3	石 28320		
多ノ郷	大間川口南岸壁半壊、大間川口東岸壁全壊、櫻川堤防全壊、富士ヶ鼻北東方河口護岸破壊	600	226	46	25	34		194		174	3	4			5		1	10			多ノ郷村全体として226戸の焼失家屋あり
野見	野見非東岸壁半壊宮ノ谷全壊2ヶ所	500		71	35	30		228		266	21		2	1	3			3			
久礼	船だまり岸壁崩壊(若干)	1300		3	2	5		100	300	180	6		2	4	42		4	18			一部久礼を含む
上ノ加江	北防波堤破壊、北船だまり防波堤破壊(約60m)南船だまり防波堤全壊(約56m)南船だまり東埋立地流失(約2万坪)	1000	378	36	70	298		210	168	149	17		24	23	9			70	400石		焼失家屋は床上浸水を含む
小室					1	1	10	20	10	30	2		3	10	15						
佐賀	橋下北側岸壁流失(約6m)橋下南側岸壁半壊(約28m)船だまり堤防西側流失(約20m)	800			35	50	20	30	100	263	11		19	34	119			40			

項 地 目 名	港 湾	建 築 物								船 船					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考
		全 建 物 数	被 害					全 船 船 数	被 害				破 壊	流 失						
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破		床 上 水	床 下 水	流 失	沈 没			全 壊	中 破				
土佐下田	四万十川護岸崩壊一部	300			11	289													被害は地震による	
下ノ加江	北船だまり防波堤全壊 南船だまり防波堤破壊	259		2	2	3	230	90	33	144	9		46	25	43				小破家屋は浸水家 屋を含む	
布	防波堤全壊4ヶ所	300			3	11	286			39									小破家屋は浸水家 屋を含む	
以布利	岸壁き裂(延長200m)割 れ口(10cm)	200				14	166			34	1			1	32					
土佐清水	岸壁き裂	800				8	400		50	380										
古満目	岸壁全壊(約150m)	110			6	65		100		114			1	3	27				床上浸水は全壊、 半壊を含む	
浦尻	堤防破壊5ヶ所(計150m ぐらい)										10									
宿毛	月島より小深浦に至る防 水路(堤)全壊 岸壁半壊(約50m) 護岸全壊(約100m)	3500	6		99	185		90	100	129						1		3	町役場報告	
宇和島	波止場半壊1ヶ所 護岸破損数ヶ所				7	34		230				6		2	3					
伊予 吉田	き裂によりさんばし付け 根破損																			

項 地 目 名	港 湾	建 築 物						船 舶					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考	
		全 建 物 数	被 害					全 船 舶 数	被 害				破 壊	流 失					
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破		床 上	浸 水	床 下	浸 水							流 失
八幡浜				26	97		120									25			
三崎 (内浦)					1														
三机					1														
松山	護岸破壊若干			155												20			
今治	さんばし及び岸壁半壊若干															20			煙突破損 4 鳥居倒壊 1
多度津	さんばし破損若干			7	10	25													煙突破損 1
坂出	築港岸壁崩壊(役100m) 若干の地割れあり																		
笠岡				10	116	437									1				
徳山																			煙突破損 1
別府																			湯島に若干の被害 があったが一般に 被害皆無

項 地 目	港 湾	建 築 物							船 舶					橋りよう		道 路 決 壊	木 材 流 失	漁 網 流 失	備 考
		全 建 物 数	被 害						全 船 舶 数	被 害				破 壊	流 失				
			焼 失	流 失	全 壊	半 壊	小 破	床 上 水		床 下 水	流 失	沈 没	全 壊						
大分布	津久見湾岸岸壁破損若干			16	43														
鶴崎町				20	52														
佐伯町					2														
土土呂							52	146		230									
細島							数戸											若干	
油津								66		1~2			2					約50石	5
崎田										1									
志布志													若干						